
ペナルティ

謎沢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペナルティ

【Nコード】

N0140B

【作者名】

謎沢

【あらすじ】

現代の日本にある伝説が生まれようとしていた・・・。

第1話 ペナルティ（前書き）

誤字脱字があつた場合には、報告してください。よろしく願います。

第1話 ペナルティ

歴史れきしの教科書きょうかしょにも参考書さんこうしょ、あるいは塾じゅくのテキストにも載のっていることがある。それがここから始はじまろうとしている。それは、一人ひとりの少年しょうねんに訪おとづれたある出来事できごとからだ。少年しょうねんの名前なまえはペナルティ。小学五年生しょうごうごねいせいだ。

ペナルティは、東京とうきょうの郊外こうがいにあった松丘まつがおか小学校しょうがっこうに通かよっていた。もうそろそろ新学期しんがつきから一ヶ月いっかげつたとうとしていたとき、こんな手紙てがみがペナルティのところへ送おくりつけられてきた。その手紙てがみには、こう書かいてありました。

「この手紙てがみを受け取うけとってくれてどうもありがとう。君きみに用ようがある。ここへ電話でんわしてください。李り」

そしてペナルティはすぐにそこへ電話でんわをした。電話口でんわぐちに李りさんが出でた。そして、いきなり李りさんはこんなことを言い始いはめたのだ。

「君きみには、どうやら正義せいぎと力強ちからつよいい愛情あいじょうがあるみたいだ。だから、君きみにあててこの手紙てがみをあてたのだ。実は、君きみに秘密ひみつでももらいたいことがある。それは、世界せかいにいる悪あくの組織そしきを倒たおしてほしいのだ。君きみにもっと話はなしたいことがある。どうだ。一度いちど、会あってみないか？」
そう言いわれ、よく分わからずにペナルティは、次の日つぎのひに李りさんに指し定ていされた場所ばしょに行いった。

「李りさんですか？ はじめまして。」

話はなによると李りさんは、どうやら謎なぞの任務にんむを任まかせられて日本にほんに来きたたそうだ。李りさんは、何人なんにんの子供こどもたちにペナルティと同じ手紙てがみを一送ひとったが、ペナルティしか返事へんじがなかったそう。

李りさんは、何故なぜ子供こどもを選えらんだかも教えてくれた。この秘密ひみつ任務にんむとは、世界せかいから黒い心こころを持もった人ひとをなくすという任務にんむだった。この任務にんむには、愛あい。そして、友情ゆうじょうがなくてはだめだ。日本にほんの中高生ちゅうがくせいや大人おとなは、周りのことより、自分じぶんのことしか考かんえていない。だから、小学生しょうがくせいの君きみみtainな子こに手紙てがみを送おくったんだ。ぜひ、この任務にんむをしてほしい。」

そして、李^りさんは、ペナルティに聞^きいた。

「この任務^{にんむ}に参加^{さんか}してくれるか？」

ペナルティはこう答^{こた}えた。

「はい、よろしくおねがいます。」

「じゃあ明日^{あした}、最初^{さいしょ}に中国^{ちゅうごく} 広州^{くわうしゅう}に行^いってもら^う。広州^{くわうしゅう}には、マオ
という少年^{しょうねん}が空港^{くうこう}で待^{まち}っている。あと、これをも^もっていきなさい。」

ペナルティにある機^き械^{かい} が渡^{わた}された。

「これは、PET^{ペット}というものだ」

それを取^とって帰^{かえ}って行^いった。

翌^{よく}日^{じつ}、ペナルティは空^{くう}港^{こう}にいた。

親^{おや}からの了^{りよう}解^{かい}を得^えたペナルティは広^{くわう}州^{しゅう}へと旅^{たび}立^だった。

第2話 マオとの出会い

なりた しゅっぱつ ひこうき 成田を出発した飛行機は、広州をめがけてつき進んでいった。初めて言葉の通じない国へ行くことにすこし不安だった。

そして、飛行機は無事に広州に着いた。見慣れない文字で書かれた看板があちこちに並び戸惑ったが、ピアノマンの力でなんとか到着ロビーまでたどり着いた。そして、ピアノマンが言った。

「あの子がマオです。」

その少年は到着ロビーの一角にいた。マオは、ペナルティにこう語りかけた。しかし、ペナルティは緊張していた。

マオたちは空港を出て、宿へ着いた。

部屋へペナルティが入るといきなり後ろから中華包丁を取り出してきた。ペナルティは最初は驚いたが、さらに驚いたことがある。

それは、マオが麻婆豆腐を作ってくれるというのだ。そして、ペナルティは、マオの包丁裁きに何も言えなくなってしまった。

そして、すこし経った。ペナルティの緊張が少し解けた。そして、ペナルティたちは寢床についた。

翌日、李さんから指令があるといわれた。その指令は、こんなものだった。

「麻薬を煮魚と一緒に密売している組織を見つけてくれ。」
というものだった。

マオは友人のシロウとメイリイを連れてきた。

「こちら、メイリイとシロウ。今まで三人で解決して行ったんだ。」
広州にはたくさんのお店や露店がある。その中から麻薬の煮魚を見つけるのは大変だ。

「実は、マオは四川のある料理店の息子で、不思議な力を持っているのよ。」

とメイリイは言った。ペナルティからしてみれば、もうすでに凄い力を見せてもらってしまったように思える。

「そうさ、マオにいは、清（中国の昔の呼び名）ではすごいんだぜ。」
とシロウも言った。

ふとあたりを見まわすと、地下に続く階段から荷物を持ったおじいさんがでてきた。

おじいさんが持っているはこの側面を見て、シロウが言った。

「マオにいい、あのじじいの持っていたはこに、煮魚と書いてあったんだ。」

マオは、シロウの言ったことが気になった。早速おじいさんのところへ行き、一つ味見させてもらうことにしたのだった。

おじいさんは、マオたちを薄暗い地下室に連れて行った。

ペナルティたちは、なにか不吉な予感を感じていた。そして、マオが一口食べた途端、マオは吐き出してしまった。

マオがペナルティに言った。

「これにやはり麻薬が使われていた。なんてことだ」

このとき後ろで、多数の屈強な男たちが、ペナルティたちを囲んでいることに気がつかなかった。

第3話 麻薬王 柳

ペナルティたちは、森の中の幽霊屋敷みたいなところ閉じ込められてしまった。

「くそ、どうしたらいいんだ。」

マオが言った。しかし、ペナルティたちは黙っていた。なんとかナビのピアノマンは取られなかったが、山の中なので連絡もつかない。ただここにずっといなければならないのかと思った。

それを考えると、ペナルティは家にかえりたくなった。しかし、この旅にでたのは、自分だ。これからは、何もかも自分の責任だ。

数日がたったころいきなりペナルティたちは部屋からいきなりだされた。

部屋をでてみると、そこには、おおきな厨房があった。そして、一人の老人がいった。

「柳さまの御成り」

その声とともに、一人の大きな男がでてきた。

「ほう、この小僧がああ劉昂星か、一度みておきたかった。しかし、今日がお前たちの最後となる日だ。」

「ちよつとまった。お前、料理できるんだろ。勝負しろ」
マオが叫んだ。

「よかろう、そうくると思っていた。しかし、もしも小僧がまけたら、お前らを火の中に入れるぞ、しかしわたしがまけたら、お前らを解放し、オレが火の中に入ってやろう。」

「よしわかった。そのしょうぶうけてたとう」
いま、ペナルティのままで料理人たちの熱い火花が飛び散った。

「調理時間は、二時間。判定は自分たちでそれぞれ判定してもらう」

そして戦いはじまった。そのとき、いきなり地鳴りがした。なん

とマオと柳りゅうのいるところが上あががっていた。
なにもできなくなったペナルティたちは、ただ見みているだけになっ
てしまった。

そして、だんだんと料理りょうりができていった。
そして二時間にじかんご後、二人の料理りょうりが完成かんせいした。

マオの料理は、中華風カレーだった。

一方、柳がだしてきたものは、それは、麵めん。しかし、その麵は並大なみだい
抵たいの色いろをしていなかった。

「さあ試食ししょくしてみろ、小僧こぞう」

マオが試食ししょくした。しかし、なにも答えこたえなかった。

「さあ、小僧こぞうどうなんだ？」

マオがいきなり怒鳴どなった。

「何なにを入れたんだ！」

「フッフ、こんなかにはな。毒どくきのこを入れたんだ。さてお前おまえから
死しんでもらうか」

「残念ざんねんだったな、まだ一口ひとくちも入れていないだ。お前おまえは、料理りょうりをなん
だと思おもっているんだ！ お前は料理人りょうりにんとして失格だ。」

「そうさ、どうせオレには、こういう手段しゅだんしかないのさ。お前おまえを少
し甘く見あまくみていたようだな。約束やくそくどおり、お前おまえたちを帰かえし、おれは火ひ
の中なかへまっさかさまだ。どうだたのしいか。はっははは。」

そういうといきなり柳のいた場所ばしょがなくなった。柳は下へ落おちてい
ったのだ。

広州こうしゅうにもどってきたペナルティたちのまえに、李りさんがいた。

李さんはペナルティたちにこう言いった。

「よくやってくれた。そしてありがとう。まだまだ試練しれんはたくさん
あるが、四人よにんで、力ちからあわせてがんばってくれ」

ペナルティたちは上海しゃんはいへ向むかった。

第4話 世界暗黒化計画

この半月ずっと中国にいたこととシロウから中国語を教えてもらったためにペナルティもだんだんと中国語が分かってきた。まもなく上海に着こうとしていたときメールが届いた。

「上海に同じ組織が動き始めているみたいだ。その集団は、世界の人々の心を暗黒にかえようとしているらしい。そいつらを探して戦ってほしい。」

ペナルティたちは、上海で降りた。

上海の町は、すぐく発展していた。今からでも探そうと思っていたが、もう夜になってしまったので、宿に泊まることにした。

宿に着いたあと、どこかの厨房を借りようとマオが探していたとき、不意に何か怪しい気配を感じる家があった。

そのころ一人こんなことを言っている少年がいた。

「さあ、この世を明日変えて見せます。待っててください。お父様」翌日、マオが起きてみると一通の手紙が机の上においてあった。みんなを起こした。

マオが叫んだ。

「インターネットに大量のウイルスをまくだど！」

「じゃあ、本部を探そう」

町に出たペナルティたちは、本部さがしをはじめた。

マオは、昨日のことが気になってしまった。もしかしたら、あの家なのではないかと、そして、ペナルティとシロウ・メイリイを集めて、その家を訪れた。いまだに貧民らしくぼろぼろの服を着ていた。「ちょっと聞きたいことがあるんだけどいい？」

出てきた少年は「いいよ、中に入って」と言ってくれた。

家の中を見回したペナルティは、ふとパソコンがあることに気がついた。

「ねえ、あのパソコンどうしたの？」

少年は答えなかった。ペナルティは続けてこう聞いた。

「君の家には、家族がいないみたいだけれど、どうゆうわけを聞かせてくれないかい？」

少年は重い口を開けた。

「親は、みんなに殺された。みんなが怖い。いい人って誰？」

少年は泣き始めた。

「・・・いい人なんていないじゃないか、ぼくには、友達がいなくて、友達を作りたい、ぼくを怒らすとひどい目に会うんだぞとみせつけたかった。それで、悪の組織に入った。そのボスは、僕をかわいがってくれた。ここが僕のいい人だと思った。ぼくは、もっともっとこんな人たちがいたらいいなと思った。だから、ぼくは、君たちに挑戦状を送ったんだ。正義、正義と言っている人たちに向けて。ウイルスなんて作れないさ、どうせぼくは何もできないただのクズだったという名を残してもう終わるんだから」

少年は、こう言った。マオが反論した。

「確かに貧困だ、裕福だと言っている人間がいる。しかし、それは違うと僕は思う。才能さえあれば何でもできる。ぼくだって難しいといわれた料理試験に最年少で合格している。しかし、その才能をだめにしちゃだめだよ。君にだって才能があったはず。これから僕たちと一緒に旅に出ないか？」

少年は不可解なことを言い始めた。

「ああ、我が父よ。わたしはあなたに約束した事が守れなかった。

この場で死を我に与えよ」

そのときだった。いきなり少年の体を稲妻いなずまが走った。

マオは悲しんだ。その少年の死は、あまりにも悲しかった。

それは、何かを伝えるためだったのかとペナルティたちはそう感じたのである。

第5話 恐怖の戦争

恐怖の破壊兵器。それは、たぶん原爆だろう。そして、技術革新によって、いろいろな国が兵器を秘密裏に作っているとしている今日この頃、トルコに着いたペナルティたちに一通の手紙が届いた。その手紙にはこう書いてあった。

「エアーガンで君たちが滞在する町を明日、占拠^{せんきょ}する。」

それを見たペナルティは、マオたちを呼び出した。マオとメイリィ・シロウは世界4大料理でもあるトルコ料理を堪能していた。

「一体どうやってエアーガンで占拠しようとしているのだろうか？」
ペナルティが答えた。

「多分、改造したエアーガンを使おうとしているのだろう。前に聞いた話では、エアーガンを改造して人を殺そうとした人がいたらしい。」

「そんなものを使わせてたまるものか。」マオが言った。

翌日、ホテルにまた一通の手紙が来た。マオがそれを開けたとき、いきなりかみそりが出てきた。手紙には、「夜、六時に占拠し終わるだろう。そのときには、」と書いてあった。

「早くしないと、取り返し of つかないことになるぞ。みんなでわかれてさがそう。」

みんな町へ散った。そのころ、同じ手紙が警察にも送られてきた。警察も警備をはじめた。

昼の十二時みんな一旦ホテルに戻り、食事を取っていた。そのときだった。外に大量のエアーガンを持った集団がホテルやその周辺を取り囲んだ。

集団によって、すぐに町には、集団の旗がたった。ペナルティたちは、ホテルの部屋にぎゅうぎゅうに押し込まれ、動けなくなっていた。

一時間後、その部屋のドアが開いた。集団のリーダーが言った。

「ここに世界でいろいろな事件を解決した子供たちがいるそうだが、お前らの中にはいないか？うそをつくと、後でこの部屋の全員皆殺しだぞ。いないのか！」

安全を考えて、手を上げた。

「よし、いい子だ。おい、お前ら別の部屋に案内しろ、例の生きては帰れない部屋へな。」

ペナルティたちが言う。

「お前らの目的はなんだ！」

「俺らの目的？そりゃ、世界に俺たちの力を見せ付けるためさ。お前らも聞いただろうふえん榎のこと？」

「榎だって？」

「ああ。そうさ、中国の少年がある軍団によって殺されたと本部から連絡があった。そして、榎から指令を受けたのだ。その軍団を殺してほしい。内部のことを知った人間は、必ず殺すことになっている。もうじきリーダーじきじきに殺しにくるだろう。」

「お前らは、なぜ集団に入ったんだ。お前は、まだ若いのにどうしてだ。」

「お前らは旅ができてうれしいだろう。しかし、俺たちはそれさえできないのだ。世界から見放されている。おれたちは、アフリカの貧しい国で生まれた。父親の仕送りだけでは食っていけず、俺たちも十二歳のときこの国で機械の組み立ての仕事をしにやってきた。しかし、現実、社会は厳しかった。給料は、トルコ人の二分の一にもならなかった。差別を受け、さらに、中学校さえでない俺たちは次第にやめさせられていった。そのときだった。あの人に出会ったのは」

そのときだった。上空からたくさんの爆弾が落ちてきた。

「おい、部屋に鍵かけろ。人質は、火の中で死んでもらう。」

ペナルティは言った。

「お前らはどこまで馬鹿なんだ」

「うるさい。えいお前らには毒をやってやる。この気化した毒を体

内に入ったらお前らはもうあの世行きだ。」

「おいみんな布で鼻と口をふさぐんだ。」マオが言った。

「くそ、布で口をふさぐとは、」

「隊長。もうそろそろ逃げましょう。この町に核施設があるみたいで、そこに仲間が時限爆弾を仕掛けてあと二時間で爆発するでしょう。そうしたらこの町と軍隊は壊滅するぞ。はっはっは」

ペナルティたちは口を布でふさぎながら、集団が立ち去ったあとを見計らって町の高台に来た。

「あそこが核施設か。早くしないと町が、そして俺たちが死んでしまう。」

そのころ、町には各国の軍隊が下りていた。ある老人が外国の軍隊の人に

「この町は、あと一時間で消滅する。」

といった。外国の軍隊の人が聞いた。

「どういう意味だ。」

老人は「町のはずれにある原子力発電所に時限爆弾じげんばくだんを仕掛けたい。子供たちが原子力発電所に行った。」

軍隊は急いで原子力発電所へ向かった。

そのころ、ペナルティたちは必死で探していた。ペナルティが何かにつまづいた。

これだ。横には赤いスイッチがあった。

「多分これを押せば解除できるのだろう。押してみた。何とかタイマーは止まった。」

「やったね。ペナルティ」

次の日ひそかにペナルティたちはイタリアに向けて出発した。ペナルティは「世界にはたくさん危ないものがたくさんある。そのようなものが簡単使える時代がきてしまったなんて」と思った。

第6話 イタリアの熱い戦い？

次は、イタリア。もうそろそろ夏もやってくるのかという暑さがイタリアに降り立って感じた。

シロウが、「イタリアと言えば、UDONが有名だよね」と言った。「いや、スパゲッティだよ」とマオとメイリイが言い直す。

「たまには、ゆっくりしたいよな。じゃあ。海水浴でも行くか？」ペナルティたちは、海岸に着いた。やっぱり欧州のリゾート。なかなか大きい人が多いもんだ。とシロウがいう。何処を見ているのやらとメイリイが思っていると、1人の男性がペナルティたちに近づいてきた。男性は言った。

「あなたたちは、アジア人ですか？」

ナビのピアノマンが通訳する。

「はい。そうです。」

男性は、「囲碁ご存知ですか？」

「はい。」

「じゃあ、教えてくれませんか囲碁を」

仕方なく囲碁を教えることになった。ペナルティとマオは一応、囲碁のやり方は知っていたが、自負する程度ではなかった。こういうときつくづく日本ブームを感じるのである。

その男はそれを聞くと、少しにやけていた。まだ、ペナルティとマオは、メイリイとシロウがいなくなっていることに気がつかなかった。

「この囲碁は変わってしましてね。巨大な碁盤こばんでやるんですよ。負けたら、あなたたちの大事なものを取らせていただきます。」

「なんだと、」そのとき初めてメイリイとシロウがいないことに気がついた。

「はっはは」男の不気味な声が海岸を包んだ。

「それだけではない。俺が、石を取ったら、勝負終了後、世界の何

処かで取られた個数分、爆弾が爆発するだろう。はっはっは。」

「なんだと、お前は何者だ。」

「まだ気づかないのか」

その男がいきなり変装へんそうをといた。

「お前は、まさか、トルコの事件や中国の事件で最後、言っていた。集団の父、フエンか」

「そうだ。さあ戦いに挑まないと全世界が大変なことになるぞ」

もうペナルティとマオには、やるしかなかった。

フエンが言った。

「お前ら二人いても俺には勝てないだろう」

「なんだと」

マオが言い返す。

「じゃあ、始めましょう。ただ、俺の定理さえあれば、なんてことないだろうがな。」

仕方なくやり始めた二人だが、最初、ペナルティたちが優勢だったので、一安心した。しかし、相手の一言で、戦況は変わった。それは、やり始めて十分後だった。

「さて、そろそろ本腰を入れなければ、だめみたいだな。さすが、中国中を料理うきへんじでうならせたやつだ。囲碁もはんぱじゃない。」

そう言った後、急に戦局が怪しくなった。ペナルティとマオの手には命がかかっている。油断はできない。その周りは、一箇所だけ雲が漂ったように暗かった。

だんだん、打つ場所も無くなってきた。そのとき、一瞬、敵の気が抜けた。

ペナルティは昔、日本にいたとき読んだ一冊の本を思い出した。そこには、絶対勝てる魔法まほうの手段と言うものが書いてあった。ちょうど、囲碁ブームが日本で小中学生の間で始まり、皆が強い手を求め始めたころだった。

それさえ思い出せばなーと思っていたとき、一人の老人が近づいて来た。その老人は、いきなり、「あなたは思い出したいことが御

ありでしょ、じゃああなたの記憶の奥を言い当てましょう。」

そう言うとおでこに手を当て、「大手日本茅場門前仲木場東陽砂町
おおてにほん かやばもんぜんなか きばどうようすなま

葛西？」
ちかさい

言い終わるとすぐさま「あなたは、秘伝ひでんの方法 光の碁を思い出し
だしかったのでしょうか」

ペナルティはそれだと思いだした。日本で流行ったアニメで、その
影響もあって囲碁がはやったのである。その中で出てきた手法を
紹介した特集であったのだ。

「これですべて思い出したぞ。どうもありがとうございました。と
ころで、あなたは何者ですか。」

「いいえ、紹介するほどの身分ではありません。」

これでもう僕たちのものだ。早くマオにも教えなければいけない。
その後着実に石を取り、ついに相手は負けた。

「くそ、しょうがない。お例の物を出せ。」

そして、メイリイとシロウは解放された。ペナルティは、これで一
件落着して、まわりをみまわしたときマオたちの服装が異様に目立
つことに気がついた。ペナルティは、このことに気がかりになりな
がら次の目的地イギリスへ列車で移動した。さて後もう少しで世界
半周というとき、この後ペナルティは、科学というものがどのよう
なものか、そして、人間が開発したものでどういうことがおきるか
を考えさせられるのです。

第7話 ネズミよ 小さくなれ!

イギリスのロンドンに着いたペナルティたちは、最近、立て続けに事件や移動が重なり、少しも休養が取れなかったので、せめてイギリスのロンドンの市内観光でもして子供らしい、しかし、なにか壁を乗り越えた英雄えいゆうのような話が多かった。

ペナルティは、イタリアで感じたあのことを聞いてみることにした。

「マオたちに聞いてみたいのだけれども……いい？」

「なに」

「中国で始めて会ったときから気になっていたんだけれども……」

「

「そうか、ついに聞いてしまったか……。じゃあ教えるしかない。

実は、僕たちは、清しんの時代にいたんだ。僕は特級厨師とつきゆうしという中国全

土でも有名な試験に合格して、裏料理界のやつらと戦ってきた。し

かし、ある日、僕たちの店をおじさんが訪ねてきたんだ。その

人は李、そう、君を中国に送ってきた人だ。その人に未来に来てく

れないかと言われたんだ。そして、一日中僕たちは悩んだ。なぜな

ら、未来に行ったら、もう二度と過去には戻れないといわれたんだ。

そして、僕たちは、君が持っているその機械で未来に来たんだ。」

それを聞き終わり、あたりは静まり返った。外の風が窓をたたきつ

けた。マオは、さらに続けた。

「僕たちは、昔死んだことになっているんだ。裏料理界うらりょうりかいのやつらに

よってとね、だから、ぼくたちは、生きていないことになっている。

当然、二百年生きている人なんていない、そう、僕たちには、家が

無いんだ。」

ペナルティは啞然あぜんとした。

次の日、外を歩いていると妙に町がシーンと静まり返っていた。いや、町の両側には、札が置かれていた。次の日、外を歩いていると妙に町がシーンと静まり返っていた。いや、町の両側には、札が置

かれていた。そして、ペナルティたちは、ちょうどそこを歩いている人を捕まえて聞いた。

「実は数日前から、巨大なネズミが大量発生しているんだ。しかし、行政はどうにもしてくれない、だから俺たちは怒っているんだ。」他の人も

「誰か、食べられてしまったらしいわ。あなたたちも気をつけたほうがいいわよ」

ペナルティたちは急いでホテルに戻り、マオやメイリイに伝えた。

その夜、みんなで、町を見て回ることにした。

町の路地裏に差し掛かったとき、奇声が聞こえた。どうやら、マンホール下から聞こえてくる。

マンホールを必死で開けようとしたとき、いきなりマンホールが宙に舞った。

「大量の巨大ネズミだ!」

シロウが言うときみんな一目散に逃げた。

「なんであんな大きなネズミがいるんだ」

シロウが言う。シロウはもう失神しかけていた。

「そうよ。あんな体長一メートルもあるようなネズミ見たことが無い」

メイリイが言う。

「あれは、遺伝子操作で生まれたネズミじゃないかな?」ペナルティが言う。

「遺伝子操作?」

メイリイが聞く。

「遺伝子とは、動植物の体を作るのに必要な情報。それを、人間が勝手に変えたのが遺伝子操作というんだ。もうすでに豆腐を作る大豆では、半分以上が、遺伝子操作で作られたものなんだ。確かに人間に有益をだが、悪用すれば、危険なものになる。あのねずみのように」

ホテルに戻ったペナルティたちは、今後どうするか考えた。

マオが発言した。

「大きなネズミ捕りを作ったかどうか？」

そのとき、部屋の電話が鳴った。

「おい、ペナルティ、大丈夫か？ 巨大なネズミがロンドンで出たらしいじゃないか」

それは李からだった。

「李さん。そうなんだ。どうしたらいいのか考えていたところだ。」

「そうか、じゃあいいものがある。小さくなるんだーという薬がある。それを飲ませばそのネズミも元の大きさに戻るだろう」

「早く送ってください。今すぐに」

応対したペナルティはすぐに言った。

二日後、大きなダンボールがホテルに届いた。

ちようど、大きな籠かごも大量にできた。もう準備は万端ばんたんだ。急いで市の担当者に許可を取り、町中に“小さくなるんだー”入りの御餅おももちを網にかけて。それを五日間続け、やっとネズミが出なくなった。

「やった。なんとか全滅してみたいだ。」

そのうしろでその話を聞いていた男がいた。しかし、ペナルティたちは気づかなかったのである。

ペナルティたちは次の日、ニューヨークへ旅立った。

第8話 M&Aで世界が狙われる

誰かがお金が何でも出来ると言った。確かに似たようなことは出来た。しかし、その男は逮捕されてしまった。ニューヨークでは、次々と株を買いまして行く会社があった。その会社は、株で、世界一をめざしていた。しかし、本当の理由は、これだけではないみたいだと李さんから連絡を受けて途中ニューヨークへ来たのだった。しかし、ニューヨークという町はすごいと思った。にぎやかで、今までの町とはくらべものにならないほどだった。

「何処どこにあるんだよ」

シロウが言う。

「確かこのビル全部だ。」

ペナルティが言う。シロウ達は驚いた顔をしていた
受付で、社長に会う約束をした。子供が会いたいというから受付の人は驚いていたが、どうやら社長がいいといってくれたみたいだ。
エレベーターに乗ったマオたちはこの箱に興味津々きょうみしんしんだったみたいだ。
上に到着して、さらに驚いた。なぜなら、そこにはニューヨークの町が窓を隔てて広がっていたからだ。その窓のふちに一人誰かが立っている。

「ようこそニューヨークへ、そして、あなたたちはこのビルに入った時点で死が確定しているのだ。君達の正体を知らないとも思っていたか？ いやいや、お前たちが俺たちの仲間を倒してくれたそうではないか。ありがたいと思っているよ。君たちがはめをはずしてくれることにね。」

「それはどうも。」

シロウが言う。シロウは場が読めないようだ。

「お前は何者だ。」ペナルティが言う。

「ははは。俺は悪の組織のNO・2のトム・ハリーだ。」

「アメリカ人がNO・2だとは。なぜお前は集団に入ったんだ？」

「俺は、元は証券マンだった。しかし、証券とは、生き物みたいなものだ。俺は、その生き物と戦っていて、自分の意思とはなんだと思っただ。そのとき、ある男に相談したんだ。そしたら、その男は俺についてこいといわれた。その男は、俺にこう言った。

お前はわたしの言うことを聞けば、自分の意思はいらないとね。本来、人間には自分の石など存在しないと。だから俺は今、上の命令に従って生きていけばいいのだ。悪いだろうが、良いだろうが、わたしには関係など無い。この生活は楽だ。自分の意思を持たなければ、喧嘩や揉め事を起こさなくてすむ。周りは味方ばかりだし、自分の思想がないおかげで苦悩が無いから楽だよ。さて落ちてもらうかな。」

その時、一機のヘリコプターがビルに近づき、窓ガラスを割った。そのヘリコプターを動かしているのは、李さんではないか！

「良かった。」

シロウがそういうと、いきなり男が叫んだ

「お前らはもう帰れない。東京にメカ恐竜を向かわせた。しかし、お前らの根性は、どうかしているよ。」

ペナルティたちは顔が青ざめた。

「李さん。今の話。」

「ああ。今日本に向かっている。至急。日本に戻ろう。それから、お前たちの友情をパワーにする機械がある。この機械は、お前たちの友情の度合いによってパワーが変わるものだ。お前たちならきつとできる。」

ペナルティたちは、日本に向かった。

第9話 友情対決！

成田についたペナルティたちは車で都心へ向かった。成田空港にはたくさんの方が一夜を明かそうとしている。都心へ向かう列車は、運行のめどが立たず。高速も都心では通行止めになってしまっているらしい。ペナルティの家に着いた。約2ヶ月の旅であったが、なかままで持つ少年に成長したことに親は感銘を受けているらしい。旅に出る前、ペナルティには友達が二・三人しかいなかったが、今となれば八人もの友達がいるのだから。

テレビをつけるとどの番組も恐竜上陸のニュースを流していた。

「まだ。東京に来るには、あと十二時間。つまり、明日のお昼になるだろう。それまでは寝ていなさい。飛行機に乗っていて疲れただろうから。」

その日は、ペナルティの家に泊まった。

ペナルティの親にペナルティは、マオたちが何処から来たのか包み隠さず話した。

ペナルティの親は、李さんから聞いていたらしく、

「家族が増えるのだから良いじゃない。」
と快く承諾してくれた。

次の日の朝。飛行機の音で、早く目覚めたペナルティは、空を見て驚いた。なんと、自衛隊の戦闘機せんとうきが四十機くらい列をなして海へ向かっていた。

ペナルティたちは恐竜をたおすための策略を話し合った。

「李さんから、友情レーザー装置というものを借りた。しかし、六人いないとそのパワーが生じない。後の一人をどうするか」

その時、ドアチャイムが鳴った。入ってきたのは、岡田だった。岡田は、ペナルティの同級生で、数少ない友達でもあった。その岡田は入ってくるなりこう言った。

「お帰りペナルティ。お前がまさか友達を連れて帰ってくるとは思

わなかったよ。どうせなら、僕を入れてくれないかな？ペナルティ」その言葉によって、一件落着。しかし、岡田はこんな危険なことをしても良いのかとペナルティがたずねる。

「大丈夫。親は俺を見捨てて、どっか郊外へ行った。そして、俺が残されることになったという訳さ。しかし、俺の親もひどいものだよな、見捨てるなんて。」

「よし、行こう。時間が無い。」

東京湾へ行くと目の前には恐竜に影があった。そして、船で沖合おきあいにひっそり行って、レーザーが届くところまで近づいた。

「もう時間が無い。一斉いっせいに始めるぞ。大丈夫かペナルティ。そして、みんな」

「行くぞ」

李さんの掛け声とともに一気に2つの作戦を始めた。

一つは、あの秘密兵器だ。

しかし、恐竜に一回当たったが、倒れない。

「どうした？もっとやろう。」

岡田とペナルティは必死に叫んだ。

一時間がたった、恐竜は海岸で倒れた。何とか東京上陸は回避かいひされた。

翌日のニュースで、リーダーの男らが逮捕されたと報じられた。その横には、ペナルティたちの写真が載った。

第10話 嵐の前の静けさ

恐竜の事件も一段落して、学校の授業が再開された。

ペナルティの通っていた学校は、小中高一貫校だったので、特例として、マオたちは入学が許可された。

四人でおんなじ学校へ行き、そこで、楽しく過ごしていた。

学校へ通い始めてから一ヶ月たったころ、松ヶ丘学園では、最近、兄弟校として協定をむすんだ関西のある学校から、交換留学生を迎えてほしいといわれたそう。そして、生徒主催で歓迎会を行うために校内からピアノがうまい人が集められることになった。

ペナルティは、学年の中でもピアノがうまいことが知られていたため、クラスのみんながこぞって推薦した。

会場は、体育館で生徒全員によって決定することになった。

ペナルティのほかに学年からペナルティと一位、二位を争う緒方が出ることになった。

いよいよその日がやってきた。

マオたちや他の生徒が見守る中、まず緒方の演奏から始まった。

緒方は演奏曲を皆の前で指先を狂わすことなく、まるで、一流のピアニストのようだった。

一曲弾き終わった。周りの生徒たちは精一杯の拍手をしていた。

次にペナルティの番が来た。

最初は順調に行っていたが途中から緊張のあまりかテンポが速くなっていった。

そして、なんとミスをしてしまった。曲が終わった直後。みんなの反応は上々だったものの、ペナルティは、その場で楽譜を投げてしまった。

結果、やはり緒方に決まった。

同時に料理を作る人を募集していた。

結果、マオたちが参加することが決まった。

このとき、またもや事件に巻き込まれることになろうとは想像もつかなかった。

第11話 軍事学校計画

留学生が来る日、学校中で、パーティのための準備が行われていた。そのころ留学生の林は、新幹線のなかで不気味な笑いを浮かべていた。

留学生が駅に到着し、学校へ向かっているころ、マオたちは、料理を一生懸命になっていた。そうとは知らずに、悪の手が忍び寄っていることにまだ、気づかなかった。

「やっと到着か、なんかちっぽけな学校やな。ほな、行こうか？」
こてこての関西弁で話す林にペナルティは新鮮さを感じていた。

パーティが始まった。司会が話す。

「えー、これから留学生歓迎会を始めます。最初に、留学生から一言、」

「こんにちは、ぼくは、林 はやし 好きな食べ物は、たこ焼き・お好み焼きなどや。好きな野球選手は、やっぱ、赤星 あかぼし やろ。タイガーズの星いや、日本の星や。どうぞおおきに。」

「じゃあ食べても結構です。」

食事開始。いやー、やはり、マオが作るものは半端 はんぱ じゃない。

林が、ラムネ菓子を配り始めた。ペナルティたちは、食事が食べられなくなることがないようにポケットにしまっておいた。

突然、留学生の林が立ち上がって、笑い始めた。

「何がおかしいんだ？」

「おまえら気づかないのか、おまえらあはやな」

周りを見渡すと、パーティ会場を他の学校の生徒が取り囲んでいた。前には、めがねをかけている

一人の中年男性がいた。

「よし、今日から、お前たちは俺に従ってもらう。さっきの菓子は、俺に従ってもらうためのものなんだな。さあ、俺のいうことと聞けるかな？ う？」

最後に奇妙な言葉を言ったその中年男性に向かってみんなこう言った

「川場様。万歳^{ばんざい}。」

ペナルティたちは、不気味^{ふきみ}になって逃げ出そうとした。

「おい、その君たち。何やっとなねん。」

「は」

ペナルティがとぼけた瞬間^{しゅんかん}、マオがその男性にけりを入れる。

「お前ら、なめとんのかこら。」

ペナルティたちはなんとか体育館を抜け出し、家へ向かった。

家に入って驚いた。そこにはもがき苦しむペナルティの親がいた。

「大丈夫？お母さん？お父さん？」

「大丈夫。」

そう言ってペナルティの親は、死んでいった。

「お父さん。お母さん」

ペナルティは泣き叫んだ。

「しかし、誰がやったのだろうか？」

マオが言う。

「多分あいつらだ」

ペナルティが答える。その時、後ろから物音がした。

「おい。俺から逃げられるとも思ったか？」

さっきの男性だ。近寄ってくる。

「窓から逃げるぞ」

一斉に窓へ突っ込み、玄関から福田の家まで走ってきた。

男性は、ペナルティの家に行った。

「くそ小僧どもめ。仕方がない。例の部隊を出すか。」

男性は、学校に戻って、生徒にこう言い放った。

「お前らの仲間が逃げ出した。探して来い。」

生徒が答える。

「はい。川場一等軍曹様^{かわばいとうぐんそう}。」

そのころ、岡田の家では今後どうするかペナルティたちが考えていた。

第12話 萌え萌えアキバ系街道まっしぐら!

萌えP。(ある人が叫んだ。)

ペナルティたちは、ともかく李さんに会う約束をして、電車に乗り込んだ。待ち合わせ場所は、東京駅。車掌が「次は秋葉原。あきはばら秋葉原あきはばらです。山手線・京浜東北線・つくばエクスプレス線はお乗換えです。やまのてせん けいひんとうほくせん」
「いつもの調子で言っていた。」

秋葉原駅に着いて、山手線に乗り換えようとしたとき。後ろで歩いていたシロウが、マオを呼ぶ。

「あれが、今日日本で流行っている。メイドというものか?」

マオが振り返ると、そこには、メイド姿の同級生の高幡たかはたがいた。

高幡がこういう

「あなたのハートに萌え。お帰りください。ご主人様。うふ」

マオは、まさかこんなところで会うとは。そして、よくまあそんな格好ができるなんて、見ているほうが恥ずかしくなってきた。

「おい、逃げるぞ。」

マオが先頭に立って、走って改札を出た。しかし、後ろのメイド姿の高幡を秋葉系の一人が見つけて、マオの前に立ちはだかった。

「萌えー」

後ろの高幡は、もうすでに秋葉系に襲われまくりだ。

マオたちも、秋葉系の人たちに押されて動けない。

「どうする? 動けないぞ」

シロウが言う。

高幡が、言う。

「ご主人様。待っていてくださいませ。」

群集がさらに集まる。どうやら、高幡の仲間が集まってきたらしい。

「高幡、ここにいいのか? 例のやつらは」

高幡の仲間が言う。

「こんな中だよ」

高幡が答える。

「やばいぜ。マオ。どうする。」

シロウが言う。

「少しずつだが進むしかない。ともかく前に進むんだ。」

マオが言った。

「手をつないでいこう」

ペナルティの考えで、みなで手をつないで行くことにした。

マオがメイリイと握った。

マオとメイリイは互いに顔を赤くしていた。

どんだん前に進み、マオが足を取られそうになった。

「大丈夫？」

マオが顔を赤くしながらメイリイに言った。

やっと群集ぐんしゅうを抜けたと思ったら、そこは、つくばエクスプレスの改札口だった。

後ろを見ると、群衆が出入り口を封鎖ふうさしていた。

「しょうがない。北千住まで出て行ったほうが、早そうだな。」
ペナルティが言う。

シロウが横から突っ込んできた。

「なんでお二人さんは、まだ、手をつないでいるのですか？」
マオとメイリイは、顔を真っ赤にしながら、列車に乗り込んだ。

第13話 MAX-Coffeeの泉

つくばエクスプレスに乗って一分したころいきなり列車が停止した。運転士がマイクでこう言った。

「コーヒーがトンネル内に流れていますので、近くの駅へご案内いたします。」

「コーヒーが？」

ペナルティたちは、ビックリした。

「まさか？」

ペナルティが言った。

「そうだろう」

マオが言った。その時、列車内にコーヒーが流れて出してきた。

「うわー。このコーヒーなんだ？甘すぎる。」

ペナルティが言う。

そして、列車の中の客の一人がペナルティたちのところに来た。

「わっはっは。それは、僕がやったのさ」

今度は、ペナルティの同級生 尼崎がいた。

「このコーヒーはMAXコーヒーといってな、すごく甘いんだ。お前ら早く逃げないと、逃げ遅れるよ。なぜなら、駅まであと1キロあるのだからな。わっはっは。さらば」

そういうと尼崎はどこかへ消えてしまった。あまがさき

「まずい。早く駅へ。」

メイリイが言う。

尼崎の言った通り、甘い砂糖の影響で、服が重い。

「しょうがない。脱ぐしかないようだな」

シロウがにやけて言った。

「なんてこと考えているの！このスケベ」

メイリイが言う。

「まずい。そんなことしている場合じゃない。」

ペナルティが言う。

「あれ、あの緑色の光は何だろう？」

シロウが言う。

「そういえば、トンネル内には、非常口があったはずだ。そこから出られる。」

走って、出口へ向かう。しかし、それは、チャンとしか階段ではなかった。

「なんだこれは」

シロウが言った。

なんと。非常口ではなく換気口だったのだ。

「重くてあかないよ。マオ。」

シロウが言う。

「じゃあ二人でがんばってみるか」

そのとき、上に一人の人影が見えた。

「おい大丈夫か？」

それは、岡田だった。岡田は、俺たちの見方だったのだ。さすがに薬では、人一倍あつい友情は壊せなかったらしい。

岡田と力をあわせて、換気口のふたを開けた。

「岡田がいなければ今頃、コーヒーの中で死んでいたところだよ。」

岡田が暗い顔で言う。

「実は、俺んちに來たんだ。あの中年男性が」

ペナルティたちは目を丸くする。

「もう俺んちにいるのは危険だ。一緒に戦って行こうではないか。」

「大丈夫なのか？」

ペナルティが聞く

「ああ何とか。でも、何にかが俺を見張っているようなんだ。」

ペナルティたちがあたりを見渡すと、一人の黒装束少年が電柱から見張っていた。
くろしょうぞく

第14話 松ヶ丘の悲劇！

さてさて、こんなにも悲劇をうけた、ペナルティたちだったが、最寄りの御徒町おかちまちに着いた。

ペナルティはそこで、目を覆うおわうような出来事の遭遇そうぐうするのであった。ペナルティが電車を待っていると、一人の少女がホームの端に立っていた。その子の手に握られていたのは爆弾だった。しかも、ペナルティと同級生の哲子ではないか。

ペナルティが近づく。

「何をやっているんだ」

ペナルティが叫んだ。

「わたしは川場軍曹かわばぐんそうさまから手紙をさずかりました。最初にこれをおんでください」

その手紙をもらったペナルティは、それを見た瞬間驚いた。ペナルティは、マオたちにそれを見せた。それには、こう書いてあった。『お前たちにいいことを教えてやろう。今日、松丘に帰ってこい。さもなくば、集団自決をさせるつもりだ。ただ、俺はしないがな。特別列車を用意しておいた。まもなく来るだろう。待っているぞ。』

ペナルティたちが読み終わると列車が入ってきた。しかし、様子がおかしい。ドアが開いた瞬間、皆が降りてくる。あの中年男性の声が、駅のスピーカーから聞こえてきた。

「子供たちよ、この列車が特別列車だ。まあ、この後の列車は、もう来ない。」

「何処にいるんだ。」

ペナルティたちが、叫んだ。

「叫んだって無駄さ。早く乗れ」

中年男性の言うことの従い、その列車に乗り込んだ。

列車は、東京のオフィス街を猛スピードで駆け抜けていった。

乗り換えの駅で、この前見た少年が立っていた。

「乗り換えの時間だ。早くしろ」

少年が、私鉄の駅まで案内した。またもや変な列車が止まっている。電気が消され、回送と表示してある。

ペナルティたちは、松丘へ戻ってきた。

校門の前にあの中年男が立っていた。中年男が言った

「さあ。校庭へ。心配は要らないさ。お前らには戦ってもらう。自由に選んでいいぞ。ただし、条件がある。お前らが負けたら、お前は、この学校の地下に作った牢屋で一生を終わってもらう。あと一対一で勝負してもらう。いいな。」

一番有利なのが、料理だ。マオが中年男性に言いに行く。

中年男性がこう言った。

「君は、あの200年前の少年ではないかな。」

マオが驚いた顔をして言う

「何故知っているんだ。」

中年男性が答える

「さあそれは、お楽しみということだ。じゃあ始めましょう。もう夜になってきたんだから。じゃあここにこたちにいる子達分の料理を一時間で。もちろん給食室をつかってもいい。」

料理勝負が始まった。相手は、植松。ペナルティの同級生だ。

植松は最初、いわしをゆで始めた。なぜかいわしの頭だけ、お湯につけてない。

植松がこう言った。

「今日、初めて料理を作って見るんだ。一人で・・・」

一瞬、場の空気が凍った。

マオは、ずっと考え込んだままだ。

シロウは、メイリィにこう言った。

「早く作ないと、あと四十五分だよ」

植松は、もうチーズをまき始めている。

マオがやっとな動き始めた。まず釜で野菜を煮込み始めた。

ペナルティたちも心配している。

もうまもなく一時間がたとうとしていた。マオの料理もだんだん出来上がってきた。そして、一時間がたった。

あの中年男が舞台に立った。

「じゃあこれからみんなに試食してもらおう。どちらかが先になくなったほうを優勝とする。いいな。それでは始め。」

植松は、いわしをチーズで巻いたものを出した。マオは、野菜たっぷりのスープを出した。

試食が始まった。どちらも最初は大盛況だった。しかし、植松が作った。いわしのチーズまきは人気がなくなっていた。そして、ついにマオ作ったスープが無くなった。

中年男性が出てきた。

「結果、俺たちが負けた。」

生徒たちは泣き叫んでいた。

生徒の中から、こんな声が聞こえてきた。

「俺たちは、もう生きている意味など無い。みんなで自決しよう。」
皆、歓喜に包まれていた。

ペナルティたちは、ショックだった。まさかこんなことになるとは思っていた。

その時、上空に一機のヘリが飛んできた。中年男性がヘリから降ろされたロープをつかんだ。

最後に川場はこう言った。

「お前らには、とめるのは無理だ。また会おう」

生徒たちは、校舎の中に入っていた。

全員校舎に入った瞬間。爆発音とともに、校舎が火の海に包まれた。ペナルティたちは、なきくずれた。

第15話 Sky

次の日、三日ぶりに家へ戻ってきた。殺された後が、悲惨にも残っていた。

家のポストをシロウが覗いたとき、ポストの中に大きな箱が入っているのを発見した。

「マオ、これ李さんからのじゃなか！」

見てみると、後ろには、名前が書いてあった。中を開いて驚いた。そこには、一通の手紙と、ペナルティが持っている機械が3つ入っていた。

手紙には、こう書いてあった。

『ペナルティたちよ。俺は、川場に拘束された。敵は、マオ達と出会った国、中国に宣戦布告するつもりだ。そうなれば、日本が大変なことになるぞ。いいか。五人で力をあわせてがんばってほしい。敵は、福岡が拠点だ。じゃあまた会う日まで』
ペナルティたちは震えたった。

「すぐに行こう。」

その頃、川場軍曹を中心とした会議があるところで行われていた。

「川場軍曹、どうしますか。」

林が言う。川場が応対する。

「まあ、あいつらも来るだろう。航空部を出せ。」

「はっはっ。すぐに」

羽田へ来た、ペナルティたちは、福岡行きの飛行機の券を取っていた。その横に不思議な格好をした少年をペナルティは見つけてしまった。

「DC10、エイテルイレブントライスター」

その少年は、どうやら飛行機ファンらしい。そんなことを思っていると、マオが言った。

「あと四十分後の飛行機だ。それまでゆっくりして行こう。」

羽田空港は、すごい量の店がある。こんなにあると一日つぶしてしまいそうだ。

あっという間に搭乗時間がきた。ゲートを通り、飛行機に入った。飛行機が離陸した。その後、十分たった頃、前のほうで悲鳴が聞こえた。

「どうしたんだ？」

ペナルティが言った時、アナウンスが流れた。

「ヘイ。皆さん。私、松中と申します。これから福岡へ一番早く到着させてもらう。」

操縦席へ行くと、一人の少年が運転していた。ペナルティは目を疑った。そう、あの少年だったのだ。

少年は言った。

「君たちが、例のやつらか。おっと。前にいるみたいだ。気をつけろ。」

アナウンスをし始めた。

「これから、前にいる飛行機を抜かします。シートベルトをしてください。」

前の飛行機を抜かしたあと、またはなしをし始めた。

「俺は、日本戦争軍団航空部隊長 にほんせんそうぐんだんこうくうぶ 松中次郎だ。川場から君たちを持ってきてくれといわれた。もしも、俺を襲えば、飛行機は落ちるだろう。さあどうする。ただし、ヒントぐらい出してやらねえーとやってられない。俺は、お前を殺すつもりは無いからな。ヒントはお笑いだ」

ペナルティはなぜやさしいのだろうかと思った。ペナルティたちは、お笑いで勝負することにした。

考えたネタを披露し始めた。最近流行っているネタだ

「武勇伝、武勇伝、武勇伝伝ででんでん　・・」

松中は大笑。

松中が言った。

「福岡空港まで手伝ってやろう。だって、機長が元から乗っていない

いだもん」

それを聞いたとき驚いた。

「まさかそんなわけが無い。じゃあこの飛行機はどうやって飛んでいたんだ？」

ペナルティが言う。

「さあ？」

松中が答える。

「おう。もう福岡空港だ。じゃあ着陸態勢に入るぞ。誰かここに来い。」

着陸五分前。マオが横にいくことになった。

「こんなこと日本じゃないだけだな。はっはっは」

松中が言う。

地面に着いた。

「操縦桿そうじゅうかんを引け。」

緊張が走る。二人とも初体験なんだから。

「ここで尻持ちすると大変なんだよな」

松中がのんきに言う。しかし、マオは緊張しきっていた。

松中が逆噴射ぎやくふんしゃボタンを押す。何とか無事に到着した。

「じゃあ。」

松中が前から逃げる。

ペナルティはこう言った。

「まあ見逃してやろう。別に問題は無かったのだから。」
警察が来た時、誰がいたかと聞かれたが、答えなかった。

第16話 東京崩壊

ペナルティたちが着いたころ、町は混乱していた。人々がこう話していた。

「東京の警視庁やら、省庁が何者かによって襲われたらしいわ」

「自衛隊が東京に向けて出発したみたいだ」

「こわいね。これからどうなるのだろう」

ペナルティたちは驚いた。まさか、福岡ではなく東京にやつらがいるなんて、いったいどうして。

その時、一人の男が近寄ってきた。

マオが叫んだ。

「誰だ。」

その男は、こう答えた。

「僕は君たちを殺しに来た。お前たちを呼んだのもこの俺だ。もうお前らはこの国を救う事などできない。東京の省庁や警視庁などを占拠したのは、この俺たちだ。さあ今までの中国や韓国への恨みをお返しする時が来た。いま、着々と進んでいる計画がうまくいけば、第二次日中戦争が勃発するだろう。そして、その障害となる君たちを消去しに来た。この建物に時限爆弾が仕掛けてある。うまく見つけられなければ、あと二時間で爆発する。もしお前らが逃げたとしても、あとで後悔がさらに残るだけだ。お前らは今、東京に残っていればよかったと思っっているだろう。さらにそこに上乘せされるわけだ。一生後悔するのだ。」

「だれが逃げるものか」

マオが強気で言う。

「そうか、そう言っていられるのも今のうちだろう。」

相手が言い返す。

「ふざけるな、意地でも見つけてやる。」

ペナルティたちは、一斉に探し始めた。

ペナルティたちの様子を見て、その男は、不気味な笑みを浮かべていた。

そのビルは、テナントビルで、五階建て、そして、五階すべてにテナントが入っていた。

一階には、たらこが売っていた。みな、包装がされていて、中が見えない。ここは、マオが探した。

二階には、牛角があった。ペナルティの家の近くにも、牛角があった。まだ、朝も食わずにいたペナルティは、腹が減って仕方が無かった。

三階と四階には、カラオケ屋があった。そこで、岡田は、ゆっくりジュースを飲みながら探していた。

五階には、変な部屋がたくさんあった。メイリイとシロウが探す。一時間たったころ、火災報知器がなった。

一時間後にいたマオは、焦げ臭いにおいがする上の階へ行った。ペナルティは、焼肉をしながらのんきに食べている。

「おい、すぐにやめろ。」

ペナルティは、焼肉をとめたものの、まだ臭い。

この階ではないことが分かった二人は、さらに上に行く。

三階へ行ってみると、そこには、池田が、またもやのんきにジュースを飲んでいる

「またか、もうドイツもこいつも」

マオが言う、その横でペナルティが、

「イタリアも」

とのんきに言っている。なんだか、気が抜けたような感じである。三階・四階でもないみたいだった。

そして、五階に行ってみると、メイリイとシロウの姿が無かった。

「メイリイ、シロウ」

マオが叫んでいるといきなりさっきの男が出てきた。

「お探し物はこちらですか」

そこには、柱に縛られたメイリイとシロウがいた。

「どうしてこんなことを」

マオがいう。その男はこう答えた。

「あなたたちにあきました。こんなに無能なやつらがよくまあ倒してきたものだ。ほめてあげましょう。しかし、これでおわり。もう、このビルからは出られない。あと十分で君たちともお別れだ。じゃあこれで、」

その男は、窓から逃げていった。

ペナルティは、柱にくくりつけられた箱を見つけた。

「この箱の後ろの導火線に火がついた跡がある。しかし、今はついていない、たぶんこの紐は、何か大事な役割をしているじゃ。」
マオが紐を引っ張ろうとしていた。

「だめだ。」

ペナルティが言う。

「しょうがない。ひとまず解除の方法を調べるしかない。」

タイマーは、あと六分をさしていた。

ペナルティが言った

「この爆弾は、どうやらコンセントから取っているみたいだが、そのまま爆発するといけない。」

そう思って、下を見てみると、床に一円玉が落ちていた。

「この一円玉で何かできないか」

ペナルティが言う、その一円玉がちょうどねじ穴に収まった。

「これで何とか中が開けられる。そうだ、ペナルティ、お前がこれをあげたらどうだ。ぼくよりも手に器用なペナルティがやったほうがいいだろう。」

そうマオが言った。

あと四分しかない。急いで、ふたをはずした。中には、電池が入っていた。ペナルティが

「危なかった。もし、コードを抜いていたら今頃どうなっていたことやら」

「じゃあ、先に電池を抜こう。どうやら、この電池は、コードが抜

かれた時に動くみたいだ。先に抜いてしまえば、大丈夫だろう」

電池を抜いたが、何も起こらなかった。

「よっしゃ」

二人が手をたたいて喜んでいた。

「じゃあ、コードを抜いて」

ペナルティがコードを抜いたが爆発もせず、電源が消えた。

「これで出られる。」

ペナルティとマオは、メイリィたちの紐ひもを解いていた。

そのとき、岡田が、マッチを持ってやってきた。

「お前ら、だまされたな。俺が、そんな川場軍曹に対して無礼なまねをするものか。そう、あの、東京の省庁を襲ったのは、俺たちの学校の者さ、みんな死んだと思わせておき、お前らを福岡に連れてきた。すべてが川場の思惑どおり行っただ。あとは、君たちさえ殺ささえすれば計画は皆、成功する」

「おい逃げるぞ」

マオがメイリィとシロウたちを窓のそばに行かせた。しかし、ここは5階。下はコンクリートやアスファルトで覆われたところとてもじゃないが飛び降りられない。どうするか、その時、目に入ったもののそれは、布団。マオが言った。

「ペナルティ、布団を下に落とすんだ。」

布団をできるだけ多く持ってきた。

岡田が爆弾に火をつけた瞬間。爆風とともにマオたちは、下の布団の上に落ちた。

「これが無かったら俺たちは、今頃死んでいたな。しかし、この布団はすごく厚くて、大きい。さらになんか布団が臭い、何だ、この布団は。」

ペナルティが言うと、マオが気づいた。

「あの看板見てみる」

そこには、英語で一文字が書かれていた。

第17話 川場の謎

東京に戻れないかと考えていたペナルティたちは、名古屋までなら飛行機で行ける事を聞いていた。

名古屋から静岡まで列車が動いているらしい。

そして、静岡から歩いて東京までなら何とか行ける事を聞いて東京に帰ることに決心した。

しかし、お金が無かった。どうすればいいのか考えた。そして、ペナルティは、親戚の家が福岡にあることを思い出した。すぐに電話を試してみた。親戚しんせきはいいと言ってくれた。早速、親戚が迎えに来てくれた。

親戚といっても、母親の長女の家だ。五年ぶりに行った。事情を話した。

そのとき、親戚のおじさんがこんなことを言い始めた。

「あいつもそんな人間になってしまったのか」

ペナルティが聞き返す。

「川場さんをご存知なのですか」

おじさんが答える。

「ああ、昔、小学校と中学校の同級生でね、小学生のときは、特異な点といえば、戦争のことに詳しかったことだけだった。別に今みたいに中国が、韓国が、とは言わなかった、しかし、あの事件を機に変わってしまったんだよ。川場は」

ペナルティが聞く

「あの事件とは、一体？」

おじさんは答えた

「あいつもかわいそうだ。あいつは五人兄弟の長男、小学校六年生の時だったかな、母親が、中国人に殺されたのだよ。まだ、下の兄弟は、幼稚園に通っていたり、小学生だったりして、面倒が必要だからって、父親は仕事をやめた。家計も急に苦しくなり、あの頃は

大変だったみたいだ。そのことがあってから、人格が変わってしまった。あいつは、高校には進まなかった。そして、その家族もこの町から消えた。」

ペナルティはそんなことを聞いていて少しかわいそうだったが、自分の恨みを返すために中国や韓国を攻撃するなどもってのほかだと思っただ。

「そういえば、お母さんとお父さんを亡くして悲しくない」

「最初は悲しかったけれども、今は大丈夫です。」

ペナルティは、その後、戻って、マオたちにおじさんから聞いたことを話した。

これから長い旅が始まる雰囲気さえなかった。なんだか、みんながたくましくなったみたいだった。

そのころ東京では、福岡で失敗に終わったことが伝えられた。川場はこう言った

「まだまだ時間はたくさんある。こっちは、あと一ヶ月半あれば大丈夫だ。邪魔なもののはどんどん排除せよ」

第18話 馬も越せぬ大井川

次の日、ペナルティたちは名古屋の中部国際空港へ飛んだ。ちゅうぶこくさいくうしゅう

そのころ、川場は、部下に指令を出した。

「馬でも越せぬ大井川」おおいがわ

これを聞いた部下は、大井川のダムへ向かった。

列車に乗り込んだペナルティたちは、焦っていた。静岡から東京まで二百キロ以上あるからだ。がんばっても3日はかかるだろう。それに、川場の攻撃がいつくるか分からない。

豊橋まで来た。この列車は浜松行だった。はままつゆき 浜名湖を過ぎればもうそ

こは、静岡の第二の都市、浜松だ。列車は快調に進むと思ったが、浜松について驚いた。大井川の橋が流され、静岡まで行けなくなってしまった。列車で掛川かけがわへ行き、掛川からは歩いていくしかない。

しかし、ここから東京までは二百六十キロ以上ある。しかし、高速バスも運行されていない状況では、歩くしかない。

大井川は水位がまだ高かった。ペナルティはこの歌を思い出した

「馬でも越せぬ 大井川」

鉄道の橋が流されたが、東海道の橋は流されなかった。むかし、東海道の大井川に橋をかける時に、柱に人を抱きつかせ埋めたという話を聞いたことがある。そのおかげなのだろうか。

水位はまだまだ高いものの、橋は何とか渡れそうだ。しかし、東海道の橋の前に誰かが立っている。

橋の所に立っているのは、天童だ。てんどう 天童は、マオと同級生だ。

「くそ、鉄道の橋は流れたが、この橋は流されなかったとは、想定外だった。しかし、この橋は渡れない。見てみる、こんな状況じゃあ渡れないだろう。しかもこの橋は、真ん中はこのよりも低い。お前らなんか海まで流されてしまう。どうだ、参ったか。」

ペナルティたちは、考えた。大井川は、馬でも渡れないほどの流れだということだ。船さえ無いこの川をどうやって渡ればいいんだ。

もう夕暮れ時になった。やっと大井川の水も引いてきた。しかし、ここから静岡まで歩けない。その時、朗報を聞いた。隣の島田^{しまだ}から静岡まで運行しているらしい。急いで駅に着いた。そこには、静岡の名産のみかんの木からこの塗装を考えられたという湘南色^{しょうなんしよく}の列車が止まっていた。静岡に着いた時には、もう皆くたびれていた。

第19話 静岡のお茶はどうだ？

次の日、出発しようとして外へ出たところ、また、誰かが立っている。

「静岡といえぱやっぱお茶とみかんでしょ。ということで、お茶の

ソムリエ、髪我根^{かみがね} ただいま参上」

ペナルティがつっこむ

「なに、髪が無い」

髪我根が答える。

「髪我根だ。マオたちと同級生だ。早速、どれが静岡茶か代表1人に当ててもらおう。ここに、狭山茶、宇治茶、静岡茶が置いてある。

この中から静岡茶を選べ」

一見、どれも同じ色の濃さをしている。

「ここは、マオが飲んだほうがいい。」

メイリイが言う

「そうだ」

みんなの意見が一致した。

マオが飲んでみる。

「さあ。どれが、」

髪我根が言う。

「これだ」

マオが言う。

「じゃあ一杯ずつ飲んでみるか」

髪我根はそういうとマオが口つけたお茶を飲み始めた。髪我根が言う。

「これは、狭山^{さやま}の荒井^{あらい}さんの味がする。」

次のお茶へ行く

「これは、宇治^{うじ}の遠藤^{えんどう}さんの味がする。」

最後にマオが静岡茶だと言ったあのお茶を飲む。髪我根が言う。

「うー。お前こんなものがよく飲めるな。これは、静岡茶じゃな

くて、田子の浦のヘドロ水に伊藤園のおーいお茶の粉末を入れたものじゃないか。」

ペナルティが社会で習った公害の話を出す。

「田子の浦って、静岡の富士市の製紙・パルプ工業用の排水が流れて、臭くなっちゃったというところの水か。」

ペナルティが続けて言う。

「しかし、おーいお茶の粉末は静岡産のお茶を使っているよね」
髪我根が言った。

「ああそうだ。しかし、俺はこんなお茶、用意していないぞ」
ペナルティが言った。

「じゃあ、いったい誰が。」

その時、影から一人の女が出てきた。

「植松」

ペナルティが指をさした方向にマオが学校で戦った植松が立っていた。植松が言う。

「はっはは。お前らに私は負けたが、第一軍団の隊長になることができた。川場は、もう一回私にチャンスをくれると言った。箱根で待っているぞ。」

植松は、何処かへ行っちゃった。

「この勝負。俺の負けということだ。お前はすごい。」
そう言うとき髪我根は何処か行っちゃった。

「さあ急ごう。今日は箱根まで行くぞ。」

まだ、朝早い時間、ペナルティたちは旅立って行った。

第20話 箱根戦争勃発!!

ペナルティたちはその後、順調に箱根まで来た。箱根と言えば温泉、宿に着いたあと、早速温泉へ。今までの疲れを癒せた。温泉の後は、料理。その料理が出てきた。料理を食べている時、マオが言った。

「味が分からない」

その時、窓のほうから不気味な笑い声が聞こえてきた。

「植松」

ペナルティが指を指した。その方向には、植松が立っていた。植松が言った。

「やっと効いてきたみたいだな。」

ペナルティが言う

「何を入れたんだ。」

植松が答える。

「あのヘドロの中に少し有機水銀ゆうきすいぎんを入れたのさ。知っているだろう。水俣病みなまたびょうを」

ペナルティは社会の時に習った水俣病を思い出した。

水俣病とは、1989年に起きた公害で、四肢ししが麻痺まひしたり、神経がやられてしてしまうものだ。

「治療薬がほしければ私をまず倒すことだ。」

ペナルティは今までも何でもマオや他のみんなに頼っていたからこんなことになってしまったのだ。今、俺が立ちあがらなければいけない。ペナルティは決心した。

「明日、芦ノ湖あしのこから、箱根湯本までどちらが早くゴールに着くか競争だ」

植松は、

「いいだろう」

と言った。

次の日、箱根は快晴かいせいだった。

朝、芦ノ湖へ行った。そこには、植松がいた。

「箱根湯本へどちらが先に着くか。早く始めるぞ」

ペナルティは焦っているようだ。

「よし、行くぞ」

スタートした。芦ノ湖^{あしのこ}からは少し東海道は登り坂になっている。そしてその後、下って箱根湯本だ。上り坂に二人は少し苦勞しながらも何とか下り坂のところまで来た。植松もなかなかやる。まだペナルティとの差はわずかだ。下りに入り、植松は、スピードを上げてきた。

しかし、スピードを上げて後々抜かされてしまうのが落ちと言うものだ。このまま植松に抜かされても問題はない。このスピードでいこう。植松に抜かされた。あと、二キロで箱根湯本だ。二キロならば大丈夫だ。だんだん箱根湯本の町が見えてきた。あと五百メートルの所で植松に追いついた。植松は、疲れながらも最後までがんばっている。もうゴール。植松を少しずつ引き離していく。そしてゴールした。

「さあ、例のものを」

ペナルティが言うと、植松は、無言で渡した。そして、こう言った。

「列車が用意されている。それに乗れ」

マオに薬を飲ませ、列車に乗り込んだ。ホームで植松が後ろの車両へ向かっていくのを見た。

マオの容態^{ようたい}もよくなり、もうすぐ東京だ。ついに川場との対決が始まる。

第21話 載しかかる想い

ペナルティたちは、東京へ戻ってきた。東京の新宿駅は、いつもの人の多さではなく、しんと静まり返っていた。ペナルティは新宿駅で後ろに乗っていた植松にこう言った。

「川場のところへ連れて行け」

植松は下を見て、笑いながらこう答えた。

「連れてってあげるよ」

ペナルティたちは不気味な笑みを浮かべる植松が気になった。

そのころ川場は、箱根はこねで植松が負けたことを聞いた。川場はこう言い放った。

「植松に前、こういう契約をさせただろ。お前に箱根であの少年らと戦ってもらうと、それで、もしも、お前が負けたら、俺らが殺してもかまわないと、今、俺は防衛省ぼうえいしょうにいる。さてショータイムが始まるな。準備しろよ。例のところで実行してもらうぞ」

ペナルティたちは、飯田橋いいたばしで降りた。飯田橋も新宿のようにしんと静まり返っていた。車1台さえ走っていない。

横断歩道を植松が渡ろうとしていた。車が1台も走っていない大きな横断歩道など初めてだ。植松は信号を無視して渡る。その時、いきなりダンプが植松をめがけて突進してきた。

「危ない。植松」

ペナルティが叫んだ。しかし、遅かった。ペナルティたちは、植松のほうへ駆け出した。

植松は苦しうにしながらこう言った。

「お前らは、福田や私を殺して楽しいか、お前らは、正義だ。正義だ。と言ってやっているが、どこが正義せいぎなんだ。お前らのやっていることは殺し屋と同じではないか。」

植松は、言い終えると静かに息を引き取った。

ペナルティはこう言った。

「俺たちは、薬で操られている人間を倒して行っているだけなんだ。その薬の影響さえなければ、俺たちが殺さなくてよかったんだ。俺は人殺しだ」

ペナルティが悩んでいるとき、後ろから川場が出てきた。川場が言った。

「悩め、俺の母親に中国人はひどい事をしてくれた。俺も今の君のように考えた。いつか復讐ふくしゅうしてやると心に決めたんだ。あのとき。そうだ。俺の指示にしたがえばこれ以上、人を殺さなくて済む。お前らの大事な、そして、俺の作戦をことごとく破り捨てた李をな。」
マオが言う。

「お前が指示をしたのか。お前は自分のことしか考えていない。」

川場が言い返す。

「黙れ。この俺が憎む中国人め。俺の気持ちがお前に分かるものか。お前みたいな奴がいるからだめなんだ」

川場は、こう言い返した。

「じゃあ。お前が今まで心の中に刻み込んできたことが本当に正しいか証明しろ」

マオは、即断でそれを受けた。

第22話 信念の強さ

川場は、ペナルティたちを川場が乗っ取った首相官邸しゅしょうかんでいに連れてきた。「俺は、お前らの信念である“他人を思う気持ち”というものを見たい。もしも俺を納得させたら、李を解放してやろう。しかし、お前らがもし負けたら、お前を縛り付けて、李と同じ牢屋にぶち込んでやろう。お前の得意なもので勝負していいぞ。」

マオは、料理で勝負することにした。ペナルティは、落ち込んだまままだ。

マオはこの状況をなんとかしても解決したかった。今まで、助け合った仲間だ。ここで、ペナルティに改めて気づいてほしい。友情とは、そして、何故人を殺してはいけないかというのか、それは、人間は、お互いに助け合わなければ生きていけないということだ。ペナルティは、表面上のことだまされているんだということ。

首相官邸でマオと川場の勝負が始まった。いや、これは、マオと自分勝手という厄介者との戦いだ。

マオは考えた。今まで見てきた日本の文化。昔、マオは、李さんにペナルティに秘密で京都に連れて行ってもらった。その時出会った日本の料理。それと、僕の持っている中華の知恵を合わせる。

ついにマオは作り始めた。ペナルティは悩んだまま。早くペナルティの悩みを取ってあげなければいけない。

一時間が過ぎた。マオの料理ができた。

「お前、覚悟はできているな。」

川場の問いに対してマオは、片手のこぶしでもう片方の手のひらをたたいた。

「ほほう」

川場もその意味を分かったようだ。

「料理は何だ」

川場が改めたように言う。マオがふたを開ける。中から中国と日本

の国旗の形をした料理が出てきた。マオが言う。

「日中友好料理、完成」

川場はまず、日本の国旗のほうから食べ始めた。

「ううっ、これは、日の丸ご飯のように見えるがご飯は白魚のすり身が入っている。これをチャーハンのようにしたな」

次に中国の国旗のほうを食べる。

「人参の煮つけと鯛のすり身で表現されている」

川場は少し黙った。それからこういい始めた。

「昔、俺の母親と妹は、植松が死んだあの交差点で引かれたのだ。

僕たちは、父親の出張で東京に来ていた。そこで、三人で箱根へ行ったのだ。そして、お前らみたいなルートをとって東京へ帰ってきた。そう俺の最後の母と妹の思い出はロマンスカー。妹の名前は愛子というのだが、とてもかわいかった。そして、ホテルに行くためにあの横断歩道を渡った時、信号無視の車がきた。愛子は、即死。母親も一時は意識が戻ったが一週間後に死んだ。今から言えば、俺がこんなことをやっているのは、母や愛子に背いていた。君のおかげだ。」

ペナルティの悩みも解決したようだ。

「最後に一つだけ聞きたい。君たちは、なぜあそこまでしてがんばれたのだ。」

マオが答える

「僕は、ペナルティと会えて良かった。日本と中国や韓国と仲良くできる。たとえば歴史の問題があらうと。」

第23話 解散の時

東京に人が集まってきた。この事件によって亡くなった池田や植松の親は、悲しんでいたそうだ。

世の中は、その後、テロが減少し始めたそうだ。国の英雄となったペナルティたちを李さんが集めた。そして、こう言った。

「これで、多少犠牲が出てしまったが、これで、やっと平和な生活ができるようになった。そこで、これより解散とする。」

ペナルティたちはそれを聞いて驚いた。

ついにマオたちと別れるときが来てしまった。

「じゃあまた。」

マオがペナルティに言った。

「大丈夫。君の力強さに百点をつけられるよ。人間と言うものは、争いをやめられないものなんだ。名誉や金や地位。しかし、そこにあてはまらない人たちがいる。僕は、そういう人が増えて欲しいと思う。逆に、減ってしまえば、また会うことになるだろう。」

ついに別れの時がきた。

ふと気がつくところには、いつもの光景が広がっていた。

「今までのことは夢か」

ペナルティがとぼけていると横に不思議な箱がある。その中から、翻訳機だと言われた機械があった。

「夢じゃなかった。」

そのとき、母親が呼んだ。

「学校へ遅れるから早く。」

死んだはずの母親がいる。

世の中には不思議な体験をする人がいる。ペナルティのその1人なのかもしれない。

学校へ着いた。今日から新学期。始業式が始まった。新任の先生が壇上の横に並ばされていた。そこに、見覚えのある顔が、それは、

川場だった。

「なんで、夢で出てきた川場がここに。」

よく見てみると、夢で出てきた時よりも年を取っている。

学校から帰ってきたとき、あの夢のことを考えていた。現実にか起きたのか区別がつけられなかった。

家に着くと、ポストに手紙に入っていた。その手紙には、こう書いてあった。

「再集合 李より 夜、迎えに来ます」
ペナルティは準備をした。

第24話 再集結の訳

ペナルティは、夜、待っていた。ペナルティが眠りかけていたとき、窓をたたく音がした。

「李さん」

その音に気づいたペナルティが窓を開ける。

「どうしたのですか」

李さんは答えた。

「マオたちが、時空に挟まれてしまった。僕は、なんとも無かったのだが……。このままだと、マオたちの体に異変が起きてしまう。君が持っているその機械を使って救助してくれ。あとそうそう。どうやら、この機械は、未来のインターネット世界につながっているらしい。気をつけてくれ。ああともう1つ。」

ペナルティが言う

「言うことがまだあるなら待っていますから。もしも、マオたちが死んだら大変ですから。」

李さんは答えた。

「ああ。そうだな。しかし、君。意外と重いね、まさか君が解散の後、あそこで寝てしまうとは」

ペナルティは、寝ていたのだ。李さんが続けて言う

「しかし、驚いたことばかりでもう頭パニック。君の親は生きているし・・・」

ペナルティは思った。

『なぜ、親が生きているのだろうか。そして、なぜ川場が教師になっていたのか。この2つにはあまりにも時間差がある。』

そのころ、20XX年、大変なことになっていた。町のいたるところが変色し、町が時代博物館と化していた。』

次の日、一階に行くと親はいなかった。

「一体どこに」

ペナルティは急いで二階に駆け戻った。

そして、李さんにこう言った。

「時空が変だ。」

李さんは不思議そうな顔をしていた。

さっきの李さんではない。

もう一回、一階へ降りた。

しょうがない、一人でやるしかない。

そういえば、李さんがこの機械を使えって言っていた。一体どうやって使えばいいんだ。

その時、機械から声がした。しかし、今までに聞いたことの無い声だ。

「誰なんだ。」

ペナルティが言う。

「僕は、フレンドマン。僕は、君のためにピアノマンがパワーアップした。僕がマオたちを助ける。僕のいうことを聞いてくれ」
そして、マオたちを助けるためにインターネットに接続した。

第25話 時空事変

「マオたちがどこにいるのか探してくれ」

ペナルティは焦っていた。

「いた」

フレンドマンが言った。

「すぐに助け出してくれ」

ペナルティが叫んだ。

「これから、実体化するからそこにいて」

フレンドマンが実体化のやり方を教える。

「マオ、メイリイ」

ペナルティは泣き叫んだ。

「俺は大丈夫。」

マオがそういうが、怪我^{けが}の程度がひどい。しかし、病院には連れて行けない。ペナルティは、どうすればいいか考えていた。

その時、李さんからメールが届いた。未来からだ。

『今、そっちへ向かう』

まさか。次の瞬間、李さんが来た。

「大丈夫かい。」

李さんが言ったが見れば分かる。ペナルティはこう言った。

「大丈夫じゃない。」

李さんは、ペナルティの答えを無視して鞆^{かばん}から薬を出した。

「この薬を飲ませればたちまち治る。」

そう言って李さんは薬をマオたちに飲ませる。そのあと、マオたちの体に異変が起きた。

「治って行く」

ペナルティは驚いた。ペナルティは、李さんに聞いた。

「その薬どうしたのですか。あとさっきから様子がおかしいですよ。李さん。」

李さんは答えた。

「実は、こんな手紙が、君の部屋の前に落ちていたんだ。」
中身を見てみた。そこにはこう書かれていた。

『この手紙を拾った方へ

この手紙をペナルティに渡してください。ペナルティ、皆さん。君達の活躍を聞きました。未来の者です。今、未来では大変の事になっていきます。私たちは、国の協力で、過去や未来に行けるシステムを開発しようとしてました。ところが、何処かに混ざってたっていたウイルスによって、時空がおかしくなりました。どうか助けてください。』

その手紙を読んだ後、李さんがこう言った。

「君たちに渡した機械があるだろう。それは実は未来の機械なのだ。僕も未来人なんだ。」

一瞬、場が静まった。続けてこう言った。

「俺たちの世界も時空がおかしくなっていた。人々は、おかしい病気にかかった。それを治すのがさっきの薬だ。僕は、過去にいたという少年の話を聞いた。それで僕は、過去に行った。その時に会ったのがマオたちだ。僕は、マオたちに会って、これはいける。と思った。しかし、人手が少ない。それに、試したかったのだ。どんな力を持っているのか。そこで、
2003年に来たわけだ。そして、君に会った。今までの事件は、本当は、俺が考え出した。ゲームの一種だ。そう。これもゲームの中だ。しかし、ゲームの中まで混乱してしまった。早くここから出なければ、さらに大変なことになる。」

その時、ゲームの中が崩れ始めた。

「さあ早くしなければ、君たちは、元に戻れなくなる。君たちが持っているナビと協力してくれ。あと、未来に一人の少年が待っている。光 熱斗という少年だ。さらばだ。」

李さんは消えた。

「マオ。メイリィ。シロウ。行くぞ」

ペナルティたちは、一斉にナビを出した。

第26話 未来へ

ペナルティたちはナビを使って現実世界へ行こうとしていた。

しかし、やり方がわからなかったので、ナビに「ああしろ」「こうしろ」と言われながらであった。

「ついに出了れた。」

ペナルティたちが喜んでいるとそこに一人の少年が立っていた。

「光^{ひかり} 熱斗^{ねと}くん？」

ペナルティが聞くと答えた。

「ああ。君たちがペナルティたちか。科学省へようこそ」

その時、ブザーが鳴った。

「またか。今度は何だ。」

熱斗くんが走って行ってしまった。

「どこへ行ってしまったのだろう」

ペナルティがそんなことを言っていると前から誰かが歩いてきた。

ペナルティたちの前に立つとその人はこう言った。

「やあやあ、君たちが、あの過去から来た子供たちか。」

シロウがこう言った。

「あのおっちゃん。誰。」

おじさんはこう言った。

「僕は、君たちを連れてくるように李に頼んだ人物だ。君たちに期待をかけているよ。」

「ありがとうございます。ところで、なぜこんなことを。」
ペナルティが問う。

「実は、私たちだけでは、収集がつかない。だから、君たちに来てもらった。厚い友情。そして、行動力。どれをとっていてもすばらしい。ところで君たちはまだこの機械になれていないようだね。熱斗君に教えてもらうのがよいだろう。」

たらいまわしにされているとペナルティは怒った。

おじさんと話していると熱斗君が戻ってきた。

おじさんが言う。

「熱斗君。君に命令する。あの子たちの面倒を見てくれ」

熱斗君が言う。

「もう面倒は見ていますよ。」

熱斗が呼んだ。

「しばらくは、うちにおいで。その代わり、料理人がいると聞いたのだけれども。料理、作ってくれる。」

マオが言う。

「もちろん」

熱斗は喜んでいた。

その夜、光家。

「うわー。うめー」

熱斗君の悲鳴？が聞こえる。

「こんな奴が、ネットセーバーとかいうのに任命されたのか？」
ペナルティは小声でマオに話す。

その頃、ある倉庫街の一角。

「時空は予定どおりおかされております。どうしますか」

その一角にいる女が言う。それに女の前に座っている男が答える。

「ああ。もうそろそろ出す時が来たか」

その夜の月は赤かった。これから何か起きることを教えるように。

第27話 ついに動き始めた悪の組織

翌朝。その日は曇っていた。まるで今までとは違う。もっと恐ろしいことが…。

しかし、熱斗は相変わらず元気だ。ペナルティたちに機械の操作方法を教える。さすがに覚えるのも早い。

ペナルティたちに教え始めてから1時間くらいたった頃。熱斗の機械に通信が入った。

「熱斗君。それに、マオ君たちに出動命令だ。」

熱斗が答える。

「名人さん。それはどこですか。」

名人はいつものつつこみを入れる。

「さん是要らない。超巨大ウイルスたちだ。場所は」
そのとき通信が切れた。熱斗が叫んだが応答が無い。

「科学省へ行こう。」

熱斗たちは科学省へ急いだ。

科学省は大変なことになっていた。

「ウイルスに襲われている。」

マオたちは、啞然としていた。未来では、こんなことが起きるのかと。

熱斗は、ナビのロックマンをプラグインしようとしていた。

しかし、周りの様子もおかしい。

熱斗が声を上げた。

「デイメンシヨナルエリアが出現している。しかも、大きさが半端じゃない。」

ペナルティたちは、もう着いていけない状況だ。

「よし、ロックマン。クロスフュージョンだ。」

熱斗があるチップを入れた後、熱斗の周りを光が包んだ。

「何がおきるのだろうか」

ペナルティはマオに言った。

光から開放されたとき熱斗は、ナビのロックマンと合体した。そして、次々とウィルスを倒してゆく。昨日の姿とは大違いだ。

「いや、感動した」

小泉総理の真似なのかペナルティは、うなずいていた。

「いや、それほどでも」

熱斗も有頂天になっていた。

しかし、まだ、これは序の口であった。

悪の組織は、他のところで動いていた。しかし、まだ熱斗たちは気づいていなかった。

悪の組織が出した巨大ナビと戦っていたのは、ブルース・炎山たちだけだった。

しかし、炎山たちだけでは足りない。しかし、通信状況が悪い。実は、通信を阻害する電波を発信されていたのだ。しかし、そんなことを知る由も無く戦いは続いていた。

第28話 時空の統合を阻止せよ！

熱斗たちが家に戻ろうとした時、人々が一生懸命、走ってきた。

「どうしたのですか」

熱斗が一人に声をかける。

「今、ネットセーバーが戦っている。」

声をかけたひとはそう答えた。

「よし行くぞ」

熱斗がマオたちに言った。

現場に行くとそこでは炎山とブルースが戦っていた。

「よし俺たちも戦うぞ」

もう一度、熱斗とロックマンも合体した。

熱斗とロックマンが加わったものの苦戦を強いられている。

「俺たちもナビと合体したい。」

マオが言い始めた。

「これを使いなさい」

後ろを見るとそこには、名人が立っていた。

「これは…」

ペナルティが名人の手のひらのチップを見ながら言った。

「これがシンクロチップと言うものだ。熱斗君から聞かなかったのか？」

名人はチップを見せながら言った。そして続けて言う。

「これをそのPETという機械に入れば君と君のナビが合体できる。」

ペナルティたちはそのチップを入れようとした。しかし、待ったが掛かった。

「なんですか。」

ペナルティが言う。

「その前に攻撃するためのチップが必要だ」

名人は、知っていたかのように言う。

「何でそんなことを言わなかったのですか」
ペナルティが怒った。

「いや。忘れていたのだよ」

名人が答える。その間にも戦いが続いている。そこに、熱斗の仲間が来た。

「よし。一気にやっつけるぞ」

熱斗が叫ぶ。

そのとき、敵が言った。

「俺を倒してもまだまだ出てくるぞ。強いのがな」
それを言い、敵は姿を消した。

「くそっ。プラグアウトしたか。」

炎山が言った。

「まだまだ敵が現れると言うことなのか。」

熱斗たちは不安に包まれた。

その頃、悪の組織。

「なぜ、お前は最後まで戦わなかった。」

前にどっしり座った男は、そう言った。

「でっ。ですから。わたしは…」

さっき、敵のナビとして戦っていたポストマンが言う。しかし、男は聞かない。

「お前などはいらん。」

男が言う。ポストマンは何処かへ消えてしまった。

第29話 時空に開いた穴

次の日。昨日の夜に雨が降ったおかげか、晴れていた。

「今日はいいいことがあるといいのだが…。」

マオが言う。

「大丈夫さ。」

ペナルティがやさしく答えた。しかし、このあとこの答えを覆すような出来事があることを誰も知らなかった。

「ペナルティ、マオ。」

熱斗が呼んだ。

「どうした？」

ペナルティが熱斗に聞いた。

「また出たみたいだ。名人さんがペナルティたちも来るようにだつて。」

「どうやらペナルティたちの力を認めてくれたようだ。」

「よし行くぞ。」

ペナルティたちは現場へ向かった。

ペナルティやマオ、熱斗、炎山が戦っていることを後ろから確認して、ある男がPETにチップを入れた。ある男がチップを入れた後、科学省に熱斗の父。祐一郎は、名人からある報告を受けた。

「電算シティ上空に時空の隙間が出現しました。」

それを聞いた直後。電算シティをすごい風が襲った。

熱斗たちもまきこまれた。

敵が言う。

「どうだ。参ったか。このまま飛ばされて何処かへ行ってしまう。」
敵のナビはそれを言い終わると姿を消した。

「大丈夫か。炎山。マオ。ペナルティ。」

しかし、その声は届かなかった。そして、四人は飛ばされてしまった。

それをさっきの男がモニターから見てこう言った。

「これで邪魔者は消え去った。さて、ついに時空消滅プロジェクトでもおこなうか。」

それにさっき熱斗たちと戦っていたナビ。時空マンが言った。

「はい。準備をさせてもらいます。Mr. 田中。」

「あ。痛たったた。」

ペナルティたちが気づいた時には、周りには何も無かった。

「ここは。」

炎山が言った。

そのとき声がした。

「気分はどうかね。」

「お前は何者だ。」

炎山が言った。

「ここを何処だとも思っているのかね。炎山君。君たちは、よくもこんなに私の計画をめちゃめちゃにくれた。最初は、支配しようと思ったが、やはり、あんな世界などはいらん。お前たちが帰れないようにしてやろう。」

そのころ地上では、熱斗や炎山。それにペナルティたちが飛ばされたことが祐一郎に伝えられた。

しかし、熱斗たちが飛ばされたところがかめなかった。

「まさか。あの穴に飛ばされてしまったのでは。」

祐一郎がそう思っている時に名人があることを伝えに来た。

「あの穴は、時空への入り口ではない。あれは、ネット空間とつながっている穴だ。」

祐一郎は驚いた。そして、熱斗たちの安否が気になった。

第30話 支配を阻止せよ。

男は熱斗たちにこう言った。

「ここから出るには、まず俺と勝負してからだ。しかし、今度のナビは今までのナビとわけが違うぞ。」

熱斗たちには迷う時間など無かった。早くしなければ、21世紀がなくなってしまう。

「よし。やるぞ。」

熱斗たちは声を合わせて言った。

「せいぜいがんばるがよい。そのまま、部屋にプラグインしてもよし。シンクロチップを使うもよしとしよう。」

男が、プラグインした。

熱斗や炎山たちもプラグインした。

そのころ科学省では、熱斗の親友のメールやデカオたちが呼ばれていた。

「君達のナビをあの穴へ入れて熱斗たちを助けだして欲しい。」
皆、うなずいた。

「じゃあ。名人。ビームの用意だ。」

祐一郎が言った。メールが祐一郎に聞いた。

「ビームって、なにに使うのですか」

祐一郎が答える。

「ビームをあの穴に打つ。そして、あの穴の中で実体化したナビが人を救うという計画だ。」

熱斗たちは苦戦していた。今までのナビとはまるで違う。

そのとき、熱斗たちの前にメールたちのナビがやってきた。

しかし、その時、穴の入り口が閉められてしまった。

「ここから逃がすわけにはいけない。そうだ。もうそろそろ行おう。例の儀式を。」

さっきまで戦っていたナビが姿をけした。

科学省では大変なことになっていた。

「熱斗たちと連絡がとれない。穴が消えた。」

名人の一言によって空気が変わった。

メイルたちは黙ってしまった。

その頃、熱斗たちはどうすればいいか考えていた。

「はははっ。どうすることもできないのか。これで、時空は、俺のものになる。」

熱斗たちは悔しかった。

『俺らはこのままでもいいのだろうか。このまま21世紀がなくなってしまうのか。』

その時、一つの光が見えた。

「あの光は。」

熱斗たちが言う。

そう。それは、科学省がビームを使って開けた穴だ。外は、ダイヤモンドエリアダ。

「みんな。外へ出るぞ。」

炎山が言った。

「くそ。俺の計画が。」

Mr. 田中は、頭を痛めていた。

「熱斗。」

メイルが熱斗の所へかけてきた。

シロウが後ろから来た。

マオにこう言った。

「本当は、メイリイにやってもらいたかったくせに。」

シロウの一言にマオとメイリイは怒ってしまった。

第31話 元の世界へ

「もう用はなくなった。もうこれで地球46億年の歴史が守られた。ありがとう。ペナルティ君。そして、マオ君。皆を送って行ってくれ。熱斗君。」

貴船長官が見送る中、熱斗とペナルティ・マオたちは、ついに出発した。

「ついに別れの時が来てしまった。今までの旅は楽しかった。ありがとう。」

もうそろそろ2003年だ。

「ついにお別れだ。」

ペナルティの部屋に着いたとき、様子がおかしいことに気がついた。「どういう訳だ。家に一人もない。親が殺されたというのはゲームの中の話だったのでは、まさか。」

マオが気づいたみたいだ。

「この時代は、ゲームによって犯されたのでは。」

マオが言った。

外に出てみると午後の3時だというのに児童が歩いていない。

家に戻ったペナルティたちはどうするか考えた。

「俺がロックマンと一緒にプログラムを直す。」

熱斗が言う。

「しかし、プラグインする所が無い。」

マオが言う。これで、もう一つしか方法がなくなってしまった。

「行こう。総理官邸へ。」

しかし、今度は負けるかもしれない。事態は、あの戦いの時間分深刻になっていた。

電車は動いていなかった。歩いて行くしかない。

事態は思っていたよりもひどかった。霞ヶ関は、戦車で囲まれていた。

「これはまずい。このまま行くと。」

もう目に見えていた。しかし、この前のようにはいけない。

途中、休んだときにシロウが言った。

「しかし、乗り込んだとしてもどうすればいいんだ。たちまち捕まってしまう。そうすれば、きつと・・・」

マオも黙り込んでしまった。

料理という手はない。どんなにうまくともここまで来てしまっただろうしょうもない。

「今日はやめよう。計画がしっかりしなければだめだ。」

その日はペナルティの家に戻った。

テレビはついたがNHKしかやっていない。しかも、中国との戦いの準備が着々と進んでいるということばかりしかやっていない。もしかしたら明日には・・・。そんな思いが、皆の心の中にあった。

第32話 戦争を阻止せよ

「俺は何のために今まで戦ってきたのか。」

マオが悩んでいた。

ペナルティは、考えていた。

「俺が悩んでいた時も助けてくれた。何でもいいから早く日本を救わなければ。」

しかし、なかなか見つからない。ピアノがすごくまいわけでもない。マオみたいにかつて一位、二位を争うような地位ではない。

熱斗も悩んでいた。ここでは、ネットバトルは通用しない。

そのとき、マオの頭の中で戦争を回避するためのヒントがあった。

マオはこんなことを考えていた。

『日本と中国。とても楽しい思いができた。ペナルティとあつていなければ日本という国を堪能はできなかつただろう。日本の中の中国を表現できれば。』

そして、その夜はすぎっていった。

次の日。

「よし行くぞ。」

熱斗の掛け声で総理官邸へ行った。ゲームの中では、川場が出てきたが実際、誰が出てくるか分からない。総理官邸に着いた。

「料理をお持ちしました。」

警備の人に言った。

「お前ら子供だろう。」

言われてしまった。しかし、マオがこう言った。

「父親の誕生日で、息子さんから頼まれたのです。」

警備員は、了解したのかとおしてくれた。

「よし一揆に行くぞ。」

部屋に入るとそこには一人の男が座っていた。

「早く料理を出せ。」

その男が言う。男は、後ろを見ていた。

「はい。只今。」

その男が前を向いた瞬間。ペナルティは絶句した。

それは、ペナルティの恩師だった。

「ようこそ。」

その男は、その一言を言った。

「君たちの事は前から知っているよ。君たちの力を見させてもらうよ。未来で事件を解決したことが出来ても俺をおることは難しいよ」ペナルティの恩師。そして、今は敵であるその男はマオが作った料理を食べた。

「うまい」

ペナルティの恩師は何かからさめたような顔で言った。

「君たちは、僕を目覚めさせてくれた。今まで何をやっていたのだろうか」

その後、町に人が戻り始めた。しかし、戦争を止めても、ウイルスによる被害を食い止めることは出来なかった。

「俺たちと一緒に来るか。」

ペナルティにマオと熱斗が声をかけた。

「はい」

それは、この定められた運命を歩んでいくことを決心したこと。そして、もうこの世界には戻らないということを決めた瞬間であった。

第33話 最後の2003年

ペナルティは、マオや熱斗たちをあるところへ連れて行った。

最後の2003年を楽しむべく、そして、最後の2003年を終えるべく行った所。それは箱根だった。

ゲームの中では、峠を走ったが、今日はゆっくりとしていき、そして、ついに明日。お別れだ。

「よし。まず温泉だ。」

熱斗は相変わらずのはしゃぎようだ。しかし、ペナルティは、まだ、けじめがついていないようだ。

「大丈夫。俺がついているから」

マオがやさしくしてくれた。

「僕にも同じような経験があるよ。僕は、中国のある有名な店に修行に行った。そして、修行もおわり、僕は、他の所をまわっていくとき、メイリイと別れなくてはいけなかった。出発の日、メイリイは港にこなかった。今までこられたのもメイリイのおかげだった。

そんなメイリイと別れるのはとてもさびしかった。そして、メイリイが編み物と手紙をもらったとき僕は泣いたよ。」

マオは、自分の経験を話した。

ペナルティはその後のことを聞いてきた。

「そうしたら、ハンカチを差し出す人がいて、それがメイリイだったんだ。」

ペナルティはその話を聞いて笑っていた。

「おい。温泉に入らないのか。」

熱斗の声がした。

「入ろうか」

マオが言う。三人は誰かが抜けていることに気づいた。

「シロウ」

気づいたのも遅く。シロウは、女湯にひそかに入って、桶やらが飛

んでくる始末。

「いや。痛かった。足に石鹼が当たったんだ。これもみんなシロウのせいだからね」

温泉と言うものは禁物なのかもしれない。そして、一日が過ぎていった。

「よし今日は、熱斗の家に戻るぞ」

ペナルティがはしゃいでいたとき、マオが熱斗に一回、19世紀に料理書を取りに行くといった。

「19世紀へ」

五人はひそかに19世紀へ向かった。

第34話 19世紀へ：

「ここが19世紀。中国か」

ペナルティと熱斗は、始めてみる光景にきよんとしているが、マオたちは久しぶりに戻った広州に大満足だ。

マオたちは、先から歩いてくる3人を見つけた。

「チョウユさん。李さん。ルオウ大師。」

久しぶりの再会となった。

「よう。帰りおったな。」

ルオウ大師が言った。

「未来と言うにはどんな感じだ。」

続けてルオウ大師がマオに聞いた。

「はい、とても楽しい。しかし、今と同じように何かを使って征服や支配をしようとするものがあります。そういう奴とあの未来で知り合ったあの仲間と一緒に戦っています。」

ルオウ大師は感心していた。

「今日は陽泉酒家に泊まって行きなさい。」

チョウユさんが泊まらせてくれると言うことだった。

「よっしゃ。中華料理食べまくりだ。」

熱斗がはしゃいでいるとマオがこう言った。

「その服装じゃまずい。上からこれ着てくれ。」

李さんから渡されたものに着替えた。

「久しぶりだね。一体、何処へ行っていたんだい。」

陽泉酒家の厨房に入ったマオは、お世話になった人からこういわれた。マオは、

「いや。ちよとね」

と答えるのを避けた。

「お待ち。」

陽泉酒家はいつもの活気にあふれていた。

「いただきます。」

熱斗はいつものはしゃぎようだ。しかも、李さんから渡された衣装は、まるで、西遊記で出てきそうな衣装なのでどうしても、吾空と間違えそうだ。

李さんはそんな光景を見て思わず笑ってしまった。

『そういえば、私がマオたちと始めて会ったのもこんな感じの夜だった。』

李さんは、貴船長官から頼まれたとき、ふと読んでいた本に書かれていた記述を読んでマオたちを連れてこようとしたのであった。その本には、皇帝陛下の前で勝負する3人の料理人の話が記されていた。

これだ。と思った李さんは、19世紀の広州に来たのであった。

未来から来たということをルオウ大師に話した。そしたら、マオを呼んで来てくれたのであった。

マオも話を聞いてくれて、そして、決断してくれた。未来に来るとそのときは、本当にありがたかった。信じてくれるとは思わなかった。しかも、マオは、皇帝陛下から一時は料理長に任命されたことがあるぐらいの大物だ。そして、2003年でペナルティに出会えた。マオとメイリイ、シロウと仲良くしてくれた。ここまでになればどんなことがあってもきつと乗り越えられると思った。そう。実際いくつもの難関を越えてきた。今から思えばこれは、神からの1番の贈り物だったのかもしれない。

そして、これからががんばってもらいたい。

そして、その夜は過ぎていった。

第35話 四川へ

次の日：

「マオ、メイリイ、シロウ、気をつけていくんだぞ。」

熱斗とペナルティも行くのだが呼ばれなかった。

マオたちは出発した。

「まだか四川は…。」

熱斗がこう言ったのは、広州を出てから50分ごろだった。

「そんなに近いわけないでしょうが」

とペナルティがつっこむ。

「だったら列車とかで行こうよ」

熱斗がペナルティにこう言った。

「列車なんか走っていない。あるとしたら馬ぐらいだよ。熱斗君」
ナビのロックマンが言う。

「そういえば、シロウも最初はこんな感じだったな。」

シロウは、ふくれっつらをしていた。

「四川まであと何日掛かる。」

ペナルティが聞く。

「さあ。天候にもよるからね。あと体調も。」

マオは熱斗のほうを見る。

「ああ。疲れた。」

広州を出て1日目の夜。ある農村に着いた。

「シロウ」

前から1人の女性が出てくる。

「ここは、何処。」

熱斗がマオに聞く。

「ここは、シロウのふるさとの村さ。そして、この人がシロウのお母さん。シロウも、ここから僕たちと一緒に旅を始めたんだ。」

今日は、シロウの家に泊まることにした。

「生きがいになっちゃいそうにうまい。」

熱斗にあんたは爺さんかとおつこみをいれたいペナルティであった。
「しかし、中国料理は種類豊富なんだな。中華料理という脂っこいものだと思っていたが。」

ペナルティがつつこみたい気持ちを抑えながら言った。それにマオが答える。

「そうなんだ。中国の中にも地域によって料理が分類されるんだ。北京料理。四川料理。広東料理などいろいろな種類があるんだ。」

「じゃあ、飽きることなく食べられるね。」

ペナルティは、それを聞きながら寝ていた。

「さて寝るとするか」

マオたちも眠った。

第36話 少林寺の戦い？

湖北省などを通り、四川省の手前。重慶市に着いた。

「後もう少しで四川省だ。」

マオがいう。

「しかし、中国は広い。いやー、よくまあ一人で広州へ出てきたものだな。」

熱斗は、旅の途中、ずっとこんなことを言っている。

「体力がないではないか。」

ペナルティが熱斗に言う。

「いやいや。」

熱斗は、そんなことは無いと否定した。

「少し休んだら。四川へ向かうぞ。」

その時、どこかで見たことのある男が近づいてきた。

「あなたは、帰ってきたきそこねた少林寺拳法部でいちやく有名になったという。あの山地さんではないか。」

そう。前、ゲームの中で出てきた学校にいた奴だ。しかし、なぜここに。

山地は、こぶしを打ってこう言った。

「久しぶりです。戦いを申し込みます。」

いきなり、申し込まれるとは。マオは困った。

「さあ。早く。」

山地が攻めていく。

「しょうがない。やろう。」

マオは決断した。前、シロウがお金を落として店の人に怒られたとき以来かな？なんて思い出していた。

「じゃあ。行きますよ」

山地が言った。

しよせん子供の戦いとはいえ、凄い。凄すぎる。少林寺拳法とはこ

ういうものかと思せ付けられていた。熱斗とペナルティがそこにいた。

「なかなかおぬしもやるの」

山地がこう言った。二人とも息が切れそうになっている。

「もうそろそろやめよう」

山地もさすがに疲れたらしい。

「そういえば、なぜここに」

マオが聞く。

山地がこう話す。

「俺は、ある男から“君の力は凄い。この私でも感心するよ。ぜひ私の所へ来てくれ”といわれた。

俺は、その男の所へ行っただ。そして、お茶を飲んだらここへ。」
ペナルティたちも聞いていた。

「その男の目的は一体なんだろう。」

ペナルティはそんなことを思っていた。

そのころ、時空に少しずつ危機が迫っていた。

第37話 未来へ

マオの生家。

そして、四川省でも有名な菊下楼に行つてある料理書を手にしたマオたちは、広州へ戻るか考えていた。

「ここからでも帰れるぞ。どうする。」

熱斗がマオに行った。熱斗はよっぽど歩くのがいやらしい。

その時、あのジャーという音が熱斗のPETから聞こえた。その音の中からかすかに祐一郎の声が聞こえる。

「パパ」

熱斗が叫ぶがなかなか聞き取りづらい。かすかに祐一郎が言った。

「今。こっちの世界が大変なことになっている。帰ってきてくれ。」

熱斗は焦った。

「よし行こう。また、広州に行けばいい。」

その時、後ろから李さんが馬に乗ってやってきた。

「未来で大変なことになっているみたいだ。急いで行ってあげなさい。広州にいる皆には伝えてある。」

これで安心だ。

「未来へ出発だ。」

科学省に戻つて来た五人は、話を聞いて唖然とした。

「実は、まだウイルスが回収しきれていないみたいなんだ。2003年のほかでもウイルスによる被害が確認された。このまま行けば、時代の変化が変わつてしまつて大変なことになる。すでに、炎山君や桜井さんなどに応援を頼んでいるのだが。まだまだ出てきそうなんだ。そこで君たちに協力をして欲しいんだ。」

祐一郎は、話し終わるとあるものを出してきた。

「これは、科学省が開発した。時空シンクロチップだ。これを使えば、時空でクロスフュージョンができる。これをもっていきなさい。」

熱斗たちに渡すとウイルスが発生したという情報が飛び込んできた。

「くれぐれも気をつけるんだぞ。時空は危険がたくさんある。」

祐一郎が熱斗たちにいう。実際、時空の中は危険だ。

「ここに時空へプラグインできる。」

もうすでに炎山やメイルたちがいた。

「結局、四人とも帰ってきたのか。」

炎山が言った。

「ウイルスのほうは」

熱斗が聞く。

「見れば分かるすごい範囲に蔓延している。まるで、ナビのヒットポイントを落とそうとしているみたいだ。」

その頃、ある倉庫外の一角。

「第二作戦は順調に進んでいる。そして、最後には、一揆に私たちがネットセーバーを倒していく。あんな第一作戦は、朝飯前みたいなものだ。しかし、Mr. 田中の演技力もすごい。」

そこには、田中がいた。

第38話 アジト崩壊

二日たった頃、ネット警察では、ウイルスを除去していきながらアジト説明をしてきた。

「倉庫街の一ツ角でやっているだど。」

それは、ネット警察に掛かってきた電話による情報提供だった。

そして、熱斗と炎山たちを呼んで来た。

「アジトが分かった。至急向かってくれ。」

倉庫街に來た熱斗たちは、一際出入りの少ない倉庫に目をつけた。

その倉庫以外では、荷物の搬送が活発に行われているのにその倉庫だけは、荷物の搬送を行っていないかった。

張り込んでいる一人の男が出てきた。

「よし。倉庫へ向かってみよう。」

倉庫へ入った途端。倉庫全体にディメンショナルエリアが張られた。

「誰かいるのか。」

その時、後ろからナビが飛び込んできた。

「よくまあ。ここまで来たものだね。第1作戦でつぶれると思っていたネット警察もここまで来るとは。ほめてやろう。しかし、ここが墓場だ。」

熱斗たちは一斉にシンクロチップを入れた。

そして戦いが始まった。しかし、炎山の様子がおかしい。

「どうだ。もうそのナビには力さえ残っていない。」

そのナビは、どんどんと襲ってくる。

「俺たちは力が残っているぜ」

熱斗が言った。

「お前らは過去に行ったのではなかったのか。」

ナビは、どうやら誤算をしてしまったようだ。

「一揆に行くぞ。ロックマン。」

熱斗たちが追い込みをしようとする。しかし、敵は一体しかない。

「くそ。もうここまで来たら最後まで行くしかない。」

ナビは最後まで戦ったが、結局、熱斗とロックマンに倒されてしまった。

その後、ネット警察によって、アジトの中の機器を押収した。その中には、熱斗たちを閉じ込めたと思われる場所がネットワーク上で見つかったりした。また、時空のウイルスたちも次第に消えていった。

「これで、もう、時空は安全だ。ありがとう。」

祐一郎はマオや炎山たちにお礼を言った。

「あと・・・。」

マオが祐一郎に言おうとしたら祐一郎が先に言った。

「ずっとこの世界で暮らすということだろ。分かっている。どうぞ好きにしてよ。またあの中華料理が食べられるのか・・・。」

これからは、熱斗の家で生活することになった。

第39話 カレーなる中華？

「最近、熱斗がカレー食いに来なくなったな」

ディンゴが熱斗の同級生でカレー職人のデカオに言った。デカオは、熱斗に焼きもちをやいているのである。

「本当。最近、あいつの家に料理人が来たらしい。」

デカオが皿を洗いながら怒ったような口調で言った。

「今日、料理勝負をしようぜ。」

ディンゴが行ったことにデカオが賛成した。

早速、デカオはメールを熱斗に送った。

熱斗のナビのロックマンが熱斗にデカオからのメールを読んでいた。

「何。マオたちをマハ一番まで連れて来いだよ。」

熱斗の声にマオが反応する。

「マオ。大丈夫かい。」

熱斗が聞く。

「おう。いいよ」

マオはOKを出した。

熱斗は、喜んでいた。何でも一日でカレーと中華を食べられるのだから。

マハ一番にマオたちが来た。

「料理の種類は問わない。審査員はあの方達です。」

デカオが言うところには、熱斗やメール。熱斗の友達のヤイトちゃん。熱斗の担任の先生。炎山がいた。

「なんで炎山がいるの」

やいとちゃんは炎山がとても嫌いだ。

そして、勝負が始まった。

デカオたちは、マハ一番のカレーで勝負するみたいだ。

マオたちは、麻婆豆腐を作るみたいだ。

デカオはマオが麻婆豆腐を作る事を知ってこう言った。

「麻婆豆腐なんか、麻婆豆腐の素を入れればできる。手抜きか」
しかし、マオたちはそれに応じない。

「さあ。マハ一番特製。ジャワカレーだ。」

デカオたちは出来たみたいだ。

「う。うめーえ」

熱斗はカレーをおかわりしようとするが、めいるに止められた。

「お待たせしました。劉昂星特製。麻婆豆腐完成。」

デカオが出してから三十分後。皆の腹も少し納まったみたいだ。

今度は、皆、静まり返った。

そして、少したった後、みんなが同時に

「うまい。」

と言った。

デカオは馬鹿など、少し皿に手を出す。デカオもまたうまいと言った。

「お前すごいよ。俺の負けだ。またこいよ。」

とデカオはその後、言った。

久しぶりに集まったみんなでマオたちを歓迎してくれた。

第40話 スリ強盗…

今宵、外は大変危険である。もしかしたらほんの数万円を持っているために殺されるかもしれないという恐怖と隣りあわせて生きているといえよう。

未来ではどうなのだろうか。

時空も戻って、久しぶりの休暇？となった。

夏休みも最後ということで熱斗は、宿題におわれているかと思ったら、悠々自適。なぜかというところ、まだまだ満喫したいらしい。

さて、気分転換に町に出た。町に出た熱斗が歩いていると、肩が他の人にぶつかった。

「すみません」

その人はそう言うのとさっさと行ってしまった。

熱斗がその後、ナビのロックマンと話そうとした時、PETが盗まれていることに気づいた。

「くそ、さっきの奴が。」

今回が二回目。しかし、ネットセーバーに重要情報が入っている。もう遅かった。さっきの男はもうどこかへ行ってしまった。

科学省へ行った熱斗は、祐一郎に相談した。

「そんなことがあるうと実は、前に位置を調べる機能がついていたんだよ。」

そういうと祐一郎は、パソコンで調べた。

「今ここにある。急いで取り返しに行ってください。」

熱斗は急いでその場所へ向かった。そして、先に歩いている人がいた。

「すみません」

熱斗が声をかけるとその男は走り出した。

「待て」

前に出てふさがったが、その男は、まだ逃げようとする。

「PETを返せ。」

その男はやっと口を開いた。そしてこう言った。

「君は、本当にネットセーバーなのかい。これは、依頼主に渡す。もしも返して欲しいなら、ネットバトルで勝負だ。」

結局、ネットバトルをした。熱斗は勝った。

「お前はどんな奴なんだ。」

その男は過ぎ去って行った。しかし、誰が、ロックマンを盗ませたのか。

続く・・・

第41話 新たなる脅威

熱斗のPETも無事に戻り、何も脅威がなくなった平和な二学期を迎えられた。

そんなある日、マオのPETにあるメールが送られてきた。メールを開けても何も出てこない。

次の日、PETを見たときに不思議なマークが上に表示されていた。熱斗の父。祐一郎が調べても特には問題が無いことしか分からなかった。

「一体このマークはなんだろうか。」

マオが考えているとある研究員がこう言った。

「そ。そのマークは。」

研究員は驚きを隠せなかった。

「一体何のマークなのか」

祐一郎がその研究員に問い詰めた。研究員はしょうがなく答えた。

「そのマークは、大学時代。読んだ本に載っていたマークなんだ。

そのマークの持ち主は、インターネット上にいるある人しか選ばないんだ。そのマークには不思議な力がある。だからこそこのマークは大切にしなければならぬ。」

マオは、その不思議な力を聞いた。しかし、なかなか答えない。

マオは、このマークには何かあることを感じた。

その次の日からまわりで異変がおき始めた。誰かが後をつけてきた。後ろを振り返るとどこかへ消えた。

熱斗たちは、研究員が見たと言うその資料を見に秋原町にある図書館に行った。その本は、ひとしれず、棚の奥にあった。

「この本だ。」

マオが本を手にとった。本の題名には「ドンと来い。超常現象 part 3

」とかかかっていた。そこにはいろいろな超

常現象を解き明かす内容だが、一つだけそのなぞを

解けなかったということが書かれていた。それは、ペナルティがいた時代

。そう。それは2003年の話であった。ある小学生がインターネットを使っていた。そしたらある日、高熱

が出て病院に搬送されたそう。その病院で不思議なことが起きた。誰もいない部屋のテレビがついていたり、電気が急についたりした。その原因を調べに行った著作者と助手は、その夜、少年が電気をつけていることを突き止める。しかし、その子は足が悪くなっていた。さらに電気のスイッチも病院のある一箇所にまとめられていたと言うことだ。このトリックが解けなかったと言うのだ。しかも、そこに少年の右手の写真が載っていたのだが、そこにはマオのPETに表示されているマークと同じものだった。その話の最後にはこう書かれていた。悪魔のマークだと。

第42話 マークの正体

そのマークを狙っていた人物がいたそうだ。その人は、その子の右手を持っていた。

犯人が捕まりそうになったとき、その子の右手に叫んだ。

「逃がして」

その言葉どおり犯人は姿を消した。

それから周りで奇妙なことがおきた。警察署で漏電がおきたりした。その本を読んでいると後ろから男が近づいてきた。ちょうど漏電のところまで読んでいるときに後ろから殴られた。そして、マオたちは気を失った。

気がつくとみんな縛り付けられていた。男が近づいて来た。その男がこう話してきた。

「君たちは、マークの秘密を知ってしまったようだな。それを知ってしまったには、君たちをここから外に出すわけには行かない。」
熱斗がネットセーバーだと言うとその男はこう言った。

「お前らはいずれ元の3つの集団に戻る。そう。いずれ分裂の時が来る。そのときは、マオが力を発揮した時だ。本来、中華料理は、4000年以上の歴史がある。しかし、パソコンは所詮、ここ何十年かで作られたものだ。マオのような向こうで力を発揮し、まんまと裏料理界をつぶすといういわば神業に近い。しかもこの年齢でだ。そのくらべ、お前は何かあると人を頼っている。自立さえ出来ないお前はいつか、裏切りと言う言葉の元でマオたちと対立するのだ。」

男はあざけ笑った。

「さて、用があるのはその甘えん坊坊やではなく、史上最年少で当時では料理試験の権威に匹敵する特級厨师試験に合格し、その後、味修行で次々と悪料理人を倒し、さらには、特級麵点師であるシェール。裏料理から脱走したレオンとともに裏料理界をまんまとたおし

たという劉昂星^{りゅうおうしん}に用がある。」

マオは驚いた。なぜそんなことを詳しく知っているのだろうか。

「君は今、なぜ詳しく知っているか聞きたがっている。じゃあ教えてやろう。俺が、一体どこから来たのかを。そうだ。あの本に載っていた泥棒さ。しかし、あの本には載っていないことがある。それは、このマークは散らばっていることだ。そして、君が持っているのさえもらえれば俺の逆襲が始まる。そして、その鍵を握っているのもお前だ。お前には、舌で材料を判断できるほかに、もうひとつの力が備わっている。その力さえもらえれば…。」

第43話 マオのもうひとつの力

「その力はもうすでに伝説の厨具を受け継ぐほど正義の力だ。その力を最大限に発揮できればいいんだ。しかし、君の命と引き換えだがね。」

メイリィが反論した。マオと旅をしてきた期間は長い。苦しみを共に越えてきた。男はマオに近づいた。男はこのように言った。

「もしも君がその紋章と体を私にくれるのならあいつらを放してやろう。しかし、君が拒否すれば、ここからはもう出られない。あの世へ皆で仲良く行ってもらおう。」

マオは悩んだ。今までで一番悩んだ。

メイリィたちはこう言った。

「マオ。お願いだから、命を売らないで。」

しかし、マオは決断した。

「いいだろう。そのかわり、みんなを家に戻してくれ。」

メイリィやシロウ、それに熱斗、ペナルティがマオに命を売らないよう言うがマオはこう言った。

「長い間ありがとう。みんなの気持ちは分かる。だけれども、僕はみんなのことがとても大好きなんだ。みんなの命のほうが僕より大切なんだ。最後に、メイリィにいたいことがある。長い間、言えなかったけれど、僕はメイリィのことが好きだ。」

マオはそういうと男に言った。

「やるなら今にしてください。今のうちに。」

男が機械にマオを入れた。そして、スイッチを押した。

「マオ」

メイリィの叫び声が響き渡った。

その夜、光家では、泣き声が途切れることなく続いた。

そのころ男は喜んでいた。これで仕返しができる。今までの恨みをついに返す時が来た。

泣いていたのは熱斗たちだけではなかった。熱斗たちは、男と戦うことを決めた。

第44話 トリルの力

次の朝、科学省にネットサーバーとして行った熱斗は元気が無かった。

名人も声がかけれないほどだった。

そのころ、政府にあるメールが送られてきた。そこにはこう書かれていた。

「ついに逆襲する時が来た。この力さえあれば、何でも出来る。せいぜいネットサーバーを用意するがいい。」

このメールを受け取った直後、電算シティに謎のナビが出現した。そうそれは、その男とあのマーク、マオのナビがクロスフュージョンしたものだった。

炎山やメール、それにライカがクロスフュージョンして応戦したがなかなか手ごわい。

「熱斗はどうした。」

炎山はメールに聞くが、メールも知らなかった。

「熱斗。どうやら町にあの男がクロスフュージョンして出現したらしい。応援に行ってくれ。」

祐一郎が言うが熱斗の心の中の整理が出来ていないらしい。

その時、マオの声がした。マオはこう言った。

「人を困らせている奴は許せない。どうか戦ってくれ。」

その声を聞いた熱斗は立ち上がった。

熱斗が現場に行った。しかし、ディメンショナルエリアが張られていた。

熱斗が走って入ろうとした時、空が曇った。

そして、熱斗がロックマンとクロスフュージョンしたとき、雷が熱斗たちに落ちた。

「熱斗。」

メールが呼びかけた。そのとき、光と共に熱斗が現れた。しかし、

様子がおかしい。

なんと、獣化していたのである。

獣化した熱斗とロックマンは強かった。そして、倒してしまった。しかし、獣化した熱斗とロックマンはそれだけでは終わらなかった。ロックマンたちは、叫んだ。それと共に、光が地球を取り囲んだ。それと同時にペナルティたちにPETが光った。

「何だ。この光は、」

科学省で名人が祐一郎に言った。

その後、熱斗は科学省に運ばれた。

二日後に気がついた。

「熱斗」

その声はメールの声だった。

そこには、マオがいた。

「俺は一体何をやったんだ。」

そう。熱斗は一体何が起きたのか分からなかった。

「熱斗のおかげでこの世界に戻ってこられた。ありがとう。」

マオが言った。

祐一郎が言った。

「トリルを熱斗が呼び寄せたんだ。そう。あの雷は、高速移動したトリルだ。どうやら地球が光に包まれた時にいなくなってしまったみたいだが、炎山がトリルを光の中で見たと言っていた。」
ロックマンは、懐かしがった。

第45話 正義の力

熱斗たちの活躍によって命をまたよみがえらせてもらったマオ。マオと熱斗は家に戻って来た。

「マオ」

メイリィが抱きついてきた。シロウが横から口を挟んだ。

「よくまあ、あんな所で大声を出して言えるよな。」

マオはタコになったように顔を真っ赤にした。

「本当に人間ってピンチになると本音を言えるようになるんだね。」
ペナルティも口を突っ込む。

マオは、ペナルティまでと呆れ顔になってしまった。

しかし、笑えるのも熱斗そして、ロックマン。トリルのおかげだ。

熱斗はトリルがロックマンに言った最後の言葉を覚えている。

「ロックマンみたいに弱い人を助ける。」

この言葉が熱斗とロックマンの心の中で連呼していた。

「さあ。パーティを始めるわよ」

熱斗のお母さんが言った。

ペナルティたちはこれからも大きな壁にぶつかるだろう。しかし、どんな壁でもこの五人がいれば越えていけるだろう。同時に、マオたちもはれてネットセーバーになれた。

科学省では大変なことになっていた。トリルの力がなければ、あの合体には応戦できない。しかも、今は、マオ一人で持っている。マオが狙われる可能性が高い。

次の日、祐一郎は科学省にマオを呼び出した。

「その力を君が持つのは危険だ。もしも、君一人だけで持てば命を常に狙われることになる。」

祐一郎はそのマークに隠された力を探すため、PETの中を調べた。「このプログラムはすごい、純粋な人しか使えないようになってる。」

祐一郎は、そういった。

熱斗たちが呼び出された。

「あのマークを三つに分割した。一つはマオが、もう二つを熱斗とペナルティに預けたい。しかし、このプログラムには純粋な心をもった人しか選ばないようになっていいる。それで、万が一入らない場合があるかもしれないとおもい、君たちを呼び出したんだ。」

第46話 マーク分裂の時

そして、熱斗とペナルティのPETにいよいよプログラムをいれた。

熱斗のPETにいった。

それと同時に光が熱斗の周りを包んだ。

「熱斗。」

祐一郎が叫んだが名のも応答は無かった。

そのころ、熱斗は御花畑にいた。(注。秩父鉄道の御花畑ではない。)

そこである少女に出会った。

「アイリス」

それは、あの時みたナビとそっくりだった。そのナビはこう言った。
「あなたは本当に純粹です。あなたは、誰かと一緒に他の世界へ行きましたね。」

熱斗はこう言った。

「君にあの世界で旅をしたではないか。」

しかし、アイリスは答えなかった。そして、気がつくと部屋のベッドで寝ていた。

「俺は一体。」

熱斗がとぼけていると祐一郎が言った。

「熱斗。大丈夫か。いきなり光に包まれてその光からとかれた時、息が無かった。しかも、その後のペナルティの時は何も起きなかった。びっくりしたよ」

熱斗はこう言った。

「アイリスに会った。」

メイルがそれを聞いて、元気だったかを聞く。

「ああ。僕の過去を見たようだ。」

その時、まだ誰も気づいていなかった。PETの中にマオからもら

ったマークのほかにトリルのマークがでていることを。

「しかし、よかった。今日は寝ていなさい。」

祐一郎の進言で熱斗はその日は寝ていた。

同時に、まだまだマークのことに気づかずに。

ペナルティのPETにプログラムを挿入する時は確かに何も無かった。すぐに入ってしまったのである。しかし、なぜ。

祐一郎は考えていた。それは、またトリルの仕業によるものだった。しかし、トリルはもうもうひとつの世界のネットワークから姿を消していた。同時に、アイリスも。

そのことをまだ知らなかった熱斗たちは後になるまで気づかなかった。

第47話 なぞなぞ王 健太郎!

「OK。今日も元気がいいフォー」

熱斗の家の前に突如現れた気味の悪い人に熱斗の母は、熱斗を呼んだ。

「何ですか。」

熱斗がその男に聞いた。

「いや。ここにマオと言う少年がいて、そいつとなぞなぞで対決したい。いや、これは、あくまで誰かに頼まれたものだ。」

そう言うと言の中へ入っていった。

「マオくんはどこかな?」

そしてマオが出てきた。

「君がマオとかいうデカイ持ち主か。」

マオは、はあという顔をした。

「いや、十四歳と聞いたものだからつい。それがほしいなど。」「いっそう分からなくなってしまった。」

「さて早速勝負だ。私が問題を出す。それに答えられなければ俺に一点。そして、もしも答えられれば君たちに一点あげるよ。ただし、君とさっき応対してくれた君。が解答してもらう。それでは第一問。パンはパンでも食べられないパンは。」

熱斗がフライパンと答えた。

「しかし、そのほかにも答えがある。JAPANだ。ということで僕に一点。」

熱斗はずるいと反論したが次の問題へ行ってしまった。

「第二問目。これは簡単だぞ。マオなら分かるはず。腹をなめると立ち、その大きなものが下の口に入ることをそれぞれ何という。」
熱斗には分からなかった。しかし、マオには言えなかった。

「さあ。どうした。言ってしまった。」

しかし、マオには言えなかった。

「じゃあ俺に一点。」

そして、健太郎が出す問題に苦戦した。なぜ苦戦したか。その問題が、下ネタというものであったからだ。

「さて、かわいそうだから、すごく簡単なものを出してやろう。光の碁で出てくる主人公の名前は、」

熱斗は答えた。

「進藤 光」

「じゃあ。2000年ごろに大ヒットした。女性歌手を一人答えろ。」

熱斗は答えた。

「宇多田 光」

男が熱斗の名前を聞いた。熱斗は答えた。

「光 熱斗」

その名前を聞いた瞬間、男は、凍りついた。そして、変な歌を歌いだした。

「ひかる うみ。ひかる 大空。ひかる 大地……」

そして、男は消え去った。

熱斗はマオに聞いた。

「何で二問目が答えられなかったの。」

マオは熱斗に答えを教えた。しかし、その声がメイリイに聞こえたらしく、メイリイはこう怒った。

「マオのエッチ」

しかし、あの男は一体何をしに来たのであろうか……。

第48話 新たに狙う3人・・・

ある場所……。そこへ帰ってきた健太郎は、父親であり、ボスでもある。真人に怒られていた。

「お前は、調子に乗るとすぐに光関係の問題を出す。しかもその問題を三つ出すと強制送還されるといっただろ。」

健太郎は黙った。

「まあいい。」

真人は言った。健太郎はこう言っていた。

「マジ、マジですか。」

そういうとどうしても真人が言いたくなることがあった。

「マジ、マジ言っているなら古典の活用法のひとつでも覚えろ」

真人は古典がとても得意なのだ。

「さて次は誰に行かせるか。この間の男は後もう少しであの方の任務を遂行できていたというのに。」

そんなことを行っているところに一人の女が現れた。

「次は私にやらせてください。」

その女を見て驚いた。

「これは。小岩部長ではないですか。」

そう。そこにいたのは小岩だった。小岩は、ある裏の組織の部長だった。

「あなたたちにはこの案件は無理です。力が無さ過ぎます。あんな負け方、誰が許すと思っているのですか。ここは、直属の第九部隊にお任せしてください。」

そのころ、また別の場所。

「俺は、時空征服は失敗したが、今度は、絶対に成功して欲しい。これさえあれば時空征服なんて朝飯前になる。あなたたちと組めて本当によかった。」

Mr. 田中がある男に言った。

「いやいや。悪の組織の中でNO. 1ですから。小が大に助けて当然ですよ。」

その男はワインを片手に持ちながら微笑んだ。

「しかし、それにどんなに価値があるのですか。それに応じて、私たちも協力したい。」

ワインを持った男が近寄ってきた。

「もう私には全財産を使ってもいいほどの価値です。」

Mr. 田中は、その男にそう告げた。

第49話 最強の敵

「しかし、あんな敵ばかりじゃあどうしようもないな。マオ」シロウがいつもの調子で言った。しかし、これは、今まで何とか精一杯で対応してきたこれだ。まるで、組み合わせられた話のようだ。そして、どんどん強くなる。そうまるで、なにかの戦隊の話のように。これ以上の戦いを仕掛けられたら無理だ。

「どうすればいいんだ。」

いきなりの発言にメイリィや熱斗がびっくりした。

「何をどうすればいいんだ。」

熱斗が聞いた。

「今までは運が味方についてくれた感じだが、このまま行けばいつか敗れる。そのときには、もっと大変なことが起きる。そう。三人がこの世から消えるということ。そして、この世界が。時空が支配されると言うことが。」

熱斗は考えた。今までの戦いは、何とかやってこられたという感じだ。しかし、これ以上強い敵が来ればひとたまりもない。

マオの言ったことは確かにあっている。しかし、俺とロックマンの組み合わせで入れば何でも超えられる。絶対そうだ。

その時、熱斗の家に一通の手紙が届いた。

「熱斗。手紙が来ているよ。」

熱斗が手紙を部屋に持ってきた。

「この手紙は」

手紙を開けた瞬間、周りが静まり返った。それは挑戦状だった。それにはこう書かれた。

『愉快的仲間たちへ 今日私の主催するパーティへお越しください。しかし、死ぬ覚悟でお越しください。きっと今日の夜、楽しいことが起きます。明日にはもう結果が出ているでしょう。場所 白水館』

「この文章は、今まで挑戦状とはレベルが違う。逃げるわけには行かないが、しかし、帰ってくる保障など出来ない。」

マオが言った。

今度の敵が今までの敵の中で最強になるだろう。予想は出来た。

「命にかけても戦わなければならない。最初からびくびくしてはだめだ。これは、この世界平和のため。ひいては地球四十六億年の歴史を変える力がこのマークに備わっているわけだ。」

ペナルティの発言によってみんなの心は一つの目標に定まった。

「よし行くぞ」

第50話 白水館の戦い

「こんな所に建物なんかあった？ロックマン。」

電算シテイの中にあるにもかかわらずそれは森の中にひそかに立っていた。

「お化けでも出そうだな」

シロウがいやみを言った。

「僕、お化けが苦手なんだ」

ロックマンが言った。しかし、ここまで来たからにはもう後がない。決めたのだ。命に代ええも戦うと。

「お待ちしておりました。」

いきなりドアを開けたので一瞬ビククリした。

「どうぞこちらへ」

大きな洋館の中は薄暗かった。

「お化けが本当に出そうだ」

さらにロックマンが怖がった。

「お前は、PETの中にいるんだから。しかし、寒くないか」

熱斗がロックマンに言った。

「こちらです」

部屋に着いた。そこには一人の女が大きなテーブルに座っていた。

「これは。ようこそお越しくださいました。まずパーティと言えば、お料理ですよ。ご用意してあります。それも中華料理です。」

女が座っているテーブルにはちゃんと料理が置かれていた。

「それではいただきます。」

熱斗が食べようとしている。

「ちよっと待った。この料理何かおかしい。」

マオはとっさに嫌なことがうかんだ。

「まず俺から食べる。」

マオが食べた。

「これは。」

マオには分かったようだ。

「お前これは何だ。」

女が答えた。

「やっぱりだめだったか。チャーハンに睡眠薬を盛っていたのがバレたか。お前みたいな奴が食べると思ったがやはりチームワークとか言うものがあつたようだな。」

女は話を切り替えた。

「じゃあ。料理を作ってくれませんか。どうせこのご飯は食べられない。もし、その料理が私を気絶するくらいおいしかったら次へ行きましょう。しかし、もし、私をなめたような味だったら、これを飲んでもらうわ。」

そこには、睡眠薬と書かれたビンが置かれていた。

マオはこう言った。

「うけて立つ」

女は微笑んだ。まるで何かをたくらんでいるかのように…。

第51話 マオの驚くべき能力

マオは作り始めた。

「いったいどんな料理を作るのだろうか」

シロウが言った。

「気絶っていう言葉にも引っかかる。気絶させなくとも驚かせばいいということなのだろうか・・・」

そのとき、マオは困っていた。

「野菜が使い物にならないくらい傷んでいる。」

そう。女が薄気味悪い笑いを浮かべていた理由だったのだ。

マオが悩んでしまった。なんていっても傷んだ野菜をどうやって調理するか。ひどいものでは虫食いに遭ったものまであった。

その様子はシロウたちにも明らかになってきた。

「さあ。どうしました。清史上最大の功績を残したといわれるくらいの大物がなぜ悩んでいるのですか。それとも、ただの子供のままごとしかできない子供だったかしら。」

マオは思いついた。そしてやっと料理が始まったその時女が言った。「もうそろそろ食べたいわ。そうね。あと三十分くらいで作れないのなら、中華を注文するわ。」

あと三十分。しかし、マオは小麦を練り始めた。

「もうあと少ししかないというのに。こんな時になにをやっているんだ。マオは。」

メイリイとシロウが言った。

確かに時間はこくこくと過ぎていった。

「あと五分。」

マオは、春巻きを蒸籠で蒸していた。

「間に合うのだろうか」

ペナルティや熱斗も不安になった。

女がカウントダウンをし始めたそして、

「終了。どうかしら出来た。それとも、この睡眠薬を飲む運命になったただのバカな子供だったかしら。」

マオは女の前に出してきた。

「ふん。出来たのね。あんな短い時間に。しかも、あんな材料で。」
女は、どうせくだらないものだろうと思いついて開けてみた。

「ただの春巻きじゃない。それも、一本。こんなので私をごまかす気。私さっき言ったわよね。私をなめるような料理を出したら、睡眠薬を飲まずと。」

女の反抗にマオはこう言った。

「いいから。一口食べてみてください。」

女は一口食べた。

「これは、一体なんであんな野菜たちからこんなおいしいものが・・」

女は言葉を失った。

「まあいいわ。それを飲まなくてもよろしい。」

熱斗やペナルティたちは胸をなでおろした。

「じゃあ、お食事も終わったから、今度は、ネットバトルと行きたいが、やはり、この屋敷を案内しなければならないわね。」

女はあることを考えていた。

第52話 大中華鍋から脱出せよ!!

女は、部屋から、熱斗たちを連れ出した。

「なんでこんなことになるんだ。」

熱斗は、嘆いていた。しかし、まだ誰もこれが作戦だとは思っていなかった。

「この洋館はずいぶん古いものでしてもう百年ほどこの土地に立っているのです。昔は華麗なパーティが行われたりしていましたが、ホテルが廃業になりまして、そして、今日にいったっているわけです。」

女の説明中、後ろを歩いていたメイリイとシロウは穴に落ちてしまっていた。しかし、誰も気づかずに部屋案内をした。

「この部屋が、支配人の部屋です。」

女がドアを開け、先にマオたちが入った。

しかし、女は入ってこなかった。そして、ドアを見るとノブがなかった。

「ひっかかったわね。」

女が言った。それと同時に床が開いた。

「この下には大きな中華なべがあるの。あなたたちはそこで酔人間となって死ぬのよ。」

女は残酷そうな目をしていた。

「あっちい。ロックマン、この中華なべの火を消してきて。」

暑そうにしながらロックマンをプラグインした。

「そんなことしても無駄よ。」

そこには、ポストマンがいた。

「なぜここにポストマンが。」

ロックマンは驚いた。ポストマンが戦ってきた。しかし、前よりもポストマンが強くなっている。

ポストマンにやられているロックマンは熱斗が入れるチップを待つ

ていた。熱斗が少しだけしかPETにいられてなかった。しかし、それどころではなかった。床は火のように暑い。そこへ醤油と酢が大量に入れられた。そして身動きが出来なくなった。

「このお酢には、石灰と片栗粉が混ざった特殊なお酢なの。もうこれが固まればあなたたちはもうお花畑行きよ。」

さっきのお酢のおかげでチップの転送が出来なくなった。

「こんなずるいやり方に負けてたまるか。」

熱斗は手に持っていたPETを使って名人にディメンショナルエリアを要請した。

「どうせクロスフュージョンしても無駄よ。チップがないのだから。」

女は冷えた目で見た。

その時、マオは急に体を動かした。

「そうか。混ぜれば、やわらかくなるということが。」

ペナルティが気付いた。

「くそ。」

女は言った。しかし、もっと凄いことがあった。

「熱斗、これを使え。」

それは、シンクロチップだった。熱斗も体を動かしたおかげで動けるようになった。

そして、熱斗は先に実体化していたポストマンと戦った。

そして、ポストマンは消えた。

「早く、脱出を」

そして、脱出した。メイリイやシロウも牢屋から脱出できた。

「お前らがたとえ卑怯な手を使えども、このマークは決してお前らに渡すことはない。」

熱斗が言った。しかし、もう女は消えていた。

第53話 料理コンテストデビュー!!

白水館の戦いの後、ぱたりと止まった。そして、熱斗の母から、マオにある誘いがあった。

「ねえ。秋原町主催で料理コンテストがあるんだけど。よかったら出てみない。もちろん。メイリイちゃんやシロウ君とも一緒に。」
マオは出てみることにした。

「さあ。やってきました。第1回、秋原町料理コンテスト。どんな選手が出てくるのでしょうか。」

司会の女の人を見る。

「ここでは、料理人ではなく、一少年として戦える。中国では、特級厨师と言われ、一回わなにひっかった。」

マオははりきっていた。やはりマオにはこちらのほうがよいのであろうか。

「お題は特になし、調理時間も制限なしで、ここにある食べ物を使ってください。」

司会の人は後ろを指した。

「じゃあ。早速始めてください。」

そして始まった。

「しかし、特級厨师としてではなく一般でうけたのはひさしぶりだね」

メイリイが言った。

「最近は夕食の手伝いぐらいしかやっていなくて、飽きてきた所だったぜ。」

シロウが言った。

「でも、お前は、陽泉酒家にいたときだって、皿洗いぐらいしかやらないじゃないか」

マオがシロウにつっこんだ。

「で、何の料理を作るの。」

シロウが聞いた。

「ん。あ。あれを作ろう。」

シロウは不思議そうな顔をしていた。

そして、一時間がたった頃。

「できました。」

司会の人がかけていく。

「それでは、判定してもらいましょう。パンタジアからお越しの。
・。続きまして、日本能無し研究会？会長 またあける 又 明さん。日本児
童ポルノ愛好会会長。小野姉子さん。おのあねに判断してもらいましょう」
シロウはまたも首をかしげる。

「マオ。いったい。どういうことだ。まず、日本能無し研究会って、
怪しい名前だな。さらには、日本児童ポルノ愛好会って一体、何や
っているんだ。」

そして試食が始まった。

「これは、麺ですが少し変わっていますね。なにか芯みたいなのが。
」

又が言った途端、三人は驚いたような顔をした。

「一体。これにどんな仕掛けをしたんですか。」

又が近寄ってくる。

「この麺には、鯰が練りこんであります。それからいいだしが出る
んです。」

又たちは納得した。

「あなたを大会の優勝者にしたい。それで、今度、東京のある場所
で都の大会がある。そのための予選だったのだ。」

又は、マオに次の大会の場所を教えた。そして、それに出場するこ
とになってしまった。

第54話 都大会へ：

そして、数日後、東京の高層ビル街の谷間で都の大会が行われた。
「只今より、第103回料理コンテスト都大会を行います。」
男の司会の人が出た。

「さて第一審査は、キャベツの千切りをやってもらう。それと同時にキャベツをどれだけとれるかな？を行います。是非お越しく下さい。その前にここにおかれているソースに含まれているものを当ててもらおう。そんなのは朝飯前ですよ。」

そこには、ソースが三種類置かれていた。

「さて右のソースは一体、何が含まれているでしょうか」
それをなめた時その味に驚いてしまった。

「これ、一体。誰が作ったのですか。」
マオが聞いた。

「そんなこと聞いてどうする。まあ答えよう。健太郎とか言う奴が作った。これは、面白いでソースと言う奴でNO.1なんだっらしいですよ」

それを聞いた瞬間、背筋が凍った。

「さあ。それを聞いたことは、答えられると言うことですよ」
司会者が近づいてきた。

「腐った生卵、お酢、そして・・・」

マオが詰まった理由は、健太郎の性格からこれを選んだというもの。それは、尿。

さすがにこんなものがかけられるわけがない。

「他の奴らは分からなかったのか。まったく、一体、今年の奴は。」
司会者はあきれていたがそんなことが答えられる奴などいない。

「さて、気を取り直して、次のソースには何が入っているかな。」
次のソースも変なソースだった。

「さて、さっきのソースの内容物を一部答えられた君から聞こうか」

司会者が近づいてきた。

「このソースには、普通のものが入っていない。このソースには、何かの薬が入っている。」

マオの言った言葉に司会者は焦った。

「一体、これに何が入っているのかあなたの口から言ってください。」

しかし、男は答えなかった。しかし、確実に焦っていた。後の一つのソースは片付けられ、マヨネーズしか机には残っていなかった。

第55話 キャベツの千切り合戦!!

「さてお待ちかね第一審査。キャベツの千切りを出来るだけたくさん作ってもらいます。それを、あそこで同時に開催されるどれだけ食物繊維をとれるかなに出場する皆様に思う存分食べてもらいます。」

そして、キャベツの千切りが始まった。候補は四人。マオは大量にキャベツの千切りを作り始めたので、観衆は驚いていた。

「さて、さっきもトップだったあの少年がまたトップを走っています。さあ。この勝負どうなるのでしょうか」

司会者の声などを気にもせずどんどん切っていく。そのころ熱斗は、メイルなどとキャベツの千切りを食べまくっていた。た。

「ばさばさして、少し水を飲まないとやっていけない。」

熱斗はそこにおいてあった1杯の水を飲んだ。

舞台裏では白水館の戦いで負けたあの女が微笑を浮かべていた。一体なぜなのだろうか。

「さあ。残り二人になってきました。一人は病院行きに、もう一人は、バンソコを手を巻いております。」

司会者が言った。一方、食物繊維をどれだけ取れるかな?の会場では熱斗とメイルら五人になっていた。

「なかなか今年は期待が出来そうです。さあ、この勝負どちらが勝つのでしょうか。」

観衆はマオともう一人の人に釘付けた。そして、ついに手を滑らせた。

「なんと、手を滑らせた。やはり、この少年にかなうかたはいなかった。今年の都大会優勝者は、秋原町代表、劉鼠星^{りゅうおしん}です。」
歓声が沸き起こった。

「さあ、食物繊維どれだけ取れるかな?優勝者が決まったようです。」

優勝者は、同じく秋原町から来た。小学六年生、光 熱斗くんです。

」

マオは、驚いた。熱斗が来ているとは……。

そして、表彰式が始まった。まず、マオが表彰台に上がった。続いて、熱斗が上がる。

「今年の両優勝者は14歳以下ということでもすばらしい。我々に改めて子供の凄さを見せてくださいました。どうもありがとうございます。」

司会者が抱負を言って終わった。

帰り道。

「全国大会というのはあるのか。」

熱斗がマオに聞いた。

「いや。これは東京でしかやっていないそうだ。」

マオが答えた。後ろには、メイリイやシロウ、それに、メイルがいた。友情が分断されるとはとも思っていなかったことだった。

第56話 マオへの仕返し

その頃、白水館で負けた女はMr. 田中と会っていた。

「前は失敗しましたが、今回は大丈夫です。きっとマークとあのマオの力を我々のものにして見せます。」

女はそういったのだった。

「しかし、君たちに任せて一度も成功したことがないんだ。しかも、君は1回失敗しているんだぞ。」

田中はこう言った。

それに、女はこう答えた。

「大丈夫です。私の先祖は、あいつに殺されたのです。その恨みを約二百年後の今に果たしたいと思っています。この作戦も私の先祖が書き残した書物に書かれたものです。」

一体、女の正体は。

そんなことも知らず、家の戻ってきた熱斗たちに一通の手紙が届いていた。

「一体なんだろう。」

その手紙には一枚の紙が入っていた。その紙を見た瞬間、マオと熱斗は何かに取り付かれたように部屋を出て行った。

「マオ。熱斗。一体どこに行くの。」

メイリイが言ったが何も答えなかった。

そして、あとを付いて行ったとき、玄関にあの女がいた。

「一体、何しにきたの。」

メイリイが言った。それに女は言った。

「私はお迎えに来たのよ。この二人を」

後ろからシロウが言った。

「なんだよ。そんなお前たちになんか協力するはずがないだろ。」

しかし、シロウの言ったことと相反することが起きた。なんと、マオと熱斗が敵に回ってしまった。

「ははは。思い知ったか。お前らにはどうすることも出来ない。マークは二人分、すべてそろった。こんなにかいことが私の先祖が残した巻物に書かれているとは。これで、我々は、マオを支配下に置いた。約二百年の時を越えてな。」

女の言葉に疑問を持ったペナルティは、すぐさまに聞きなおした。

「私の先祖は、もともと中国にいた。まあ。それが満州時変やら第二次世界大戦のために日本に来たんだ。お前たちにも記憶があるだろう。そう、私の先祖は、中国の塩山がある所で自殺したんだ。しかし、もうその女には子供がいた。」

そして、メイリイとシロウは一つの出来事を思い出したのだった。

第57話 女の正体…

「そう。私は、シャンのひ孫よ。」

それを聞いたメイリイとシロウは鮮明にあの時の記憶がよみがえった。

「あなたたちにはもう止められないわ。この裏の秘薬に現代医学を組み合わせたものなんだから。これを飲んだ人は、我々の支配下に置かれる。しかし、指令に従わなかった場合には、死と言うものが訪れるわ。」

女は冷たい目で言った。このままでは、熱斗とマオの力が、あの人たちに使われる。

一体、どうすればいいのか考えた。しかし、もう町は一面、闇に包まれていた。

その知らせは、科学省にいた祐一郎にも伝わった。しかし、祐一郎にもどうすることも出来なかった。

「そういえば、あの時、伝説の厨具を使ってフェイさんの中にあつた薬の成分を飛ばしたんだつたよな」

シロウはあのときのことを思い出していた。しかし、伝説の厨具はルオウ大師が持っている。たとえ、それが手に入ったとしても伝説の厨具の継承者でなければその力が発揮できない。しかも、マオの時のように行くとはとても思えない。

そして夜が明けていった。

「大変です。電算シティに熱斗とロックマンが現れました。」

祐一郎は、名人のその一言に言葉を失った。大切な我が息子が町を荒らしているのだ。

「どうしましょう。もしもこのまま行くと科学省も危ない。すぐにネットサーバーを出動させなければなりません。」

祐一郎は悩んだ。

今まで育ててきた一人の親としての立場と町を、世界を守らなければ

ばいけないという立場の双方が葛藤した。

しかし、心の中を決めた。

「出動してくれ」

祐一郎は、叫んだ。

その言葉を言った後、祐一郎は一筋の涙をこぼした。

そこには、親と科学者の二つの顔が見えた。名人は、それを眺めながら作業をした。もう出動させなければ間に合わない。そして、炎山やメールが現場へ向かった。

現場で豹変した熱斗に皆啞然とした。

「やめて、熱斗」

メールの叫びもむなしく、破壊はやめなかった

「桜井。しょうがない。もう熱斗じゃないんだ。」

炎山の声もどこか震えていた。

第58話 正義のしるしの力

戦っているメンバーにもなんとなく迷いがあった。それが元でこちらはほとんど劣勢になってゆく。

「もう、熱斗だと思うな。」

炎山の言葉にメイが答えた。

「そんなこと。出来るわけがないじゃない。」

その言葉に炎山の心が痛んだ。

その頃、女が熱斗の家に来ていた。

「あなたたちは悩みということに直面しているそうですね。しかし、まだまだ行きますよ。こんなの序の口ですよ。それとも、私たちに降伏しますか。」

女の言葉のシロウが強気で大丈夫だと言ったが、その言葉は頼りない。一体、本当の力とは、そして、その後の世界はどうなってしまうのか。

その時、昨日の話を思い出した。

「メイリィ。やはり、取りに行くしかない。伝説の厨具を。マオが好きなんじゃないのかよ。」

シロウのその言葉にメイリィは詰まった。

そう。メイリィはとてもマオのことが好きだ。このまま行けば、殺されてしまうかもしれない。メイリィとシロウは決心した。

「ぼくも行かせてくれ。」

ペナルティが言った。

ペナルティもマークの持ち主だった。メイリィとシロウは行かせることにした。

「光博士。お願いします。僕たちを過去へ行かせてください。」

ペナルティの話を聞いた祐一郎は過去へ行かせてくれることになった。しかし、危険な旅になる。

そこで李さん呼び出した。

「李さん」

ペナルティは久しぶりの再開を喜んだ。

「早く。行かないと。」

李さんに言われて旅立った。

祐一郎は、これにかけた。もしも熱斗が助かれば。そんなことを思っていた。

その頃、熱斗とロックマンは姿を消した。

「くそ。なんでこんなことに。」

炎山は悔しがっていた。

第59話 もう一人の厨具の継承者：

「お前たちか」

ルオウ大師が出てきた。

「一体どうしたんだ。マオがいないじゃないか。」

ルオウ大師はマオがいないことに気がつく。

「実はマオは、シャンのひ孫に裏の秘薬を飲まされて・・・」

ルオウ大師は驚いた。そして言った。

「待っていなさい。誰かレオンとシエルを呼んできてくれ。」

そして、下の人が呼びに行った。その間、メイリンは考えていた。

早く未来に行かなければ、世界が変わってしまう。

時は長く感じられた。

「おい。呼んで来たぞ。」

そこにはレオンとシエルがいた。事情を話した。

未来では、すでに天変地異が起こっていた。それをくいとめること

は出来ないが、原因は分かっていた。あのマークの力だ。そして、

今どこにマオがいるのかが分かった。その周りでは電波の動きが悪

い。そこにマオがいると祐一郎は考えた。

過去でも大変なことになっていた。

「さあ。早く行こう。」

李さんが言った。その時、空を黒い雲が立ち込めた。

「何か不吉な予感がする。」

ルオウ大師が言った。

そのとき、町の中心部から人々が走ってきた。

「怪物が現れた。」

町から走って来た一人がこう叫んだ。

メイリイとシロウは町の中心部へ走っていた。

そこには、クロスフュージョンした熱斗とロックマンがいた。

李さんは驚いた。ディメンショナルエリアがないのにどうして。

そんなことを考えている暇などなかった。科学省に通信しようとPETを取り出した。しかし、通信が出来なくなっていた。このままでは、帰れなくなる。李さんたちは見ているしかなかった。

そのあと、熱斗とロックマンは消えた。しかし、町は破壊にさらされていた。

「こんな時に行っているの。」

メイリィが聞いた。

「お互い様さ。」

そして、李さんたちは科学省へ旅立った。

第60話 祈り

「只今戻りました。」

李さんたちが科学省に戻ってきた。

「おお。待っていた。」

そして、祐一郎は伝説の厨具を見た。

「これがあれば、熱斗やマオたちが助かるのか。」

祐一郎は喜んだ。

「早速、マオたちのいる場所に行ってもらおう。」

そして、電波の悪い場所を探した。そして、現場へ向かった。

「君たち。もう抵抗はよしなさい。」

警察が前に行った。そして、抵抗せずに倒れこんでしまった。

「たぶん。命令に従えなかったから、毒が体を回りはじめたのだらう。」

レオンは急いで伝説の厨具を使い、スープを作った。

そして、マオと熱斗に飲ませた。

しばらく経った。マオは何かに気がついた。

「マオ。」

メイリンが叫んだ。

「一体。僕はどうしたんだ。」

そして、マオは、横で気を失って倒れている熱斗を見た。

「熱斗。」

マオは叫んだ。その時、頭をひとつの料理が浮かんだ。まるであの時のように。

伝説の厨具がいきなり光り始めた。

「これは、あの時と同じだ。」

シロウが言った。

そして、マオはスープを作った。しかし、レオンの時とはまったく違った。そして、スープを飲ませた。

しかし、よくはならなかった。少し遅かった。呼吸はしているものの意識は戻らなかった。

もう3日も経った。しかし、熱斗だけ意識が戻らない状況に祐一郎は机に向かってこぶしを投げた。

「熱斗。」

メイルも熱斗が科学省に来てから毎日のように通った。

「なぜ。マオだけが気を戻したのだろうか。」

シロウが言った。こんな時によく言えるものだ。

マオが言った。

「そう言えば、いつの間にか僕の記憶は飛んでいた。違う世界にいたんだ。そしたら、ある時、僕のお母さんが出てきたんだ。」

メイリイが聞きなます。

「うん。そう。そして、僕にこう言ったんだ。

“マオ。何をやっているの。みんなを傷つけてはダメでしょ。あなたは何のために裏料理界と戦ってきたの。” そしたらいつの間にか気づいたというわけさ。」

メイリイたちは話に熱中していた。その時、かすかに熱斗の体が動いた。

「熱斗。」

メイルがもう一回叫んだ。

そして、目を開けた。

「熱斗。心配していたんだから。もう。」

メイルは泣き叫んでいた。マオの力が効いたみたいだ。

しかし、熱斗はまだ何も分かっていない。でも、熱斗の中ではあることが起きていた。

第61話 アイリスの願い

祐一郎と熱斗の母が来た。祐一郎は泣いていた。

「俺さ。またアイリスに会った。アイリスは僕に忠告してくれたんだ。“人を傷付けないで”と。」

熱斗の話を聞いたマオはびっくりした。同じ経験をしたなんて。と。その時、科学省にMr. 田中らが来た。

「一体、何をたくらんでここに來たんだ。」

マオたちは警戒した。しかし、帰ってきた回答は、意外なものだった。

「お前らの平和とは何だ。そして、民主主義とは何だ。」

田中の質問の答えにマオと熱斗は答えた。

「正義とは、平和になることだ。しかし、いまだに平和にはなっていない。地球のどこかでは、戦争や紛争が起きている。それらが無くなった世界が平和な世界だ。」

田中はそれを聞き終わると言った。

「民主主義の回答が無かったが、まあいい。今、日本の中には政治に不満を持っている人がいる。俺たちもその一人だ。なぜだろう。答えは、同じ人が何年もやっているからだ。つまり政治家というのはイコール独裁者という訳だ。その独裁者が腐れば、周りの世界も腐る。その

状況おかれているのは、紛争や戦争をしている国だ。日本もなりかねないと思った。談合や賄賂などの話が毎日のように出ている。そんな世界に僕らが怒って結成したのがこのメンバーだ。そして、ちよいどいいニュースが入ってきた。そう。科学省の時空との融合だ。民主主義が始まった所から支配すれば、世界は、平和になっただろう。しかし、お前たちが立ちはだかった。いいか、民主主義は平和にするための制度ではないことだ。お前らががんばれさえすれば、きつといい日本になってくれる。俺たちは、もうこれでここから消

え去る。もうあえないだろう。」

そして、4階から飛び降りた。下はコンクリートだ。マオたちには抑えられなかった。また死の世界へ追いやってしまった。本来なら、これからもうたくさん的人生を過ごせただろうに。

マオと熱斗は決心した。熱斗はアイリスとトリルとで約束した。そして、マオは母と約束したことをもう一回確認した。

第62話 ウワーツ

事件がひと段落してから1週間。その頃、ネット警察にある電話が掛かってきた。

「ある日、町を歩いていたら路地から人が歩いてきた。しかし、様子がおかしい。その人を見た時、驚いた。鼻から黄色いものが垂れていたんです。」

その話を聞いた熱斗たちに名人から指令が来た。

「その原因を調べてくれ。」

しかし、熱斗は、うかない顔だった。なぜこんな事を調べなければならぬのか。ネットサーバーとは、ネット上の事を調べるためにいるのに・・・。

しかし、名人はこれがネットと関わっていると思ったのだ。

でも、熱斗には伝わらなかった。

熱斗は、マオとペナルティを連れて町に出た。

「しかし、それにしてもそんなことが現実起きるのだろうか。」

熱斗が言った。マオたちにも分からなかった。

その時だった。前の路地から人が出てきた。しかし、様子がおかしい。

「どうしました。」

マオが声をかけた。そして、驚いた。鼻から黄色いものが垂れていた。

そして、人は倒れた。

「早く救急車を。」

マオが熱斗に言った。

一体、何が起きたのかさっぱり分からなかった。

科学省に戻ってきた。

「一体、何ですか。あの鼻から垂れていたものは。」

マオの質問に名人が答えた。

「あれは脳みそだ。普通、脳みそは頭のほぼ中心部にある。それが鼻から垂れたということは圧力が頭上にかかったとしか思えない。」名人もそれ以外分からなかった。ペナルティはそれを聞いてひとつの予感が頭の中を通り抜けていった。

「もう一度、現場を調べさせてください。」

現場に行ったペナルティと熱斗たちはある物を探していた。それは、路地に開いた穴だった。しかし、見つからない。

「違うのか。」

ペナルティの予測はことごとく崩れていった。

第63話 遣中使からの贈り物

謎の事件は続々と発生した。しかも、被害者はどんどん死んでいって、何があったかを知っている人は少ない。

「くそ。なぜだ。」

熱斗が言った。その時、家にある男が尋ねて来た。

「すいません。マオ君いませんか。」

それは、あの日本児童ポルノ協会の会長の小野姉子だった。

「何ですか。」

マオが言った。それに姉子が答えた。

「私もあなたをだましたと言うことでお詫びに来たのです。」

姉子が封筒を差し出した。

「これは。」

マオが言った。

「僕は日本児童ポルノ協会の会長じゃないんだ。単に健太郎たちに仕立てられただけなんだ。」

姉子

の態度に熱斗は驚いた。姉子は続けて話し始めた。

「ぼくは、アル中の一年生だ。そこで健太郎と会った。」

マオたちはその名前を聞いてはっとした。

「そんな学校があった？」

熱斗の質問に姉子が言った。

「その学校は公表されていない謎の学校なんだ。しかし、そのことを先生に聞いても教えてくれない。」

姉子の話に少し疑問を持った。一体何がその学校で起きているのか。それが気になった。

「そして、僕はたまたまエロ小説を持って来ていてそれが見つかってしまったのです。」

熱斗が言った。

「姉子さんエロかったいい。」

そんなことを言ってしまった方がいいのだろうか・・・

「そして、無理やりやらされたのです。」

姉子は言い終わった。

「しかし、そんなことがあったとは。で、その教員の中に田中という人はいなかったですか。」

マオが聞いた。

「確か一人いましたね。教員の中で。それ以外は最初に“あ”と最後に“が”が付く人しかいないんです。」

姉子は言った。この話を聞いたときペナルティはある一つの可能性が出てきた。その学校に犯人がいるかもしれない。問題はなぜ公開していなかったかだ。まるで、行政がわざと黙認していたという感じがする。しかもその教員に田中がいたということはそれを意味していた。

「じゃあ。僕はこれで。」

姉子が帰ろうとした。

マオはその学校がどこにあるのか聞いた。

「それは、この町のどこかだ。それ以外言うなと先生に言われた。そして、姉子は消えた。」

「しかし、何だろう。」

開くとそこには雑誌があった。その雑誌はFRIDAYだった。

「マオのエッチ」

メイリーの攻撃が始まった。

「マオって。エロかったいい。そして、エロおめでたい。」

シロウに言われたがマオにとってはエロ悔しいところである。

第64話 アル中の謎：

そして、早速アル中の場所を調べ始めた。

「しかし、何でそんな中学校が。」

熱斗は思った。確かに存在自体不思議だ。しかし、なかなか見つからない。

「どこかに隠されているのでは。」

ペナルティが言った。そして、もう一回来た道に戻った。

ある場所を通ったとき、路地に看板が立っていた。そこにはこう書かれていた。

“ゝ。個。個。窪。中。。。流。亞。”

「一体何だ。この看板は。」

熱斗が言った。

「もしかして左から読むのでは。」

マオが読み始めた。

「あ・る・中・は・こ・こ・から」

見事に読めた。

「しかし、この句読点は。」

熱斗の問いにペナルティは答えた。

「この丸は読むための点だ。例えば熱斗なら“斗。熱。”となるんだ。」

熱斗は感心した。

「さあ。この路地を進むぞ。」

マオが先に行った。そして細い路地を抜けるとそこには立派なトンネルがあった。

「このトンネルは。」

熱斗が言った。

「たぶんこの先だ。」

マオが言った。そのトンネルは不思議な形をしていた。上にはシー

サーがいた。

そのトンネルを抜けるとそこは田んぼが広がっていた。

「これは一体。」

熱斗が言った。その先に昔ながらの木造校舎があった。

「あれだ。」

マオは走っていった。そこでは授業をやっていた。

「おい。みんな黒板に集中しろよ。おい。聞いているか後ろ。」

声が教室の外でまでびんびんに聞こえた。

「これでは入られないな。」

熱斗が言った。そして、授業が終わるまで待った。

「あの。ネットサーバーなんですが。」

熱斗が言った。

「何の御用ですか。」

一人、先生らしき人が来た。

そして、このごろに事件の犯人がここにいるのではないかということとを伝えた。

「分かりました。協力しましょう。」

先生はあっさりと協力してくれた。しかし、この中の誰かが分からない。もう少し様子を見なければならなかった。

先生にもなにか思惑があるようだったがまだ誰も気づいていない。その様子を聞いている一人の少年がいた。少年はその様子をじつくりと見ていた。

「手がかりがもう少し見つかったらまた改めてきます。」

熱斗はそういうしかなかった。外で聞いていた少年はある秘策を胸の中にしまった。

第65話 ついに姿を現した少年O!!

次の日。

「おはよう。」

熱斗が起きた時、テレビのニュースでこんなことが報じられていた。また、やられたらしい。

「いつまで続くんだ。こんなことが。」

熱斗が言った。その時、名人から通信が入った。

「熱斗君。それに、マオ君で急いで秋原町の学校裏の公園へ行ってくれ。」

名人の指示を聞いて、二人は学校裏へ来た。

「うわっ。やられている。」

熱斗が言った。しかし、まだ人が集まっていない。一体どういうことだ。

「ボンジュール。」

後ろから奇妙な声がした。

「誰だ。」

熱斗は言った。

「そんな怖い顔をしなくてもいいじゃないですか。私は霊能力者なんです。あなたたちとは格が違う。さっき呼び出したのもこの私です。」

黒子に扮した少年は言った。

「何のためにやったんだ。」

熱斗が少年に聞いた。

「悪い罪を起こしているんです。皆さん。それで私が天罰を与えた。そして、あなたたちが探し始めたが一向に手がかりがつかめない。そんな哀れなあなたたちのために呼び出しました。」

少年は仮面の中で笑いながら言った。周りには不気味な香りが漂っていた。

さらに少年は言った。

「あなたたちは今日から皆さんに追われることになるでしょう。わたしはあなたたちに予言しました。それでは、私は忙しいので。」
そしてその少年は消えた。

「待て。」

熱斗が言ったが後の祭りだった。

「しかし、どうするんだ。もしも、少年の予言が当たったら。」
マオが聞くが熱斗はそんなことはないと思っていた。しかし、現実と言うのは不思議なものである。

その様子を炎山が目撃してしまった。しかし、誰も気づかない。炎山は、熱斗たちの仕業だと勘違いをしてしまっていた。

Ⅱ第66話 犯人にされたマオたちⅡ

「貴船長官。大変です。今、秋原町の学校裏の公園でまた殺されました。しかも、そばに熱斗たちがいました。」

貴船は焦った。ネットセーバーから悪人を出すわけには行かない。「すぐに警察を用意する。そこで熱斗たちを捕まえていてくれ。」

貴船は、炎山にこう指示を出した。まだ、熱斗たちは気づいていない。

「熱斗。そこで何をやっているんだ。」

炎山が言った。熱斗は我に戻った。目の前には死体があった。熱斗たちは血の気が引けたような気がした。

「熱斗。何をやっているんだ。」

炎山はさらに問い詰めた。

「いや。やっていない。黒子の少年がやったんだ。」

熱斗に話を信じるはずがなかった。

まもなくネット警察が来る。熱斗たちは考えた。ここで逃げれば一生、逃げなければならない。しかし、もう迷っている暇などない。そして、ここで捕まればもう元には戻れなくなる。

「逃げるしかない。あいつが出てくるまで。」

熱斗たちはとりあえず公園を出ることにした。

「待て。熱斗。」

炎山が言ったが止まらなかった。なぜこんなことにならなければいけないのだろうか。今まで町を守るために一生懸命になっていたのに。

そして、一旦家に戻った。

熱斗の母はその様子に驚いていた。バックに荷物をすぐに詰め込めると家を出た。

ペナルティとメイリンとシロウもその様子に急いで荷物を取って家を飛び出した。

「一体どうしたのかしら。」

熱斗の母は首をかしげていた。

メイリンがマオに事情を聞いた。そして、少年が現れたこと。そして、その少年が姿を消した後、その姿を炎山に見られたこと。すべてを話した。

「これからどうするんだ。」

マオが熱斗に尋ねた。

「しょうがない。日光のほうへ行くか。」

熱斗はそう言った。そして、地下鉄のホームへ滑り込んだ。

第66話 犯人にされたマオたち

「貴船長官。大変です。今、秋原町の学校裏の公園でまた殺されました。しかも、そばに熱斗たちがいました。」

貴船は焦った。ネットセーバーから悪人を出すわけには行かない。「すぐに警察を用意する。そこで熱斗たちを捕まえていてくれ。」

貴船は、炎山にこう指示を出した。まだ、熱斗たちは気づいていない。

「熱斗。そこで何をやっているんだ。」

炎山が言った。熱斗は我に戻った。目の前には死体があった。熱斗たちは血の気が引けたような気がした。

「熱斗。何をやっているんだ。」

炎山はさらに問い詰めた。

「いや。やっていない。黒子の少年がやったんだ。」

熱斗に話を信じるはずがなかった。

まもなくネット警察が来る。熱斗たちは考えた。ここで逃げれば一生、逃げなければならない。しかし、もう迷っている暇などない。そして、ここで捕まればもう元には戻れなくなる。

「逃げるしかない。あいつが出てくるまで。」

熱斗たちはとりあえず公園を出ることにした。

「待て。熱斗。」

炎山が言ったが止まらなかった。なぜこんなことにならなければならないのだろうか。今まで町を守るために一生懸命になっていたのに。

そして、一旦家に戻った。

熱斗の母はその様子に驚いていた。バックに荷物をすぐに詰め込めると家を出た。

ペナルティとメイリンとシロウもその様子に急いで荷物を取って家を飛び出した。

「一体どうしたのかしら。」

熱斗の母は首をかしげていた。

メイリンがマオに事情を聞いた。そして、少年が現れたこと。そして、その少年が姿を消した後、その姿を炎山に見られたこと。すべてを話した。

「これからどうするんだ。」

マオが熱斗に尋ねた。

「しょうがない。日光のほうへ行くか。」

熱斗はそう言った。そして、地下鉄のホームへ滑り込んだ。

第67話　さらば秋原町！　上流への旅立ち！

「まもなく一番線に区間準急　南栗橋行きが参ります。危ないですから黄色い線の内側までお下がりください。」（筆者、どこに住んでるの？）

駅のアナウンスが鳴った。ちょうど東武日光方面行きの電車だ。そして電車に乗り込んだ。

電車の中は混んでいた。朝のラッシュ時間帯だ。これなら探すのに苦労するだろう。しかし、東武線に行けば行くほど車両はすいてきた。

「これからどうする」
ペナルティが聞いた。

その時、東武の広告が目に入った。

“鬼怒川へ逃げよう”

熱斗はその広告を見て言った。

「鬼怒川へ逃げよう。」

まもなく南栗橋だ。ここから快速で一揆に鬼怒川温泉だ。

そして、南栗橋に着いた。南栗橋の周りには車庫があるくらいだ。

埼玉とはいえここまで来れば田舎である。さらに鬼怒川温泉へ向けて快速電車は進む。栃木・下今市と行くほど山は目前に迫って来る。空にその列車を追いかける一台のヘリコプターがいた。

しかし、下今市に着いたときそのヘリコプターは追いかけるられなくなった。なんと列車が分かれたのだ。そう。東武鉄道ファンならわかるだろう。快速電車はこの下今市から前は鬼怒川温泉へ。後ろは東武日光へ行くのである。

ヘリコプターに乗っていた炎山は、あきらめた。炎山の中にも熱斗たちが犯人だとは思っていなかった。

熱斗たちは鬼怒川温泉に到着した。

「これからどうする。」

ペナルティは言った。

とりあえずここにいることにした。

探索をあきらめた炎山はどちらに熱斗たちが行ったか調べていた。

「炎山さま。居場所が特定できました。」

ブルースが言った。しかし、もう夜になっていた。炎山は明日、鬼怒川に行くことにした。しかし、熱斗たちがやっているとは思えなかった。出来れば明日も行きたくなかった。

第68話 鬼怒川

そして、静かな朝を迎えた。鬼怒川沿いの宿であった。

炎山はヘリコプターで鬼怒川温泉へ向かった。

「はあ。超気持ちい。」

熱斗が叫んでいたが置かれている状況を考えるとそんなことは言われてられなかった。

確実に炎山は来る。それまでにけじめをつけなければならない。もう逃げられなくなっていた。

「鬼怒川のほうへ行こう。」

熱斗は能天気に行った。

川には船があった。しばらく様子を見てみると、急に周りが騒がしくなった。

「あのヘリコプターは。」

熱斗が言った。そのヘリコプターはこちらへ近づいてきた。

そのヘリコプターにいたのは炎山だった。

「熱斗。お前がやっていないことくらい分かる。しかし、どうしても捕まえなければならぬんだ。」

炎山は言った。マオは近くにあった船にメイリィとシロウ。それにペナルティを乗せた。

「僕は大丈夫。この川を下れば。秋原町に着く。」

マオは船を川に押しやった。

「マオ」

メイリンは叫んだ。

そして、鬼怒川を流されていった。しかし、鬼怒川温泉周辺は溪流となっており、危険な状態に置かれていた。

一方、マオたちはじっとしたままヘリコプターに乗った。

科学省にいた熱斗の父の祐一郎は、熱斗ではないことぐらい分かっていた。しかし、今ではどうしようもない。

熱斗たちはリバーシブル刑務所に拘留された。

「危ないからって。貴船長官じきじきの命令だ。」

炎山は言った。

そのころ黒子の少年は刑務所の外で笑みを浮かべていた。

「義彦。」

父親がその少年を呼んだ。その父親はなんと首相だったのだ。

熱斗たちはこの寒い刑務所の中で暮らすことになったのも実は少年の父親のおかげだったのだ。

しかし、なぜ少年はあの学校にいたのだろうか。そこには少年の表と裏があった。

Ⅱ第69話 謎の探偵 新河岸川コナン？Ⅱ

「真実は一つ」

と言えば、皆さんは分かるでしょうがなぜか科学省に現れたのはこう言った。

「カレー一番」

受付の人は困ったようだが、ひとまず光博士に会いたいといった。

熱斗の父、祐一郎はその少年と会った。そして、その少年は言った。

「あなたの息子さんがいまリバーシブル刑務所に抑留されているそうですね。しかし、犯人はその少年ではありません。」

熱斗の父は耳を疑った。

「犯人は、こんな手を使ったのです。まず熱斗たちを呼び出した。

そしてわざと正体をばらしたんです。そして、あらかじめ掘ってあった穴に隠れたんです。ロックマンに聞けばそこらへんは分かるでしょう。ネットナビはうそをつきませんよね。光博士。」

その少年の一言が熱斗たちの運命を変えることになった。

そのころメイリィたちは、利根川に差し掛かっていた。そこを炎山が見つけた。

「大丈夫か。」

炎山は、メイリィたちを助けた後こう言った。

「大丈夫。きっと帰ってくるよ。」

メイリイは泣き出した。本当は心配だった。このままずっと会えないのかと。

そして、ロックマンに対して証人喚問が行われた。

貴船長官が質問した。さらに、データを解析した。その結果、その前にメールが届いていたことが分かった。しかし、もうデータは消えていた。

貴船長官は、熱斗たちを開放してやることにした。しかし、犯人は分からなかった。

一方、黒子の少年は、悔しがっていた。まさか邪魔されるとは思わなかった。

少年は決断した。熱斗たちを殺してやると。

熱斗たちが科学省に戻ってきた。

「パパ」

熱斗は真っ先に祐一郎に抱きついた。やはり子供である。そんな光景をマオは眺めていた。

その時、メールが届いた。

『幸運なものたちよ。お前らに宣言する。もしもお前たちが指定した場所に来なかった場合は、この町のはずれにある火力発電所を爆発させる。しかし、お前たちが来ればその計画はなしにしよう。場所は、澄川の河川敷だ。』

マオたちは焦った。

第69話 謎の探偵！新河岸コナン？

「真実の一つ」

と言えば、皆さんは分かるでしょうがなぜか科学省に現れたのはこう言った。

「カレー一番」

受付の人は困ったようだが、ひとまず光博士に会いたいといった。

熱斗の父、祐一郎はその少年と会った。そして、その少年は言った。

「あなたの息子さんがいまりバーシブル刑務所に抑留されているそうですね。しかし、犯人はその少年ではありません。」

熱斗の父は耳を疑った。

「犯人は、こんな手を使ったのです。まず熱斗たちを呼び出した。

そしてわざと正体をばらしたんです。そして、あらかじめ掘ってあった穴に隠れたんです。ロックマンに聞けばそこらへんは分かるでしょう。ネットナビはうそをつきませんよね。光博士。」

その少年の一言が熱斗たちの運命を変えることになった。

そのころメイリィたちは、利根川に差し掛かっていた。そこを炎山が見つけた。

「大丈夫か。」

炎山は、メイリィたちを助けた後こう言った。

「大丈夫。きっと帰ってくるよ。」

メイリィは泣き出した。本当は心配だった。このままずっと会えないのかと。

そして、ロックマンに対して証人喚問が行われた。

貴船長官が質問した。さらに、データを解析した。その結果、その前にメールが届いていたことが分かった。しかし、もうデータは消えていた。

貴船長官は、熱斗たちを開放してやることにした。しかし、犯人は分からなかった。

一方、黒子の少年は、悔しがっていた。まさか邪魔されるとは思わなかった。

少年は決断した。熱斗たちを殺してやると。

熱斗たちが科学省に戻ってきた。

「パパ」

熱斗は真っ先に祐一郎に抱きついた。やはり子供である。そんな光景をマオは眺めていた。

その時、メールが届いた。

『幸運なものたちよ。お前らに宣言する。もしもお前たちが指定した場所に来なかった場合は、この町のはずれにある火力発電所を爆発させる。しかし、お前たちが来ればその計画はなしにしよう。場所は、澄川の河川敷だ。』
マオたちは焦った。

第70話 新河岸コナンの正体!!

そして、河川敷に行った。

そこには例の黒子の少年が立っていた。

「よくぞ来たな。しかし、お前らを帰すわけには行かない。なぜなら秘密を知ってしまったのだからな。」

黒子の少年はいきなりデイメンショナルエリアを出した。

「これなら邪魔が入らない。さらに俺のナビが実体化できるというわけだ。ネットセーバーさん」

黒子の少年はいきなりナビを実体化させた。

熱斗はロックマンと合体した。最初は熱斗たちのほうが有利だった。しかし、あるチップをPETに入れた瞬間。立場が逆転した。

「それは何だ。」

熱斗が言った。

「君たちの事はいろいろと研究させてもらったよ。このダークソウルユニゾンも研究成果だがな。」

少年はなんとダークチップとあるネットナビのソウルユニゾンを完成させていた。クロスフュージョンだけではやっていけなくなった。ダークチップの強さとソウルユニゾンの強さが組み合わさっていた。だんだん熱斗とロックマンは劣勢に追い込まれることとなった。

その時だった。

「カレーを猪木^{いのち}とする探偵 新河岸川コナンは仮の姿。カレーキング参上。」

川岸のビルにスプーンを持ったヒーローが立っていた。

しかし、人には無理である。倒すことは不可能なのだ。しかも、今の状態ではどこかへ飛ばされてしまう。

「やめるんだ。」

熱斗が言ったが聞かなかった。

「やー」

言った瞬間カレーキングは変身した。なんと熱斗とクロスフュージョンしたのだ。これで二対一となった。

「よし。留めの一発だ。」

その時、ネットナビに変化が現れた。うなり始めた。

「おい、どうしたんだ」

ダークチップのせいだ。ナビは消えた。それと同時にディメンショナルエリアが消えた。

すぐにネット警察が来た。

「ありがとう。カレーキング」

熱斗は言った。ペナルティはどこかでそのカレーキングの顔を見たような気がした。

第71話 鉄道の旅

少年が逮捕されてほっとしたある日、マハ一番のマハジャラマに呼ばれた。

「あなたちは鉄道に興味はないですか。」

いきなり唐突に言われた。熱斗は好きだと答えたが、それは鉄道が好きなのではなくただ駅弁が好きだというだけだ。

そして、マハジャラマは話し始めた。

「実は私は鉄ちゃんです、ニホンに来てからも鉄道に乗りに行ったりしました。」

ペナルティは、松ヶ丘のことを思い出した。クラブ活動に鉄道研究部といういかにも秋葉系らしき部活の部長を同じクラスの細川がやっていて、鉄道の知識などをいやになるほど聞かされた。確かに高幡ほどではないが何か雰囲気があった。マハジャラマの話はさらに進んでいた。

「と言うことで、行きませんか」

熱斗は手を上げた。どうせ駅弁目当てだろう。マオは少し興味があった。ペナルティも手を上げた。

「じゃあ。行きましょう。」

そして数日後。

そして旅は始まった。銀と川越名産のサツマイモの色を身にまとった車両に乗り、埼玉のほうへ進んだ。列車の風景はだんだん田舎になってきた。

「まもなく小川町。小川町です。」

小川町の駅へ着いた。

「駅弁はないの」

熱斗が聞いた。マハジャラマは答えた。

「ここからさらに寄居に行って、そこでSLに乗るんです。そのSLの中で売っていますよ。」

熱斗は本当に食いしん坊だ。

マオはS Lを知らなかった。ペナルティは教えた。

寄居に着いた。本当の田舎の駅だ。駅員はいるものの町は今ひとつだ。

そんな駅にS Lが来た。

今では一部となってしまったS L。マオは初めて見た。

そして、列車は静かに熊谷へ向かっていた。

これがもしかしたら3人の最後の思い出となったのかもしれない。

第72話 カレーキングの任務：

熱斗の家に急にカレーキングが現れた。

「忘れる所だった。劉鼠星という奴と戦いたいんだ。カレーで。」

カレーキングが言った。マオはいつもの調子で引き受けた。

熱斗の家の台所ではせまい。そこでマハ一番を借りた。

デカオなども興味津々だ。

そして、対決が始まった。相手はカレーライスを作る準備をしていた。ならば。とチャーハンを作り始めた。

デカオたちはマオが勝つと思っていた。しかし、カレーキングの様子に驚いた。

マハジャラマもその手つきに驚いている。とてつもなく早い。そして、なによりもスパイス調合のところから始めているのである。普通は三時間かかる。しかも、こだわっているのであれば二・三日かかることがある。しかし、カレーキングは三十分の間にルーを作る手前まで来ていた。とても普通では考えられなかった。

マオも負けないようある秘策を考えていた。

そして、一時間がたった。カレーキングとマオがほぼ同時に作り終えた。

マオもカレーキングは強いと思っていた。しかし、一時間でカレーライスを作り終えながらも味が凄く濃厚だとは思っていなかった。そんなことは知らずに判定に入った。

まずカレーキングのカレーライスを食べた。審査をしていたみんなの目の色が変わった。

マハジャラマはカレーキングにこう聞いた。

「一体、何故一時間でこんな味を出せるのですか。」

マハジャラマの言った発言にマオは驚いた。少なくとも一時間で皆をうならせるようなカレーを作ったのは彼しかいなかった。

たとえば、マオがどんなにおいしいものを作ろうが、そのカレーには

勝てなかった。

いや、料理人として凄いと思った。

「僕の負けだ。」

マオは言った。カレーキングの強さを見せられた感じだ。

ペナルティがいきなり聞き始めた。

「あなたはどこかで僕と会いませんでしたか。2003年に」

カレーキングははめていた仮面をはずした。その顔を見てペナルティとマオはさらに驚かされた。

それは、川場の家来だった奴で、つくばエクスプレスでコーヒーに埋もれたあとに見たあの黒装束の少年だった。しかし、もう時を果てて、その顔には、苦勞の証が見えた。

そしてカレーキングは言い始めた。

「僕はあの後、川場が解散と言ってたんだ。自分は何をやってるんだ。」

と初めて気づかされた。学校は破滅状態になった。そんなことをして楽しいのかと。僕はカレーが好きで、みんなを幸せにしようというインドに行った。何年も何年も修行は続いた。そして、インドでも有名な職人となった。そんなある日だった。日本でまた社会主義に戻ろうとなったときに日本へ戻った。しかし、事件は解決していた。もしやと思った。あの少年たちが解決したのではと。人の考えを変えてしまうほどの力を持った少年と私は戦いたくなった。その時、前の一人の男が立っていた。その男がこの世界へと連れてきてくれたんだ。」

あの時からこんなに苦勞して、そして、マオに勝てるようになった。しかし、くだらないことに時間をとられていた。確かにあのとき素直に捕まっていれば、今頃どうなっていたかは分からない。しかし、今思うと凄く無駄なことをしていた。それを気づかせてくれたのだ。マオは考えられることになった。

第73話 影の男：

名人からある命令が昨日着ていた。それは、郊外の遊園地の隣にあるコンベンションセンターで中国物産展をするというのだ。その警備に熱斗とマオに任された。それにしてももう朝八時だと言うのに熱斗は夢の中だ。ロックマンが起こそうとするが、昨日、学校で水泳の時間を連続で四時間やったせいかまったく起きない。

「行つて来ます。」

マオはついに行つてしまった。待つては間に合わない。そして、やっと熱斗が目を覚ました。

「何で起こしてくれなかったんだ。ロックマン。」

熱斗はロックマンに八つ当たりしている。しかし、今からそんなことを行つていてもおそい。

「バスに乗らないと間に合わない。」

熱斗はさらに急いだ。階段から転びそうになりながらも家を飛び出した。

「バスだ。」

熱斗はバス停にいるバスを見て力が抜けたが発車してしまった。そのまま追いかけたが信号で止められてしまった。

次のバス停に着いた熱斗はバスの時間を見た。次のバスは十分後だ。バス停にはまだ熱斗しかない。なにせ、バスが行ったあとだからだ。

十分たったがバスはこない。

「ロックマン。今バスはどこだ。」

調べたら、まだまだバスは来ない。十個手前のバス停にいるらしい。しかし、その道は凄く混雑していることで有名である。

このバス停の近くには地下鉄の駅がある。そこからは一回乗りついで、遊園地まで行ける。しかし、遊園地駅行きの電車は三十分一本だ。

そんな考えていることを知らずにマオはすでに警備をしはじめていた。

中国の香りが充満していた。しかし、ここは警備に集中してなければならぬ。

メイリィやメールも来ていた。いつの間にか友達になっていた。ある一つの露店にマオは立ち止まった。

その店のものはいかにも子供だましみたいなのを売っている。

そこに、麻婆ナスがあった。一つ買ってみた。

「ん、これは安いな。少し高い。」

マオは思わず言ってしまった。その場面を入りの男が見ていたことに気づかなかった。

一方、熱斗はむかむかしていた。自分がいけないのに怒っていた。

そして、バス停に着いてから三十分後、熱斗がいらいらしている所に一気に三本のバスが来た。しかし、バスはどれも満杯だ。ここからあと15分くらいで着く。熱斗は耐えた。

第74話 マオを狙う影の男

熱斗は満杯のバスにもまれながら向かっていた。そんな頃。人のいない廊下に差し掛かったとき、マオの後ろの男がいきなり襲ってきた。マオは、とっさによけた。

「何者だ。」

マオが叫んだ。男は言った。

「君が劉鼠星かい。」

チンピラ風の男は、続けて言った

「ぼくは、君をビジネスにするために頼まれたいわゆる世の中で言う、殺し屋というものだ。」

男は腹を蹴った。その瞬間を熱斗は見た。

「ここで何をしているんだ。」

その問いに殺し屋が答えた。

「わいか。お前みたいになちっぽけな坊主に言うほどのものではない。」

熱斗はネットセーバーであることを言った。

「ほほう。そんなのクズにしかないが、そんなに見せるのなら少し教えてやろう。お前も一緒に来るか。」

熱斗は後ずさりした。しかし、殺し屋の子分に首を殴られ、気絶した。

「本当にこんな坊主がいるから殺し屋はやっていけないんだ。」

まおが気づいたときにはすでに会場ではなかった。

その前には一人の大男がいた。

「何のために僕を連れてきた。」

マオが言ったが大男は黙ったままだ。

そして、緊迫した空気が流れた。

「坊やにはたんまり働いてもらうよ。その肉体が尽きるまで。」

いきなり大男が言い始めた。しかし、とても質問できる状況ではな

かった。周りの人間は銃を持っていた。

その頃熱斗はメイルたちに助けられていた。熱斗は気づいた。

「大丈夫。一体何があったの。」

メイルが熱斗に聞く。熱斗は言った。

「マオが連れ去られた。」

メイリンは少し驚いた。

「どこにマオが連れられていったか分かる。」

メイリイは興奮した様子で聞いた。しかし、熱斗にも分からない。

メイリイは心配した。

第75話 ついに追い詰めた熱斗…

熱斗は、探し始めた。しかし、手がかりがない。

「さあ。ついてこい。」

マオはある港で無理やり下ろされた。

そして、倉庫街に閉じ込められた。

熱斗はあの人物について調べていた。ロックマンが言った。

「そう言えば、どこかで見たことがあったな。」

ロックマンがさがしていると、ある情報があった。

「この男だ。」

熱斗はそれを見て言った。この男に間違いない。しかし、問題はその男がどこにいるかだ。それがわかって何の役にも立たなかった。一方、マオは助かるためにある作戦を考えていた。PETから熱斗のPETへメールを送ることにした。ここは圏内だ。さいわいPETは取り上げられなかった。このままぐずぐずしていると本当にこき使われてしまう。しかし、見張りが中を覗いていた。隙を見計らっていた。

ちょうど見張りの隙ができた。今だ。メールを送った。マオは熱斗に命運をかけた。

熱斗はロックマンからメールが届いたことを聞いた。そのメールはあのメールだった。

「ペナルティ。」

ペナルティを呼んだ。ペナルティは熱斗からマオからメールが来たことを聞いた。そして、ロックマンが逆探知をし始めた。

「ここだ。」

ロックマンは割り出した。

「ペナルティ。君もついて来い。」

熱斗はペナルティと一緒に家を飛び出した。家の前にはメールややいとがいた。

「私たちも手伝うわ。」

そして、マオがいる所へ急いだ。

その頃、マオは待っていた。そこにあの大男が来て言った。

「やっと決まった。これから毎日、24時間働いてもらう。

もうだめかと思った。大男が立ち去ろうとした時、1つの飛行機が着陸した。周りは何もないからといってこんなことをしていいものだろうか。熱斗が飛行機から降りてきた。

「やい、おまえ。この前はよくも坊主といってくれたな。」

熱斗は飛び降りてきた。

「くそ。」

大男は言った。

第76話 壁を乗り越えて…

大男はにやりとした。

「お前たちもよくここまで来たものだな。しかし、ここは敵の陣地ということをお忘れしないで欲しい。」

大男はある合図をした。その瞬間、地面が揺れ始めた。

「お前たちを簡単には逃がすものか。」

大男はそう言った。熱斗は言い返した。

「そんなことをやっても逃げられるぜ。」

熱斗は名人にディメンショナルエリアを要請した。

「そんな手があったとは。」

大男は、悲しくも惨敗した。熱斗たちは外へ出た。

「よかったね。しかし、あんなことをよく思いついたね。」

熱斗は言った。マオはほめられたようにうれしかった。

しかし、大男はまだあきらめていなかった。

「さあ。この中のどれが帰りの飛行機でしょうか。この中の1つはちゃんと飛びますが、それ以外は地獄行きの飛行機だ。」

熱斗たちは迷った。その時、マオは飛行機を触っていた手の感触に違和感を覚えた。

「まさか、この飛行機はキャベツで出来ているんじゃないか。キャベツなら空には飛ばない。しかし、地獄に行かせることぐらい可能だ。」

熱斗はマオの話を聞いてすべての飛行機を触ってみた。確かに何か冷たい感じがした。

しかし、大男は焦っていないかった。

「これだ。」

熱斗は飛行機を見つけ出した。

しかし、大男は言った。

「さあ。その飛行機で帰れると思っているのか。」

その男の言葉に耳を疑った。後ろからやいと言った。

「大変。ガソリンがない。」

熱斗は怒った。

「そんなずるいことをしてまで俺たちを逃がしたくないのか。」

大男は答えた。

「そうさ。又刑務所にはいりたくないからね。」

熱斗の怒りは頂点に達した。

「ネットバトルだ。」

熱斗は言った。大男は待っていたかのように賛成した。そして、大男がフィールドを出してきた。大男には何か秘策があるようだ。

第77話 対決

熱斗と大男は始めた。しかし、ここまでしつこくした理由は一体何だったのか。ペナルティにはとてもさっきの理由だけではないと思った。

最初は熱斗の方が優勢だった。しかし、大男はあっけに取られている様子もなかった。

ペナルティはいっそう怪訝な顔をした。

熱斗はそんなことにも気づいていなかった。

しかし、大男はもうすでに作戦は実行されていた。

大男は急にあるチップを出してきた。

「このチップは…。」

ロックマンが熱斗に言った。見たこともないチップだ。

しかし、そのチップは強い。ロックマンは負けそうになった。一体どうすればいいのだろうか。

熱斗は考えていた。その時、一つのチップが思い当たった。

それはソウルユニゾンだった。

「今度こそはやっつけて帰るぞ。」

熱斗のやる気は半端なものではなかった。

しかし、大男はまだまだ戦った。もう後がなかった。

また差が開き始めた。熱斗の大男は負けた。熱斗たちを返すことにした。悔しいがそうするしかなかった。

しかし、ペナルティはまだまだ分らなかった。あの男がどうしてあそこまで戦ったのか。

それは後の重要になるかもしれない。そうペナルティは思った。

しかし、熱斗はそんなことを考えずにいた。熱斗というのはこういうところがあるから戦いの時にピンチになるんだと前々からペナルティは思っていた。

ある意味、幸運が呼んだとしか思えない感じだった。

第78話 阿波踊りとサンバ

ペナルティはいきなり思い出した。

「そういえばぼくの町では、祭りを夏にやっていた。しかし、もう秋になってしまつてはだめだな。」

そんな思いつきには対応できなかった。今更戻ることなど出来なかった。さらに、今は時空を越えることが出来るのはペナルティの時代とマオの時代だけだ。これ以外の空間には出入りできなかった。熱斗は思い出した。祭りがある。そこで出来ないかと。

そんなことが始まりだった。

早速、ペナルティからやり方を教えてもらった。阿波踊りは前、小学校でやっていた。西堂さいどうの阿波踊りは高円寺阿波踊り大会に出るほど有名で、学校にも阿波踊りをやっている子がいた。しかし、サンバは知らなかった。

どうすればよいか。

そんなことを聞きつけた人がいた。隣向かいの家に住んでいる西前さいぜんという男だった。

その男が熱斗の家に来た。

「サンバをやりたいという話を聞いてやってきたのですが。」

西前は言った。ちょうどいいときに来た。しかし、祭りはあさつてだ。間に合うだろうか。

その日からもう特訓が始まった。

そして、祭りの日が来た。特別にサンバと阿波踊りが加わった。西堂で見ることは出来なかったが・・・。

踊れるのである。そして、阿波踊りが始まった。最初は皆黙ってみているが、だんだんみんなが加わっていた。

西前さん一家も加わってくれた。そして、阿波踊りは無事終了した。そして、極めつけはサンバ。西前は前に出て踊っていた。いききとしていた。ペナルティの大満足だ。西前は祭りの後にこう行った。

「ありがとう。おかげで楽しかったよ。」
そして、だんだん冬へと近づいてゆくのであった。

第79話 西前との戦い

秋といえばスポーツの秋。そして、食欲の秋。などいろいろなことを楽しめるそれが秋である。

もうそろそろ文化祭の季節も到来し、何かと忙しい秋原中学校。そんな所に西前の息子が転向してきた。実は、西前は夏休みに秋原町に引っ越してきたばかり。

担任の梅園先生が転校生の紹介をした。中学3年の秋。高校受験もあと少しというところ転がり込んできたので梅園先生もさぞかし大変なことだろう。

「始めまして、同じ電算シティの高砂町からここ、秋原町へ来ました西前といいます。好きなスポーツはテニス。どうぞよろしく。」すぐさまクラスの女子は一目ぼれ。テニス部に入るや否やテニスコート周りは女子で埋め尽くされるという異常な状態。

「なんで女子というのはあんな奴に好意をいだくんだ。」

マオが同じクラスの江古田に話していた。

「まさか、メイリイが取られるんじゃないかとやきもちを焼いているのか」

江古田もひどいもんだ。マオは怒った。

江古田がこう言った。

「そう言えば、もうそろそろ文化祭。体育館を借りて勝負してみたら。西前と。」

家に帰ったマオは悩んだ。熱斗とペナルティはすでに江古田から聞いていた。

「そんなくだらない勝負しても意味がないでしょう。」

ペナルティが言った。

しかし、マオはこう言った。

「なんというか。取られたくないというか・・・。」

マオの言葉に何もいえなくなった。

やはり、やきもちを焼いているらしい。

江古田は秘密で次の日に文化祭実行委員の方へ企画書を出していた。

江古田は、変なことを考えていた。

文化祭実行委員長も快く承諾してしまった。

そして、文化祭当日。

マオと西前はステージ裏に呼ばれた。そして、こう言われた。

「お前が言えないだろうと梓を取ったぜ。」

江古田の一言にマオは凍りついた。

江古田という奴はこういう奴だった。

「いまさら後には引けない。」

マオは気合を入れた。

江古田も力を入れた。そして、対決は始まった。

女子100人が集められ、どちらがいいか決めてもらおうというものだった。

そして、まずは西前のテニス。

ボールを打ち返すごとに歓声が上がった。

しかし、次のマオの料理にはなかなか歓声が上がらず。これは味で勝負だ。

マオの料理を食べた途端。皆の目の色が変わった。

それを見た西前はマオと握手してこう言った。

「この少年に俺は尊敬する。」

それを聞いたマオは何かほっとした。

第80話 しるしを狙う男

ある日、図書館に一人の男性があの本を読んでいた。

その男は本を借りていった。

文化祭も終わって、一段落したかと思うともう中間テスト。マオたちも必死だ。

男が図書館で本を借りていった次の日。熱斗の家にあの男が来た。

「どなた様ですか。」

マオが出て行くとその男が言った。

「あなたたちはこの本をご存知でしょうか。多分知っているはずですよ。あなたたちはこの本を見つけてしまったからあんな事件を引き起こしてしまった。私はあなたたちの存在をその時知ってしまった。もう私はそれが欲しくてしょうがない。」

男が近づいて来た。

「しかし、私もあんなことはしたくない。そんな時に思いついたのがクローンだ。」

男の言葉に耳を疑った。クローンとは一体。男は話を続けた。

「君は出雲という物を知っているか。そこから作るんだ。」

男の話に完全についていけなくなっていた。こんなことよりも早く勉強をしなければ担任の梅園先生に怒られてしまう。前回もそうだった。夏休み。暑い中学校に呼び出された。

「料理をやるのもいいが、少しは勉強をしないと。まあ、先生は大学に行ったのは20歳になってからだが。」

今度も呼び出されるには後免ごめんだ。

「お断りします。」

男の話など聞かずにマオは断った。

「俺が一体誰だと思っているんだ。君は知らないのか。京都科学大学。通称、京科大の教授、湯田中太郎だぞ。」

マオはそれを聞いて驚いた。あの有名な教授だった。しかし、今は

そんなことよりも試験勉強のほうが先だ。
男は仕方なく帰っていった。
しかし、その男はあきらめていなかった。

第81話 凸凹コンビ

次の日、赤羽の駅の中にある牛丼屋松坂家。そこで中年女性が牛丼を食っていた。そこにあの湯田中が現れた。

「君は牛丼が好きだな。」

湯田中に言われた女性は驚いた。しかし、女は顔を見てこう言った。「何だ。湯田中じゃないですか。きれいなハンサムの男性かと思ったら。」

湯田中は少し膨れた。しかし、女にこんな話を持ち出した。

「ねえ。君は勇気のしるしというのを知っているか。」

女はとぼけて答えた。

「牛丼のつゆだく？」

その声に店員が牛丼を作り始めた。

「おい。俺が言ったのはそれではない。」

そんなことを言っていると店員が牛丼のつゆだくをもってきてしまった。湯田中はしょうがなく牛丼をほうばる。

「で、話は何ですか。私、食べ終わったら生徒の答案に丸をつけなければなりません。」

女はもう牛丼を食べ終わっていた。女の名前は大川。赤羽の近くに住んでいる普通の女だ。

「それを持った少年がいるんだ。興味ないかい。」

湯田中はそれに乗っけてもらおうと必死だが、大川は断った。湯田中が理由を聞いた。

「私の担当の授業はもう学級崩壊しているんです。」

しかし、湯田中は必死に説得した。

そして、女は折れた。

そして、マオたちの中間テストが終わった頃を見計らって湯田中はもう一度熱斗の家に足を運んできた。

今度はペナルティと熱斗、マオの三人が出てきた。

マオは賛成だった。というよりも何をされるか分かっていなかった。しかし、ペナルティと熱斗は反対だった。やり方というよりも印が奪われることがやだった。

しかし、湯田中はあきらめなかった。マオに強引にはんこを押させた。

それを影で見ていた人がいた。

第82話 ニセモノのしるし

そして、京都。

湯田中の秘密の研究室に大川とマオ。それにお付の二人（ペナルティと熱斗）が来た。

「湯田中教授の総回診です。」

大川が持っているカセットから音楽が流れた。ペナルティはあきれていた。前ドラマで見た白い巨人と同じではないか。ふざけるのもほどというものがある。

「さあ。気分が乗ってきた。やるぞ。」

湯田中は部屋に入っていった。

「おう。」

湯田中に入るなりこんなことを発した。

「どうしたの」

大川が湯田中の視線を追っていった。

「あなたはそんな所に興味があるのか。」

大川はため息をこぼした。本当に湯田中は教授なのかいつも疑問的である。

そしてやっと取り掛かり始めた。

しかし、やり方は怖いものだった。

マオは青ざめながら帰ってきた。ペナルティたちにも理由は分かっていた。部屋から奇妙な声が外へ漏れていた。

「毎度ありっ」

大川が鍵を閉めた。本当に困るコンビネーションだ。

帰ろうとしたとき、下に封筒が落ちていた。中を開いてみた。そこにはこう書かれていた。

『このサンプルは今後の研究に使わせてもらいます。あと、湯田中は、何かを見せると興奮するんです。ごめんなさい。』
しかし、今書かれても困る。

その夜、マオたちは家にいた。しかし、もう外は寒い。

その頃京都では大変なことになっていた。

突然メールが届いた。

『サンプルが盗まれた。このままだと大変ことになる。』

そのすぐあとに名人からもメールが来た。熱斗たちは又京都へ向かわなければならなくなった。しかし、それは手遅れだった。

第83話 脅威！ 謎の男始動！！

「はははっ。君たちが来たね。」

そこには一人の仮面少年がいた。しかし、正体は分からなかった。

「この正義のマークは頂きます。すべて。」

少年はいきなり襲ってきた。戦うがそのままではまずい。少年はさらに言った。

「君たちを分解することができるとだ。彼には元の世界に戻ってもらうよ。」

少年の言葉に動揺している暇などない。

しかし少年はあるものをPET入れた。

「これが何だと思うかな。これは後この時間で時空空間を遮断する装置だ。これが発動すれば、もう二度と元の時代には行けなくなる。」

熱斗とロックマンは壊そうと思った。マオの心の中では帰らなければという強いものが湧き上がってきた。そんなことは熱斗には分かった。マオと離れたくなかった。だから壊そうと思ったのだ。しかし、少年は言った。

「そんなことしても無駄さ。このソフトはこわれない。」

熱斗はやめた。

「どうした？ 攻撃しないのか。それならこっちから攻撃してやる。」

そして、お前が持っているマークを意地でも取ってやる。」

そして、攻撃をし始めてきた。熱斗も反撃する。

「やめろ。」

マオが言った。熱と少年の戦いが止まった。マオは続けていった。

「こんなにやって楽しいか？ 町を壊し、人々を傷つける。そんな奴が正義のしるしをもっていられる訳がない。」

その時、天を光が包んだ。

「アイリス？」

熱斗はまたアイリスを見た。あのときのように。

そして、アイリスは言った。

「マオ君が言ったとおりです。確かに、たまには戦うことも必要だけれども、物をたくさん壊して、それでおしまいではマークを持っている資格などありません。あなたの中では今、何かが不足している。いや、不足というものではないかもしれない。」

いつの間にか光から解き放れていた。しかし、マークはどこかへ消えた。それと同時にマオも消えてしまった。

第84話 消えたマオの行方

周りを見てもみるがマオの姿はどこにもない。

「マオ。」

いくら探しても出てこない。しかも、他のペナルティやメイリイ・シロウの姿も見当たらない。

熱斗はお母さんに聞いた。しかし、返ってきた答えは意外なものだった。

「熱斗。熱でもあるんじゃない？」

その答えに啞然とした。熱斗は部屋にこもってしまった。

「ロックマン。一体マオやペナルティはどこへ行ってしまったのだろうか。そして、アイリスの言った、俺に不足しているものは何だろう？」

熱斗はしょんぼりとしていた。

その頃マオは元の世界に戻っていた。路上に倒れていた。

「あつ。いてて。」

マオは気がついた。隣にはシロウとメイリイが倒れていた。

「メイリイ、シロウ。」

二人とも起きた。そして、メイリイが言った。

「何で私たちこんな所に。」

しかし、そんなことを言われてられなかった。

マオはともかく近くにあった店に入った。しかし、それはどこかで見た風景だった。

「マオ。帰ってきたのね。」

それを言ったのはマオの姉、カリンだった。そうここはマオの家、四川省随一の国営菜館。菊下楼だった。

カリンの隣にはリー提督がいた。

「マオ。探したぞ。マオを菊下楼の料理長に任命しようと探していたのだ。」

マオは喜んだ。なにせ、母と同じ道を歩めたことだ。しかし、リー提督は言った。

「しかし、この書類には任命のはんこが押されていない。そう。シヨウアンの時のように。」

それを聞いてマオは思い出した。

その戦いに挑んだことがここまでつながる。そんな思い出のある勝負。絶対に落とすわけには行かなかった。

「喜んでお受けいたします。」

マオはかしこまった口調で言った。

それを見ていたシロウとメイリイもうれしかった。しかし、これは別れてしまうかもしれない勝負だ。

そんな間に時は着実に時空を結んだ回路を壊す準備に取り掛かっていた。

第85話 時流へ

ペナルティはは気づいた時には家に戻っていた。しかし、誰もいない。周りは散らかり、かすかに水の音が聞こえる。変わり果てた家にペナルティは驚きと悲しみをにじませていた。

ペナルティはもうこの時代には居たくなかった。こんな光景をもう二度と見たくなかった。

ペナルティはナビのピアノマンを呼んだ。

「熱斗たちの時代に戻りたい。もう二度と見たくなかった。この光景を。」

ピアノマンはまた熱斗の世界へ行った。

ピアノマンは熱斗のパパに相談した。

「よし分かった。今、李がいないから代わりに熱斗を行かせる。」その時、科学省にちょうど熱斗が居た。

「おう。熱斗。ペナルティを迎えに行ってくれ。」

その言葉を聞いた熱斗は驚いた。メールやデカオに聞いても元から居なかったように振舞われ、正直あきらめていた。熱斗は行くことを決心した。

「じゃあ。くれぐれも気をつけるんだよ。何が起きてもおかしくない。」

しかし、熱斗は聞かずに行ってしまった。あと六日で時空上を結んだケールブルが切れる。それまでにマオたちは戻ってくるのだろうか。そんなことよりもまずはペナルティを連れてこなければならぬ。

しかし、マオのことが頭から離れなかった。

ペナルティの所に熱斗が来た。

「一体、どうしてここに僕が？」

ペナルティが熱斗に聞いた。熱斗は少年と戦っていた時のことを話した。ペナルティは自分のPETを見た。あの時に三つに分けた一つがそこにはあった。

「これには、もう一つあるんじゃないか。このマークは時空を制御しているんだよ。なにかの理由で」

ペナルティと熱斗はひとまず熱斗の世界へ戻った。

その頃、マオはリー提督の前で任命のための勝負を行おうとしていた。

リー提督が行った。

「これから試験を行う。」

マオは真剣な目をした。

マオはもうすでに時空のことを忘れていた。

しかし、熱斗とペナルティは忘れてはいなかった。

もどって来ることを信じていた。

第86話 謎の少年の正体

科学省に戻ってきた熱斗たちはあの前戦った少年に出会うことになった。

「はは。そう来ましたか。お前たちも終わったな。」

少年はあの時のように言った。

「お前は何者だ。」

熱斗が聞いた。

「俺か。何のためにお前と戦ったか。教えてやろう。」

そう言う少年の体が変化した。熱斗は驚いた。

「お前はロボットだったのか。」

ロボットは答えた。

「ああ。そうだ。俺は正義のしるしの効果を抑えるために派遣された。しかし、見事にお前らにやられた。少しでもあればこの星はどうなるか分からないぞ。」

ロボットの言った言葉に熱斗は引っかかった。

「一体、どういうことだ。」

ロボットは答えを言い始めた。

「正義のしるしを使うと悪いことも同時に起こる。その力がその世の中で最大となったとき、つまり、人々の争い・憎しみが集まったとき、それが惑星を呼び出す。惑星の力が増大すれば地上に変地異を起こすだろう。しかし、もうそれを止められなくなってしまう。お前のせいだな。たぶんこれを止めることが出来るのはお前たちの中にあるかもしれない。」

ロボットはそれを言うときすぐさま倒れた。

「言い尽くしたのだろう。」

祐一郎も聞いていた。

「一体これからどうすれば。」

熱斗はあることを思い出した。

「マオを連れてくれば。」

しかし、祐一郎は乗らなかった。

「熱斗。もしもマオを連れてきて、さらに悪化すれば今よりも大変になる。」

熱斗は迷った。しかし、言った。

「この問題にはマオが必要になると思う。」

熱斗の言ったことに祐一郎は納得した。

「じゃあ。その代わり、お前が責任を取るんだ。もう中学生、そしてネットセーバーなのだからな。」

熱斗はまた時空を越えた。

その頃、マオはリー提督の前に勝負をしていた。課題はショウアンと同じチャーハン。

「マオ。」

熱斗が叫んだ声が菊下楼の中を駆け抜けていった。

「一体、何者だ。」

リー提督が言った。

第87話 未来を救うために…

熱斗は答えた。

「未来から来たものだ。マオに用事がある。少しだけ時間をくれ。」
しかし、リー提督は言った。

「そなたが未来からこようところは任命のための意味、料理人の儀式の最中なんだぞ。控えろ。」

その時、マオが姿を現した。熱斗は安心した。

リー提督はマオに聞いた。

「一体、この無礼者は何だ。」

その問いに対してマオはこう答えた。

「このものは私の成長を手助けしてくれた人物です。この人物が居なければ今頃私は腐り果てていたでしょう。」

そのマオの答えにリー提督は驚いた。リー提督はもう一つ質問した。
「一体、伝説の厨具探しの後、何をやっていたんだ。」

その問いに今までのことをすべて話した。

「この者と話がしたい。お願いです。少し時間をください。」
マオの願いに対してリー提督は言った。

「こんな事態はつきもの。だが試験時間は減らせない。今の時間も調理時間に含むがそれでいいな。」

それにマオはうなずいた。

そして、マオに事情を話した。マオは言った。

「そんな力があつたのか。そして、今脅威があるのは確かだな。」

マオは心の中で決めた。

そして、調理をし始めた。

リー提督が終わりを告げた。

「課題を出してもらう。」

リー提督はそこにあつたチャーハンに驚いた。見た目は悪いが味がよい。リー提督もうなった。

「この者を国営菜館 菊下楼の料理長に任命する。」

リー提督の言葉にマオが待ったをかけた。

「リー提督。いつもこんな名誉なことをしていただきながら辞退するしてしまい申し訳ありません。しかし、また辞退せざるおえません。このままだと未来がなくなってしまう。私たちの子孫を見殺しなど出来ない。」

マオの言葉にリー提督も感心した。マオはメイリイとシロウとともに菊下楼を去った。もう二度と戻ってくることは出来ないだろう。しかし、未来を捨てればと思うと早く未来へ行かなくてはならない。

第88話 未来の世界で世界征服を企む男

未来に戻ってきた熱斗たちは祐一郎からあることを言われた。

「熱斗、マオが持っているほかにもしかしたらあるかもしれない。惑星がどれか分らない以上、なんともいえない。」

しかし、もう惑星は近づいていた。そのことを分かっていた人がいた。しかし、男はこの惑星に興味があるようだ。

惑星といえどもそれは何個もある。その中から探すのは大変だ。その頃、町中ではある都市伝説的なことがささやかれていた。

夜中、ある路地を歩いていた女が男に言った。

「雷が降るある夜、一人の男性が歩いていた。そして、たまたまその人の傘に雷が落ちた。そしたらその男の人は体が変わってしまったそうだ。」

男はそんなことはないと思っていた。

しかし、男は前に形が変わったあの男がいるのに気がつかなかった。女が形が変わった男を見つけてしまった。

男は研究した。そしてついに見つけてしまったのだ。すべてのことを。

男には夢があった。その夢は中学三年の時に作文で書いたことだった。

内容は、世界征服をしたら。

その作文が数年前、家の自分の机から出てきた。作文を書いた所がテストの裏ということもあり、だいぶ汚れていた。

その思いが男の心の中から湧き出てきた。すべてを知ってしまった男を止めることは出来なかった。

その男は科学省の動きを敏感に捉えていた。そんな大きな力を持った奴を外に野放しにするはずがないと思っていたのだ。

男の予想は的中した。それがマオの発見だった。

しかし、ここでのこのこと現れわけのも行かなかった。獲物はもう

動き始めていたからだ。

マオたちは早速動き始めた。

その男が動き始めていることも知らずに。

第89話 真実

夜中の二時。つまり丑三つ時、マオはふと目が覚めた。周りを見渡すと一人の男爵風の男が立っていた。男爵風の男が言った。

「お前がマオか。確かに正義のしるしを授けるにはふさわしいだろう。あの九華山の厨具に仕組んでおいてよかった。今まで正義のしるしを授けたものは皆だめだった。そして、十度目の正直！君が当たってくれた。」

マオは男爵風の男に聞いた。

「一体。あなたは、そして、もしもあのロボットのことを知っているなら教えてください。惑星のことやこのマークの意義とは。」

男爵風の男は言った。

「まあ。そんな大声を出さずに。他の奴には知られては困る。今、お前が会ったことがある人物の中に地球征服をたくら

んでいる奴がいるみたいだ。やろうと思えばできる。しかし、一度惑星を手に入れば、世の中は大変になる。時空がつながった時のように。だから、時空を封鎖したんだ。俺たち、 β 人は地球人に見直してもらいたいことがたくさんある。例えば宇宙ごみ。あれがあることによって我々の中には死者が出ているくらいだ。さらに、地球という星はきれいだ。我々の先祖は何回か地球に降りて、神様やら火のつけ方やら劇を教えた。そういうことをやってきた先祖は未だに地球という星はいい星だと言っている。だからここ150年の間に地球は変わってしまった。森林を破壊し、人々は自己的になってきた。だから地球をもう一度やり直すのが私たちの使命だ。これはもう変えることは君たち以外無理だろう。特に君の活躍は凄いものだ。一緒に地球を元に戻そう。」

しかし、マオは反論した。

「確かに地球は変わったかもしれない。特にここ150年から100年くらいの間に、しかし、一部の人間は違う。人やものに思いや

りを持った人間もいる。」

「どこにそんな奴が居るんだ。」

男は怖い顔をして言った。

「ここに居るみんなだ。」

マオも反論した。

「ははは。馬鹿にするな。やはり十度目の正直とは行かなかったよ。うだ。我々が議会で採択された地球クリーン作戦によって五つのしるしもなくなるだろう。昔は、よかった。」

男の発言にマオは疑問を持った。

「五つのしるしとは一体なんだ。」

男はまずそうな顔をしながら言った。

「どうせ、君には五つのしるしを集めるのは無理だろうから、せめてこれだけでも教えてやろう。凄いおまけだ。五つのしるしとは平成時代に来たβ人、ガウダマ・シダールダンダが地球に五つのしるしを残していった。白の世界には正義のしるし・炎のしるし・友情のしるし、黒、つまり悪の世界には、悪魔のしるし、死者のしるしがあるんだそう。うだ。しかも、黒の世界はつわものばかりだそう。うだ。これをすべて集めれば地球に隕石がぶつかることはなくなるだろう。」

第90話 炎のしるし

マオはもう少し話を聞こうとした。しかし、もうそこには居なかった。

朝。マオは熱斗たちに夜中のことを言った。

マオは五つのしるしを探すたびに出ようと熱斗やペナルティに問いかけた。しかし、反応は鈍かった。それだけではどこに誰がいるのか分からなかった。

その時、マオのナビに異変が生じた。

「何か聞こえないか。」

それは町中に響き渡っていた。言葉ではない。何かを伝えようと必死になっていた。

マオたちは飛び出した。

町のはずれの公園がその音源だった。そこには一つのチップが落ちていた。

「一体なんだろう。このチップ。」

熱斗が言った。マオがそれを取ると自然に音は消えた。

「これは、もしかしたら7つのしるしを探すためのチップなのでは？」

マオはそのチップをPETに入れた。

PETは光を発した。光から開放された時、地図が表示されていた。まるでソナーのようだ。

そこに赤い丸が映っていた。

「とりあえずここに行ってみよう。」

そこは秋原中学校だった。

「どうやら職員室にいたみたいだ。」

熱斗は嫌がった。生徒の居ない教室を通りすぎた奥が職員室だ。そして、職員室に着いた。

マオはノックをして入る。

PETを見ると梅園先生が座っている位置を赤い丸は指していた。

「おお。どうした。数学の質問か。それとも進路のことか。」

梅園先生がマオに気づいて言った。

しかし、マオの様子に気づいた梅園先生は聞いた。

「どうしたんだ。」

マオは言った。

「先生に僕がネットセーバーになったことを言いましたよね。そして、今、実は地球が危ない状況になっているんです。それを解決するには五つのしるしというものを集めなければならないのです。」

梅園先生は言った。

「それで五つのしるしを持っているのが私だと。」

梅園先生は考えた。そして、梅園先生は重い口を開けた。

「実は、私が教師になる前に教授からこういわれたんです。『君にはやる気がある。私が継いだあるものを君にあげよう。これをもっている者はやる気を十分に持って授業に望めるらしい。』そして、そのしるしを僕が受け継いだんだ。何しろ教授が若い頃にある人から授けられたそうさ。その後、その教授も死に、僕は教員となった。今、それが使われる時ならば教授のように受け継がせるべきだろう。」

梅園先生はマオにそのしるしをあげた。

マオはお礼を言った。

しかし、あと三つを探すのは大変だ。一体この先どうなるのであるのか。

第91話 惑星 たこ焼き！

その頃、科学省ではある天体が軌道はずしたことを察知した。それは、日本のある博士によって発見された、小惑星 たこ焼きだった。それが祐一郎の耳に入った。

「たこやきが軌道をずらして、あと300日後には地球に衝突するだど。」

祐一郎は熱斗たちを呼び出した。

マオはすでに1つ目のしるし、炎のしるしを手に入れていた。残り3つ。まだまだ時間があるようにも思われるが、どこにあるかも分からない。しかし、まだ雄一郎には言っていない。祐一郎が言った。

「小惑星たこやきが軌道はずれて地球に向かい始めたそうだ。多分、正義のしるしのせいだろう。」

そして、マオが言った。昨日の夜中にあったこと、そして、五つのしるしの一つを確保したことを。

祐一郎は、言った。

「それを集めれば、たこ焼きの軌道を変えられる可能性があるというのか。」

祐一郎に光が差した。

「よし、マオ。熱斗。ペナルティ。それにメイリィやシロウを旅に出させる。これは、地球が滅ぶかもしれない一大事なんだ。世界各地を回り、五つのしるしをすべて集めて戻ってくる任務を任せる。クロスフュージョンメンバーなどにも応援に行かせよう。」

その時だった。不気味な音楽と共に湯田中が現れた。

湯田中は言った。

「計画通りだな。お前たちに五つのしるしを集めさせること。それが、おれの目的だったんだ。」

マオは怒った。しかし、湯田中はこう答えた。

「君が怒るのも当然だろう。しかし、人には欲というものがある。まあ、地球にたこやきがぶつかるそうだが、俺なら対処できる。もうすでに友情のしるしをGETしたのだからな。」

マオと湯田中の勝負となりざる終えなくなった。

「どうだ。もしも料理勝負でお前らが勝ったら、俺が持っている友情のしるしをあげよう。しかし、お前らが負けたら俺が2つをもらうというのはいかがかね。」

マオには好都合だ。しかし、湯田中は考えていた。

「勝負は四対四の勝負だ。」

つまり、湯田中はあともう三人連れてこなければならぬ。そこで、大川を呼んだのである。しかし、大川は牛丼が世界一うまいと思っている女、所詮、何も役に立たない。一体、湯田中はあと二人をどうするのであるのか。

第92話 湯田中の秘策

湯田中は二人を呼んだ。その二人を見て熱斗は驚いた。二人とも有名な料理長である。こんな相手に勝てるのだろうか。マオは熱斗を呼んだ。

「協力してくれないか。」

マオの言葉に熱斗は驚いた。料理を食べるのはすきでも料理を作ることは苦手である。

しかし、マオにはそれしか方法がなかった。

「じゃあ、料理の量はいくらでもいい、但し条件をつける。それは、冬ならではの料理だ。」

マオは早速思いついた。それは鍋だ。

「よし、冬といえば鍋、そして、魚介類と野菜のコンビネーションで作るぞ。」

マオは取り掛かった。熱斗はただ見ているだけになってしまった。

「あんなに余裕をかましていいのだろうか。こっちは日本でも有名な料理人二人を連れてきたんだぞ。あんな少年に二人にかなうような料理は出せない。」

湯田中は余裕の表情をかましていた。

二人の料理人はどんどん料理を作っていく。こちらは、創作料理による冬の表現だ。

そして、二グループの審査が始まった。両チームがそれぞれ相手のチームの料理を食べ比べる。それから、第三者による審査へと移る。まずは、敵チームの料理を食べる。確かに目を楽しませてくれる。さらに味もおいしい。

湯田中も驚いていた。ただの料理天才少年とはかけ離れていた。両チームとも同じ点数をつけた。そして、第三者による審査が始まった。審査は炎山ややいなど金持ちによる審査だった。舌の肥えた金持ちを審査員として迎えるのが一番よかった。

そして、点数が発表された。

なんと、一点差でマオたちが勝ってしまった。

悔しがった湯田中は言った。

「お前らががんばったことは認めてやる。しかし、お前らには絶対七つのしるしを集めさせるものか。」

湯田中はある呪文を唱え始めた。

ペナルティは体の底から湧き上がる何かを感じた。思わず声を上げた。

「どうしたペナルティ。」

ペナルティに声をかけるがもう姿はペナルティではなかった。マオは湯田中に言った。

「一体、何をした。」

第93話 ペナルティ暴走!

湯田中は答えた。

「俺の先祖はあのβ人の子孫なんだ。そして、同時にβ人として受け継いだものがある。それがあの呪文だ。あの呪文をかけたからにはもうどうしようもない。暴れに暴れ、そして、力尽きるまでのモンスター状態のままだろう。」

ペナルティはもう人間とは思えないほどに変貌していた。

マオは湯田中に怒った。湯田中は立ち去っていった。マオが考えている時、熱斗が言った。

「俺が行く。」

そういうと熱斗はPETに獣化プログラムの入ったチップを入れてロックマンとクロスフュージョンした。

しかし、ペナルティは強かった。湯田中が言ったとおり、歯が立たなかった。

そこへ一人のおばあさんが来た。

「その若いもの。お困りのようですね。」

おばあさんはマオに声をかけてきた。

マオはおばあさんに今までのことを話した。しかし、マオにもおばあさんに話しても何もならないことぐらい分かっていた。しかし、おばあさんが言った。

「それにはいい方法があるのじゃ。昔、江戸の日本橋から船があるところへ出ていた。その終点には成田街道という道が走っていた。江戸から成田にお参りに行く時にはよく使っていたそうだ。成田街道の船着場には一軒のうどん屋があった。そこに一人の修行の人が倒れこんできた。その店主があるうどんを差し出した所、修行のお坊さんがたちまち元気になったそうだ。そのうどん屋は明治には無くなってしまった。しかし、その子孫が作ったパンには何か不思議な力があるそうだ。」

おばあさんからその話を聞いたマオはおばあさんにパン屋の場所を聞いた。しかし、おばあさんはこのようなことを言った。

「この町から地下鉄で三十分のところにそのうどん屋があった場所がある。その近くでパン屋をやっていると聞く。」

マオはともかく地下鉄に乗り込んだ。

第94話 謎のパン

地下鉄は地上に出た。海から近いみたいで潮の香りが漂ってくる。もうそろそろ三十分が経つ。そして、ある郊外の駅に降り立った。

「本で調べたとおりだ。ここが昔、江戸から船でここまで出ていたそうさ。」

片手には成田参道史という本が握られていた。

そして、船着場の跡地に来た。そこには塔が建てられ、歴史が書かれていた。

「さてどこにうどん屋があったか、この本によると通り沿いにあったというが。」

マオがうろちよろしているバス通り沿いに看板が立っていた。そこには笹屋うどん跡地と書かれていた。

「ここだ。しかし、これが見つかってもパン屋が見つからなければ意味がない。」

またうろちよろしていると又看板が立っていた。

看板にはパン屋入り口と書かれていた。

その通りにすすむとひっそりとパン屋が立っていた。

どこにもあるようなパン屋だった。一体、どんなパンだろうか。

パン屋には普通のパンがところせましに並べられていた。しかし、なぜか中華まんがレジの下に置かれていた。触ってみるとかすかに何かが動いていた。

「すみませんこの中華マンをください。」

マオが言った。そしたら店員にこう言われた。

「このパンには特別な力が働いています。今、店主を呼んでいただけますのお待ちください。」

一体この店はどうなっているのだろうか。パンを買うのにわざわざ店主を呼んでくるなんて・・・。

そんなことを思っていると店主が現れた。

「このパンを売るには久しぶりだ。このパンには先祖代々継いで来たある工法で作られている。それは、うどん屋をやっていたころにさかのぼる。その店主は私の先祖だ。その先祖からお客さんにこのパンの怖さを教えてくれと頼まれている。」

店長は工房に連れてってくれた。

「これは。」

マオは驚いた。そこには井戸があった。

「この井戸には特別な力がある。この井戸には龍が宿っている。みかし、洪水の時、この地に龍が舞い降りたという伝説がある。その龍が宿ったのがこの井戸だといわれているのだ。この井戸の水には人間の力を最大限に発揮させる。さらにある一部の人間に使うとそれによって地球を救うことができるくらいのが発揮されるそうだ。」

マオは、店主にパンを買うことを言った。店主は浮かない顔をしながらパンを売った。

第95話 戦

その頃ペナルティは町を確実に壊していった。

マオが中華まんを食べた瞬間、とんでもないことが起きた。

マオの体中に稲妻が走った。

「これなら行ける。」

急いでペナルティの所へ向かった。

「このままではすべてがなくなってしまう。」

ペナルティは秋原港町という所で暴れていた。

そこに一人の少年が立っているではないか。皆は啞然とした。

それはマオだった。モンスターと化したペナルティよりも少し小さい。しかし、マオの体には何かの力がみなぎっていた。

マオはペナルティに殴りかかった。

しかし、モンスターと化したペナルティはさもなくったような顔をしている。

やはり無理なのか。皆は救世主の登場に落胆した。

マオにも焦りが見えた。その焦りに応じるかのようにマークの力が強くなった。

周りにいる人たちが叫んだ。

「龍だ。二つの龍が戦っている。」

マオとペナルティには分からなかったが、他の人は分かった。その龍がやられればその龍が宿った方にダメージが与えられた。

熱斗や祐一郎が駆けつけた。

祐一郎は信じられない顔をしていた。マークにはまだまだ信じられない力があるとは。

モンスターと化したペナルティの心にも変化が現れていた。本当のペナルティに戻ろうとする思いが少しずつモンスターの心を侵食していった。

モンスターは追いやられていた。ペナルティの思いとマオの力によ

ってモンスターは元のペナルティに戻ろうとしていた。悲痛な叫びと共に周りが光に包まれた。

「一体何が起きようとしているのだ。」

その光の中では、元のペナルティがいた。マオと二人になった。ペナルティが言った。

「ありがとう。助けてくれて、この悪魔のしるしをマオにあげる。僕もこんなものをもっているとは、心がきれいだ和李さんから認められてここに来たのにここで暴れてしまった。」

マオは優しい言葉をかけた。それを聞くとペナルティは体を横にした。

「大丈夫か。」

マオが言葉をかけたが応答がなかった。それと同時に光から開放された。

ペナルティは急いで病院に運ばれた。

「大丈夫だろうか。」

マオはペナルティのことが心配だった。主治医の先生から言われた。「ただの疲れです。今日は安静にしておいてください。」

マオはそれを聞いてほっとした。しかし、まだほっと一息つけられなかった。

第96話 死者のしるし

今宵には悪魔祓いなどの密教的文化が流行っている。

夜中、ある一人の男が熱斗の家の前に来た。

そして、火をたき始めた。火が燃え盛る中、その男はふんどし一丁でその火の中に飛び込んだ。

無事に男は通過できたものの、ずいぶん危険である。その次に火の中から2つのわら人形を取り出した。少し火が移っているものの男は火のついた部分を持った。

そしてそれをいきなり五寸釘で家の門柱に打ち込んだ。打ち込んだわら人形には2人の名前が書かれていた。

朝、熱斗の母が驚いた。わら人形が門柱にそれも2つ打ち込まれていたものだからたいそうびびくりしたことだろう。急いでマオを呼んできた。マオは驚いた。門柱にわら人形が2つ。しかも自分と熱斗の名前が書かれているのだから。熱斗が起きてきた。しかし、熱斗はぼけていたのか階段から落ちてしまった。

「大丈夫か。」

熱斗の母が声をかれるものの熱斗はそれどころではない。早く学校に行かなければ担任の先生にいやみたらしく説教を受けることとなる。この前は家にまで電話をかけられた。

そんなことを考えているひまもなく熱斗は出て行く。しかし、マオは出て行くのが早い。マオが出る頃はまだ熱斗は熟睡している頃である。

学校に着いて気がついた。今日までの宿題があったのだ。しかも、教科は担任が持っている教科だった。しかし、もう遅かった。

放課後、厳しく注意されて家に帰る途中、ある男に声をかけられた。

「すいません。熱斗君ですか。」

その男の顔色は悪かった。不気味なオーラを出していた。

男は熱斗をあるところへ連れて行った。そこはお経がずっと流れて

いた。ロックマンが怖がった。

仏前には誰かが横たわっている。マオだ。

「一体、何をした。」

熱斗が振り向いた時には男は居なかった。

第97話 靈城

いきなり天井から男の声がした。

「ようこそ。我が城、靈城へ。ここには魂の集まる場所があるといわれていて誰もが近寄らない。さらに、ここに入ったものは二度とこの城から出ることが出来ない。さあどうする少年たちよ。このまま骨になるまでここにいろかそれとも試練を受けてここから出るかだ。」

マオが目を覚ました。しかし、ここがどこかすらも分からないらしい。

「じゃあ。その試練を受けてたとうではないか。」

熱斗が男らしく言った。

「俺にはある力を持っている。多分、君たちが探しているであろう力だ。」

マオは男に聞いた。

「まさか。死者のしるしですか。」

男は答えた。

「ああ。そうだ。この力のおかげで俺の身分は安泰だったのだ。お前たちはその力で地球を救おうとしているらしいが、もしもこの試練に合格できたのならはこの力をお前に授けようではないか。」
そして、男が目の前にある門を開けた。

「さあ。ここが試練の場だ。」

そこには赤く照らされた滝や沼があった。

「第一関門だ。この滝にどれだけ浸かっていられるかだ。多分お前みたいな集中力がいかにもなさそうな奴には無理だろう。」

熱斗は怒った。襖の準備をして滝に打たれ始めた。しかし、その滝の水はだんだん暑くなっていった。

ついに我慢が出来なくなった熱斗は飛び出してしまった。

「お前の力そんなものか。山伏など0℃近い氷水の中に一日中打た

れているんだ。やはり最近の奴には合わないのか。」

熱斗の怒りが又たまり始めた。そして、滝にもう一度打たれ始めた。「ほほう。どれだけでもつか。六十分その状態で居られるのであれば次の関門へ進めることが出来ることとしてやろう。」

熱斗は集中していた。まるでブツタのようだった。ブツタはある日、心の中に境地が開かれたと言った。それが仏教の始まりだ。六十分が経った。

「よし。次の関門だ。次の関門は座禅だ。もし一時間座禅が組めたらマークをやって、お前らを変元の場所に返そう。しかし、もしも失敗すれば地下の牢屋で地球が滅ぶまで一生生活してもらう。」これはマオが手を上げた。そして座禅が始まった。横には坊主がいた。

マオの集中力は並大抵ではないと熱斗は思った。料理でつんだ集中力は坊主も感心していた。

第98話 もう一つのしるしの行方

三十分が経った。しかし、坊主の持っている棒は一度もたたかれることがなかった。

その調子で四十分、五十分と経っていった。ついに一時間だ。

男は言った。

「お前の集中力は凄い。皆のためにその集中力を使って欲しい。」
男はマオと熱斗を元の場所へ返した。

「ついにあと一つのしるし。友情のしるしだけだ。」

その時、湯田中が来た。

「今までのことをすべて見せてもらった。お前らにもうすぐ友情のしるしが宿るだろう。友情の厚いお前らならきつとそっちから来るだろう」

それを言い終わると湯田中は又消えた。

「友情のしるしが宿ると。」

マオは思っていた。

小惑星 たこ焼きは予想よりも早く地球に到達しそうだった。

「このままていくと明日には、たこやきが日本に直撃します。たこやきは地球と金星の軌道の間に入り、その勢いで秋原町にぶつかる。もうこのまま回避は出来ません。」

その報告に祐一郎は頭を悩ませていた。これは一大事だ。ぶつかればたとえ小惑星とも地球には甚大な被害が出る。公転面がずれれば世界の気候が変わる。

夜、マオと熱斗、それにペナルティを呼んだ。

「明日にはたこ焼きはぶつかるそうだ。早くしなければ地球は多分、生物が存在できない星になってしまいうだろう。」

その頃、友情のしるしは新たな持ち主へ移動する準備をはじめていた。

夜、マオがふと目がさめるとマオの居る所へ向かって流れ星が来る

ではない。

マオは目をつぶってしまった。しかし、その後何もなかったように流星は消えてしまった。

朝、マオが起きてP E Tを見てみるとなんと七つ集まっていたのである。

「湯田中が言ったように友情のしるしがここに集まった。」

熱斗たちにもこう言った。しかし、もう時間がなかった。今日、惑星たこやきが地球に来るのである。

マオは緊張していた。

第99話 地球を守れ!

朝、あの事件があった後、すぐに科学省に招集が掛かった。

「今日が本番だ。後は健闘を祈るだけだ。」

祐一郎はそれを言うことしか出来なかった。マオたちには任せられない。

「後、二時間で惑星たこやきがぶつかります。」

科学省の中では緊張感が漂っていた。

作戦はマオにクロスフュージョンしてもらって、そして、星を壊すという壮大なものだった。しかし、まったく初めての経験でちゃんと計画どおり進むかは不透明だ。

「たこやきがディメンショナルエリアの射程園内に入ったらディメンショナルエリアを発射する。」

祐一郎は丁寧にスタッフを確認した。

そして、時間は刻々と過ぎていく。

「よし、指定した場所に熱斗と一緒に向かってもらう。」

ついにマオたちは到達地点に行った。一つ間違えれば大惨事だ。

マオとペナルティは待った。

星がだんだん大きくなって行く。周りの人は科学省などの公共機関に避難させた。

「マオ、熱斗。準備はいいか。」

祐一郎は確認した。

そして、発射させた。

秋原町は一面、ディメンショナルエリアに包まれた。それと同時にマオたちはクロスフュージョンした。

クロスフュージョンしたマオは姿が変わっていた。確かにクロスフュージョンすれば姿は変わるものの、明らかに七つのしるしの効果によってパワーアップしていた。

マオの戦いぶりによって地球の生命が変わっていく。

マオは星を何とか押さえきれた。しかし、それだけで一杯だった。熱斗はロックマンとクロスフュージョンしたものの見ているだけで何も手が出せなかった。普通のクロスフュージョンではとても星なごを割れるような力はなかった。

しかし、マオにはそれがあった。七つのしるしの力だ。一つのしるしでも数々の試練を乗り越える力があるのだ。七つのしるしの力は絶大なものだった。

第100話 たこ焼き消滅!!

しかしこのままではマオに負担がかさみ結果地球にぶつかってしまふことは確実だ。マオは熱斗にあるものを渡した。それはソウルユニゾンという行為だった。ソウルユニゾンをすると相手の力が自分に加算されるというものだった。

「熱斗。それにロックマン。僕が持っている力。つまり七つのしるしの力を君たちに授ける。きっと大丈夫だ。」

しかし、熱斗は迷った。自分に宿っていた正義のしるしは逃げてしまった。本当に大丈夫なのだろうか。

「早く。もう僕にはこれを壊すのは無理だ。」

マオの言葉を信じ、熱斗はソウルユニゾンをした。

確実に熱斗は強くなった。しかし、何故熱斗から消えてしまったのだろうか。そんなことを考えている暇などなかった。

「よしロックマン。一揆にやつつけてしまおうぞ。」

熱斗とロックマンはタコ焼きを投げた。マオには無理だったが、熱斗は出来た。

そして、一気に切り込んだ。

一瞬、時の流れが止まったように感じた。皆固唾を呑んだ。

そして、星は砕け散った。

「やった。」

しかし、このままでは破片は住宅に降り注ぎ、もうその住宅には住めなくなってしまう。

急いで熱斗はカードを入れた。そして、破片を海の方へ飛ばした。今度こそやったぞと熱斗は思った。

やがてディメンショナルエリアは消えた。

「やったな。マオ」

祐一郎が言った。しかし、マオはこう答えた。

「いや、もしも熱斗が居なければ、この町は破壊されていたでしょ

う。」

祐一郎は熱斗の方を向いた。

熱斗は少し疲れていた。

「熱斗。えらいぞ。」

祐一郎は熱斗に声をかけた。最後は熱斗とロックマンが片付けたことがマオの行動から分かった。

その時、マオの体調が急変した。

祐一郎は焦った。

第101話 時空病

マオは科学省で精密検査を受けた。

「この病気は始めて見るものなのだが、原因は分かっている。どうやら時空と七つのしるしが原因らしい。前、一回マオが自動的に過去へ戻ってしまったことがあっただろう。それは実はしるしのプログラムだったみたいなんだ。時空を越えるとその人が元の世界に戻らなければならないという指示が出るようになっていたんだ。しかも人間が時空越えの機械を作成することを予測していたように・・・。マオはじきにもとの世界へ帰らなければならなくなる。もう時空は封鎖されてしまったが、このくらいの力があれば戻れるだろう。僕は人間が時空を越えてはいけないのだと思ひ知らされた。多分、マオにもそっちの方がよいだろう。」

熱斗はおさえ切れなかった。前よりもその気持ちはずっと大きかった。

熱斗は考えた。もうこれはどうすることも出来ない。だったら今出来ることをやろうと。

その夜ペナルティと相談した。

ペナルティはあることを思い出した。マオが訪ねたパン屋の近くにもう一本大きな川があった。

ペナルティはそのことを本で知った。

そう。それはあの成田街道についての本だ。

ペナルティが数日前、図書館にマオが借りた本を返しに行く途中に読んだのだ。

そこには二千年ごろ、川はバーベキュウでにぎわっていたと。

そして、そこに風景はとてもすばらしかったらしい。

何か自然が十分感じられたそうだ。

秋原町にもたしかに自然はある。しかし、たまにはそういうところに連れて行くのもいいと考えたのだった。

第102話　いつかきつと

ある日曜日、マオとペナルティ。それに熱斗たちはあの河川敷でバーベキュウを楽しんでいた。

これがマオたちにとってついに最後の時間になろうと思っていた。しかし、熱斗の心の中はそういう雰囲気ではなかった。

それはペナルティの中も同じだった。

お互いで助け合った友。まさか別れようとは本当に受け入れられないものだった。

バーベキュウも終わった。その時、急に周りが眩しくなった。ついに別れの時が来た。

熱斗とペナルティは言った。

「又会えるといいな。今度はこんなことに巻き込まれずに平和に。」マオも言った。

「その時は料理の腕を上げておくよ。」

そして、マオとメイリィ。それにシロウは元の世界へ旅立って行った。

「ところでなぜペナルティは元の世界に戻れないんだ。」

熱斗はふと思った。それにはペナルティの事情があった。

ペナルティはそれを話し始めた。

熱斗に話していると急に雪が降ってきた。

「この続きは電車の中で。」

もう冬だった。家に戻るともう一面雪だらけだった。

もうそろそろ元旦だ。しかし、その元旦から地球では異常気象が続くとはおもってもいなかった。

そして、マオたちは元の世界へ戻ってきた。しかし、時代はすっかり変わっていた。マオが家のある場所に戻ってきた時。もうすでにそこにはなかった。

見てみるとそこに紙が張ってあった。

そこには店をつぶすということが書かれていた。

マオは力を落としてしまった。時代は日本で言えば明治時代。その頃中国はとんでもないことになっていた時代である。

少しの期間でも居なければ様相が変わってしまうのだ。

こういう混乱は地球上からなくなることはないだろう。そう。たとえ平和だと言われていた熱斗がいる時代でも・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0140b/>

ペナルティ

2010年11月8日15時30分発行